JCSS2015
@chiba university

The 32nd Annual Meeting of the Japanese Cognitive Science Society

日本認知科学会第 32 回大会

抄録集

主催：　日本認知科学会
開催校：　千葉大学
会場：　千葉大学総合校舎 B/D
会期：　2015 年 9 月 18～20 日

キャンパスマップ　・・・・・・・ 4
フロアマップ　・・・・・・・ 5
会場案内　・・・・・・・ 6
大会スケジュール　・・・・・・・ 7
参加者へのご案内　・・・・・・・ 8
公開シンポジウム　・・・・・・・ 9
野島賞報告セッション　・・・・・・・ 9
フェロー記念講演　・・・・・・・ 9
特別講演　・・・・・・・ 10
三宅なほみ氏追悼企画　・・・・・・・ 10
オーガナイズドセッション・・・・・・ 11
口頭発表１　・・・・・・・ 38
口頭発表２　・・・・・・・ 39
フラッシュトーク　・・・・・・・ 40
ポスターセッション１　・・・・・・・ 40
口頭発表３　・・・・・・・ 48
ポスターセッション２　・・・・・・・ 49
ポスターセッション３　・・・・・・・ 56
索引　・・・・・・・ 64
広告

査読者一覧（敬称略）

本大会の発表論文の査読にあたっては以下の方々にご協力いただきました．記して感謝を申し上げます。

青山征彦
石井敬子
伊藤朋子
上野泰治
大西仁
小倉加奈代
金井明人
神崎奈奈
黒沢学
小橋康章
阪田真己子
篠原和子
下嶋篤
鈴木栄幸
髙木幸子
高橋麻衣子
田中幹大
都築誉史
寺田和憲
中村國則
永井由佳里
野村竜也
原田なをみ
平原憲道
牧岡省吾
水野りか
守一雄
山岸侯彦
湯浅将英

浅川伸一
石川悟
伊東昌子
内海彰
岡田浩之
小野哲雄
金山範明
喜多伸一
黒田航
小林由紀
佐々木正人
Shimase, Misa Grace
白水始
鈴木宏昭
高梨克也
竹内勇剛
田中吉史
寺井あすか
伝康晴
中山晃
南部美砂子
服部雅史
原田康也
福田健
松井理直
宮崎美智子
森下美和
山崎治
横澤一彦

阿部慶賀
石崎俊
伊藤友一
榎本美香
岡田美智男
片桐恭弘
川合伸幸
清河幸子
郡司隆男
小堀聡
定延利之
嶋田総太郎
新垣紀子
諏訪正樹
高橋達二
田中章浩
田部井賢一
寺井仁
樋田浩一
永井淳一
荷方邦夫
林勇吾
日高昇平
藤木大介
松香敏彦
村越真
森田純哉
山本倫也
横森大輔

粟津俊二
伊藤毅志
ウィッツェル楠緒子
大石衡聴
小川昭利
加藤浩
河原哲雄
久保賢太
小島一晃
小松孝徳
佐藤裕
島田英昭
神長伸幸
高木光太郎
高橋英之
田中彰吾
田村昌彦
寺尾敦
富田英司
永井聖剛
野口尚孝
原田悦子
平石界
本田秀仁
松田剛
村山功
森田均
山森良枝
吉川厚

賛助団体御芳名

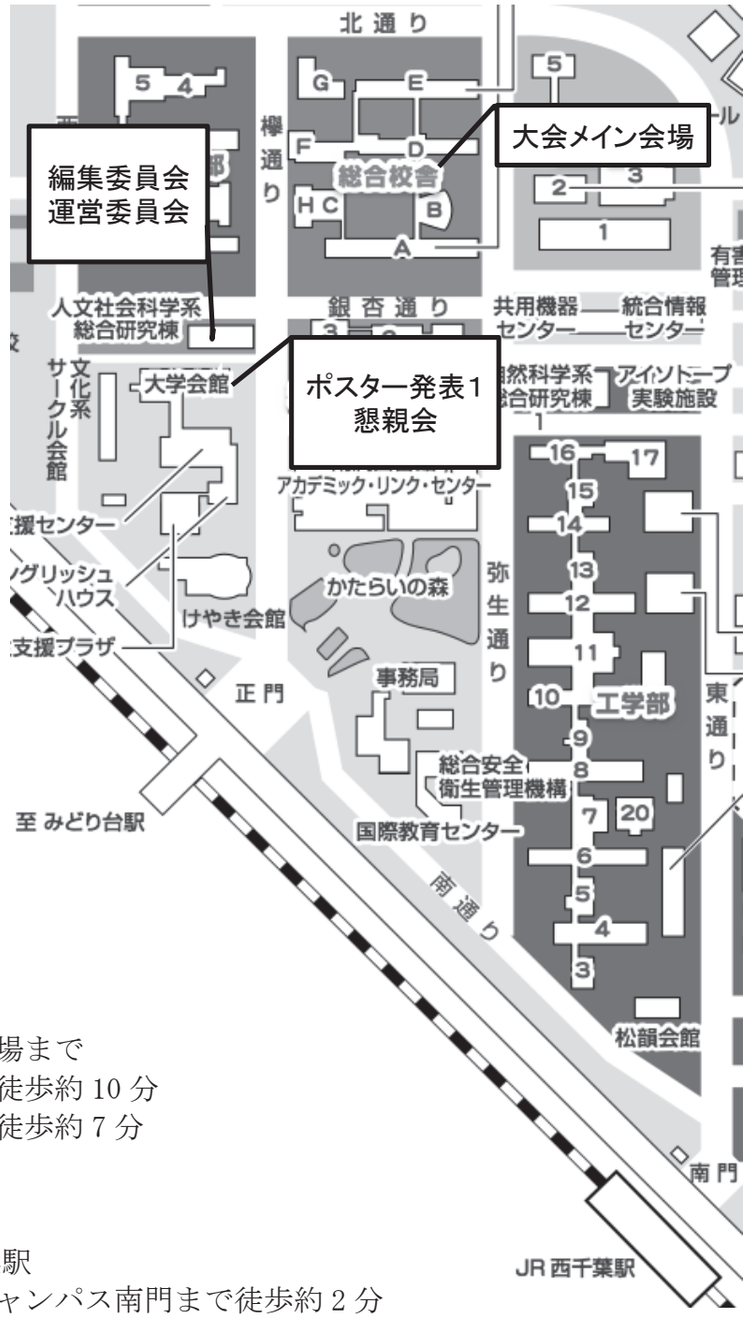
＜協力＞

公益財団法人ちば国際コンベンションビューロー

＜展示・広告＞

株式会社 近代科学社	（展示）
トビー・テクノロジー株式会社	（展示）
株式会社 ひつじ書房	（展示・広告）
株式会社 アイアール・アルト	（広告）
株式会社 内田洋行	（広告）
株式会社 北大路書房	（広告）
株式会社 紀伊國屋出版 洋書部	（広告）
共立出版株式会社	（広告）
Sage Publications 日本支社	（広告）
財団法人 放送大学教育振興会	（広告）
株式会社 北樹出版	（広告）

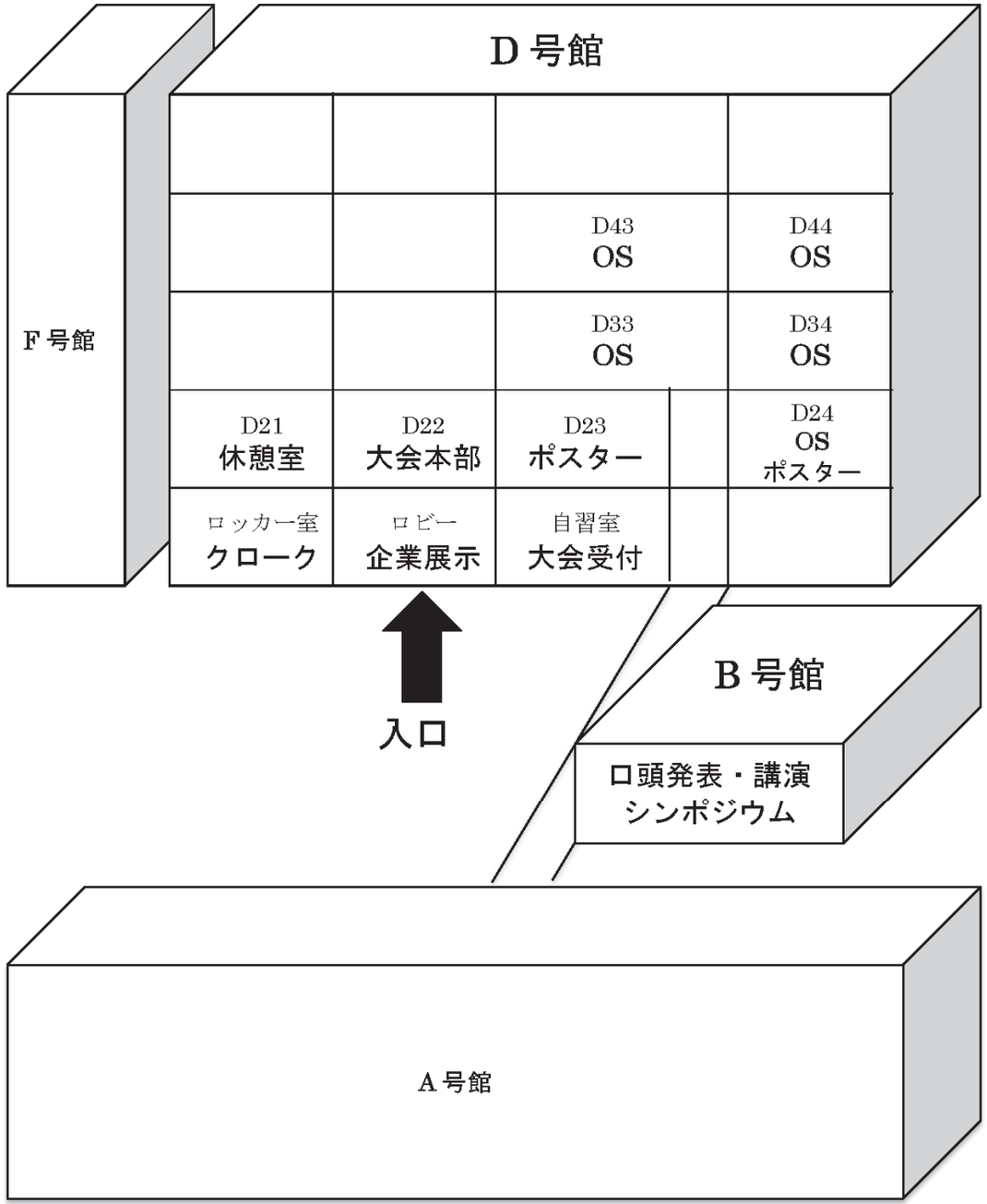
キャンパスマップ



大会メイン会場まで
- 南門から徒歩約 10 分
- 正門から徒歩約 7 分

最寄り駅
- JR 西千葉駅
  西千葉キャンパス南門まで徒歩約 2 分
- 京成みどり台駅
  西千葉キャンパス正門まで徒歩約 7 分

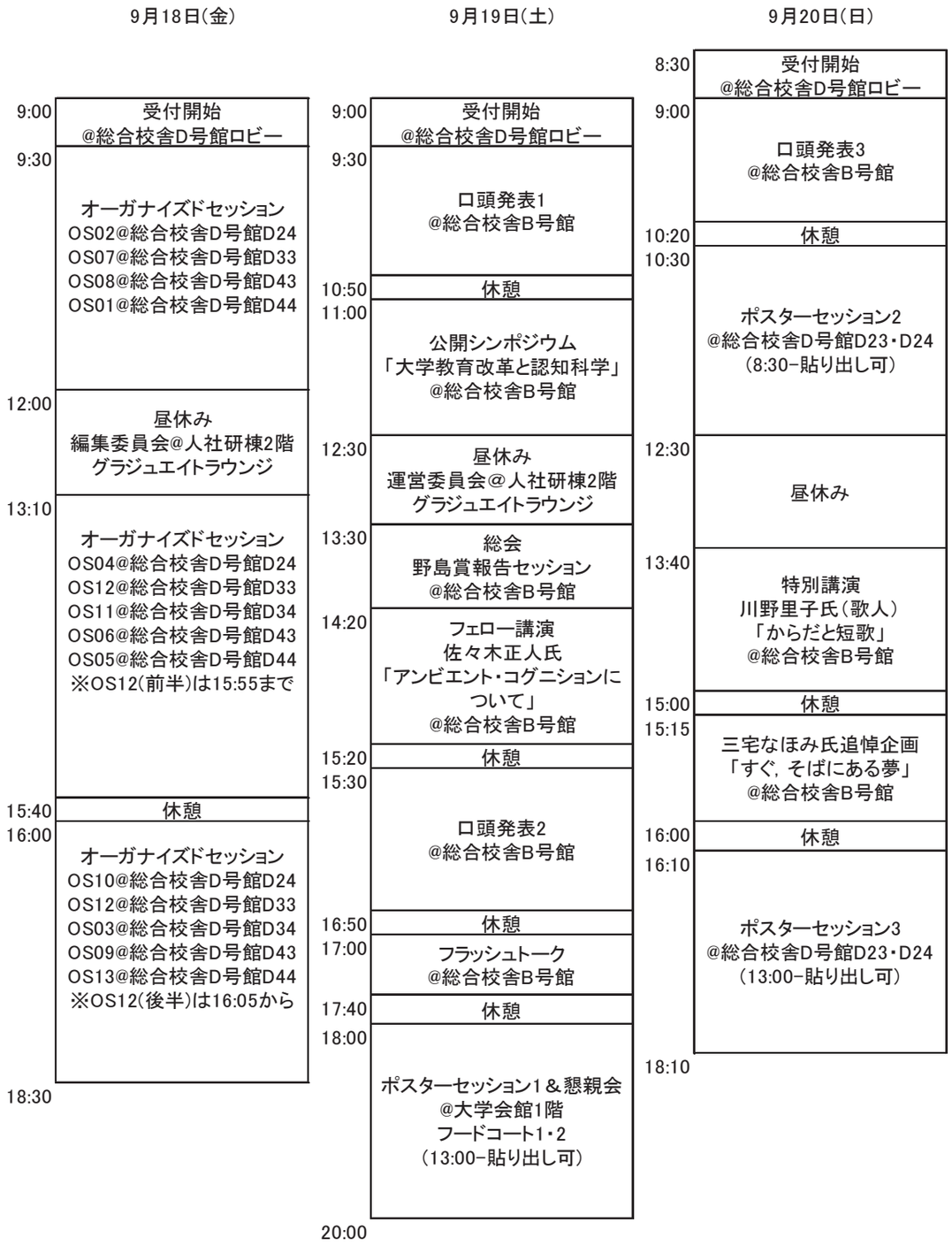
フロアマップ



会場案内

	会場	18 日（金）	19 日（土）	20 日（日）
大会受付	総合校舎 D 号館 自習室	9:00–17:00	9:00–17:00	8:30–16:00
クローク	総合校舎 D 号館 ロッカー室	9:00–19:00	9:00–18:00	8:30–18:30
大会本部	総合校舎 D 号館 D22	8:00–19:00	8:00–18:00	8:00–19:00
休憩室	総合校舎 D 号館 D21	9:00–18:00	9:00–18:00	9:00–18:00
公開シンポジウム	総合校舎 B 号館		11:00–12:30	
野島賞報告セッション	総合校舎 B 号館		14:00–14:20	
フェロー講演	総合校舎 B 号館		14:20–15:20	
特別講演	総合校舎 B 号館			13:40–15:00
三宅なほみ氏追悼企画	総合校舎 B 号館			15:15–16:00
口頭セッション１	総合校舎 B 号館		9:30–10:50	
口頭セッション２	総合校舎 B 号館		15:30–16:50	
口頭セッション３	総合校舎 B 号館			9:00–10:20
フラッシュトーク	総合校舎 B 号館		17:00–17:40	
ポスターセッション１	大学会館 フードコート 1・2		18:00–19:40	
ポスターセッション２	総合校舎 D 号館 D23・D24			10:30–12:30
ポスターセッション３	総合校舎 D 号館 D23・D24			16:10–18:10
オーガナイズド(OS1)	総合校舎 D 号館 D44	9:30–12:00		
オーガナイズド(OS2)	総合校舎 D 号館 D24	9:30–12:00		
オーガナイズド(OS3)	総合校舎 D 号館 D34	16:00–18:30		
オーガナイズド(OS4)	総合校舎 D 号館 D24	13:10–15:40		
オーガナイズド(OS5)	総合校舎 D 号館 D44	13:10–15:40		
オーガナイズド(OS6)	総合校舎 D 号館 D43	13:10–15:40		
オーガナイズド(OS7)	総合校舎 D 号館 D33	9:30–12:00		
オーガナイズド(OS8)	総合校舎 D 号館 D43	9:30–12:00		
オーガナイズド(OS9)	総合校舎 D 号館 D43	16:00–18:30		
オーガナイズド(OS10)	総合校舎 D 号館 D24	16:00–18:30		
オーガナイズド(OS11)	総合校舎 D 号館 D34	13:10–15:40		
オーガナイズド(OS12)	総合校舎 D 号館 D33	13:10–18:30		
オーガナイズド(OS13)	総合校舎 D 号館 D44	16:00–18:30		
総会	総合校舎 B 号館		13:30–14:00	
編集委員会	人文社会科学系総合 研究棟 2 階グラジュ エイトラウンジ(GL)	12:00–13:10		
運営委員会	人文社会科学系総合 研究棟 2 階 GL		12:30–13:30	
企業展示	総合校舎 D 号館 ロビー			

大会スケジュール



参加者へのご案内

(1)　大会参加受付

受付場所:　　千葉大学総合校舎D号館
受付時間:　　18日(金) 9:00 ～ 17:00
　　19日(土) 9:00 ～ 17:00
　　20日(日) 8:30 ～ 16:00

(2)　発表者へのご案内

- 口頭発表
  発表時間15分，質疑応答5分の予定でご準備ください.
  発表会場では，プロジェクターとスピーカーをPCに接続して使用することができます. PCは各自でご用意ください.
- ポスター発表
  ポスターサイズは、A0縦(841 × 1189 ミリ)でお願いします。
  ポスターの掲示に必要なピン等はポスター会場受付にてお渡しします.
  当日のセッション開始までにはポスターを掲示してください.
  19日(土)は13:00～，20日(日)は8:30～および13:00～掲示できます.
  在籍責任時間は，原則以下の通りとします.
  　ポスター1(19日):奇数番号 18:00 ～ 18:50 偶数番号 18:50 ～ 19:40
  　ポスター2(20日):奇数番号 10:30 ～ 11:30 偶数番号 11:30 ～ 12:30
  　ポスター3(20日):奇数番号 16:10 ～ 17:10 偶数番号 17:10 ～ 18:10
- フラッシュトーク(19日):17:00―17:40
  ポスター1の研究概要を1分間で説明して下さい. PCは各自でご用意下さい.
  なお，ポスター1の会場はフラッシュトークの会場とは離れていますので(徒歩約3分)，迅速に移動していただくようお願いします.
- オーガナイズドセッション
  発表会場では，プロジェクターとスピーカーをPCに接続して使用することができます. PCは各自でご用意ください.
  その他，事前に要望のあった機器を準備しております.

(3)　総会のお知らせ

日本認知科学会の会員総会が19日(土)13:30より総合校舎B号館で開催されます. 決算，予算の承認があります. 認知科学会会員の方はぜひご参加ください.

(4)　運営委員会・編集委員会

編集委員会は18日(金)12:00より，運営委員会は19日(土)12:30より，いずれも人文社会科学系総合研究棟2階グラジュエイトラウンジで開催されます. 大会会場とは違う建物ですので，ご注意ください.

(5)　クローク

クロークは総合校舎D号館1階にございます. ご利用可能時間は以下のとおりです.
18日(金) 9:00 ～ 19:00　　19日(土) 9:00 ～ 18:00　　20日(日) 8:30 ～ 18:30

(6)　懇親会

今年の懇親会は，ポスター1に合わせて実施いたします。19日(土)18:00～のポスタープレゼンテーションに合わせて，同会場でドリンク・軽食を提供いたします. 大会参加者は無料となっておりますので，ふるってご参加下さい.

公開シンポジウム　大学教育改革と認知科学(S1)
9月19日（土）　11:00–12:30　会場：総合校舎B号館

企画： 三輪和久（名古屋大学），鈴木宏昭（青山学院大学）
話題提供者： 安西祐一郎（日本学術振興会），大塚雄作（大学入試センター），楠見孝（京都大学）

大学は大きな変革を迫られてきています. その中でも入学者選抜を含む教育の改革は社会からの強い関心を集めています. このセッションでは，前中央教育審議会の会長を務め，2014年度末の答申をまとめた安西祐一郎氏，大学教育改革の最前線で活躍され，現在大学入試センターで入試制度の責任者を務める大塚雄作氏，批判的思考を含む次世代の思考力研究をリードしてきた楠見孝氏を招き，これからの大学教育の姿を議論し，そこにおける課題を特定し，認知科学がそれらの課題にどのように貢献できるのかを参加者とともに探りたいと考えています.

野島賞報告セッション(N1)
9月19日（土）　14:00–14:20　会場：総合校舎B号館

企画： 日本認知科学会 野島賞選考委員会
話題提供者： 大澤博隆（筑波大学），清河幸子（名古屋大学），林　勇吾（立命館大学）

日本認知科学会では，2013年度より「野島久雄賞」を設置し，人と人，人とモノ，モノを介したネットワーキングにかかわる研究領域で，「面白い!」と思える卓越した認知科学的研究を行った若手・中堅研究者を顕彰しています。2015年度は3名の方が受賞されることになりました。
野島賞は個人に与える賞であり，賞の性格上，なぜその人が受賞したのかがわかりにくい側面があります。そこで，今年度も受賞者に簡単に研究活動の紹介をしていただきます。

フェロー講演(L1)
9月19日（土）　14:20–15:20　会場：総合校舎B号館

アンビエント・コグニションについて
講演者： 佐々木正人

特別講演 (L2)
9 月 20 日（日）　13:40-15:00　会場：総合校舎 B 号館

からだと短歌

司会： 伝 康晴（千葉大学）

講演者： 川野里子氏（歌人）

現代短歌には、身体の五感の参加が欠かせない。近代短歌が、「写生」という方法に象徴されるように、視覚に大きく依存した時代だとすると、現代短歌は触れる、味わう、嗅ぐ、聞く、といったもっと多くの感覚によって多様な表現 が開拓されている。そうした作品を読みながら、身体と言葉の今を探ってみたい。

三宅なほみ氏追悼企画 「すぐそこにある夢」 (E1)
9 月 20 日（日）　15:15-16:00　会場：総合校舎 B 号館

企画： 白水 始（国立教育政策研究所）

企画趣旨：今年 5 月 29 日に逝去した元認知科学会会長，フェローの三宅なほみ氏を追悼しながら，氏の遺した研究の種を紹介し，それを育てるネットワークに聴衆を誘う会にできれば幸いです。最後は 6 年間の闘病生活でしたが，その中でも氏の夢は広がり続け，もうあと少しで具体化できそうなところまで来ていたものもありました。当日は，それを「すぐ，そばにある夢」として幾つかの側面から紹介し，みなさんの研究の発展に少しでも貢献できるような前向きな追悼の会にしたいと考えております。

構成

・学会・大会側趣旨説明：日本認知科学会会長　大森隆（玉川大学）
・故人紹介・企画概観
　「すぐ，そばにある夢」白水始（国立教育政策研究所）
　「なほみと理論」三宅芳雄（放送大学）
・『なほみ先生と実践』
　「持続可能な実践のために」杉山二季（東京大学）
　「ネットワークのネットワークという考え方」飯窪真也（埼玉県立総合教育センター）
　「理解の評価で実践を育てる」齊籐萌木（東京大学）
・『なほみ先生とテクノロジ』
　「電子文房具という考え方：ReCoNote」益川弘如（静岡大学）
　「ロボットからキーワード検索システムへ」中山隆弘（東京大学）
　「前向きな学びを創る学習科学ポータル」遠山紗矢香（静岡大学）
・御礼：今後に向けて　　白水始

オーガナイズドセッション：　二重過程理論と認知科学—無意識の行動選択・意識の役割— (OS01)
9 月 18 日（金）9:30-12:00 会場：総合校舎 D 号館 D44

オーガナイザ： 島田英昭（信州大学）

概要：二重過程理論（dual process theory）は、情報処理プロセスを意識と無意識 に分類する理論の総称である。2002 年にノーベル経済学賞を受賞したカーネマン が、二重過程理論に関する一般書（Thinking, fast & slow)を出版したことを契 機に、さまざまな学問領域で注目が集まっている。この中で、二重過程理論に関 係するさまざまな現象を統合的に整理し、今後の発展につなげることを意図して 本セッションを計画した。

本セッションは、心理実験・調査といった現象面からのアプローチに偏りがち な二重過程理論に関連する諸研究に対して、認知科学の学際性を生かし、モデル 論的なアプローチから現象の再解釈と統合的説明を与えようとする立場をとる。 まず、依頼講演として、二重過程理論に基づく認知モデルを新たに提案し、国際 的に評価を受けている北島宗雄氏（長岡技術科学大学）に依頼し、氏の提案する 認知モデルの概要と、そのモデルに基づく研究例の講演を行う。また、二重過程 理論に関係する講演を2件公募する。ここでは、二重過程理論というラベル付け は必ずしも必要なく、無意識の行動選択、意識の役割等について言及できそうな、データ駆動型の研究を期待している。複数の既発表データをまとめ直し、新たに 二重過程の枠組みで解釈した発表も可能である。

最後に、その講演に対して、北島氏から、氏らの提案するモデルにおける解釈 を求め、今後の研究に対して、講演者およびフロアーとディスカッションを行う。 モデル論的なアプローチとデータ駆動型アプローチがやりとりする場を設けるこ とで、認知科学研究の学際性を際立たせようという点が、本セッションの特徴で ある。

キーワード：二重過程理論、意識と無意識、モデル論

構成

企画説明（島田英昭、オーガナイザ）
依頼講演「Two Minds と行動選択・記憶」（北島宗雄）
一般講演（1）「逆再生動画表現ツールで促進される試行誘引性」（苅宿俊文）
一般講演（2）「デザインリサーチとしての認知的クロノエスノグラフィ」（田平博嗣）
講演へのコメントとディスカッション

OS01-1　Two Minds と行動選択・記憶

北島宗雄（長岡技術科学大学/東京大学）

We have developed an architecture model, MHP/RT, that is capable of simulating people's daily action selection processes as an implementation of the dual-process theory (Kitajima and Toyota, 2013). MHP/RT describes people's daily behavior as a cyclic process of action selection and memory formation in the form of multi-dimensional memory frames. The cyclic process implies that the ways how people actually did should affect what would be memorized, and in turn the contents of memory should affect what people would do in the future. The purpose of this document is to provide a bird's-eye view of our project, development of a framework for considering the behavior of human-beings in the universe, NDHB-Model/RT, and a cognitive architecture, MHP/RT, that is capable of simulating human being's daily decision making and

action selection under NDHB-Model/RT, with its complement memory structure, multi-dimensional memory frames.

OS01-2　逆再生動画表現ツールで促進される試行誘引性

苅宿俊文(青山学院大学社会情報学部)，石井理恵(青山学院大学社会情報学部)

本研究は、逆再生動画表現ツールを利用した芸術表現体験プログラムで行われる作品づくりのプロセスの研究である。特に、ツールが持っている試行誘引性と人間の行動特性がどのようなつながりがあるかについて注目している。研究方法としては、CCE を用いて明らかにした。本研究の対象は、大学のワークショップデザインという授業である。結果としては、4種類の行動特性を持つグループに分けることができ、その特性には省察が深く関わっていることが明らかになった。

OS01-3　デザインリサーチとしての認知的クロノエスノグラフィ

田平博嗣(株式会社 U'eyes Design)

本稿では、アンケートやインタビュー調査で得られる意識下のデータと、行動観察やエスノグラフィック調査で得られる無意識下の行動データの比較、意味づけする。また、意識下のデータと無意識下のデータで構造化される認知的クロノエスノグラフィのプロセスと事例を示すことで、その特長とデザインリサーチとして期待される成果について述べる。

オーガナイズドセッション：　記号と身体性 (OS02)

9 月 18 日 (金)　9:30-12:00 会場：総合校舎 D 号館 D24

オーガナイザ：佐治伸郎(鎌倉女子大学)，渡邊淳司(NTT コミュニケーション科学基礎研究所)

概要:認知科学における身体論 (embodied theories) は，概念や知識などの高次の表象を非感覚的 (amodal) なモジュールとして捉えず，むしろ他の感覚表象や身体経験にどのように積極的に接地 (ground) しているのかを問うてきた．このアプローチは今日では発達心理学 (Smith, 2005)，生態心理学 (Gibon, 1979)，言語学(Lakoff, 1987) など分野を越えた幅広い広がりを見せている．

本セッションでは，このような身体論的立場から，伝統的には非感覚的表象の代表のように考えられてきた記号や言語の「意味」が，「何と」「どのように」接地しているのかを議論する．「何と」の点においては，これまで非常に幅広く語られてきた「身体」について，次の二つの面から整理し議論を進めたい．第一に「感覚表象と記号接地」では，人間が身体経験として持つ様々な感覚表象が，概念を志向する「記号」へとどのように接地するのかを議論する．第二に，「コミュニケーションと記号生成」では，他者や文化的環境を含めた外界とのやり取りを身体と捉え，その中で記号の意味がどのように生成されるのかを議論する．このように人間が身体を通じて得られる経験を幅広く考え，それらが「どのように」記号に接地しているのかを考えることで，記号の身体論に新たな視点を提供したいと考える．

キーワード: 言語，身体化，記号接地問題，コミュニケーション

構成

オープニングリマーク

日高昇平「身体動作の解読：力学的な普遍量による分節化」
大槻美佳「「脳機能からみる言語と身体」」
橋本敬「コミュニケーションの 3 つのレベルにおける接地・脱接地」
今井むつみ「身体接地から抽象的な記号システムを構築するためのブートストラッピングメカニズム」
ディスカッション

OS02-1　身体動作の解読：力学的な不変量による分節化

日高昇平(北陸先端科学技術大学院大学)

我々の得る多くの情報は、特定の身体動作と連動しており、逆に、身体動作から動作主に関する多様な情報を得ることができる。本稿では身体動作の潜在的な情報の解読について、計算論的な立場から論じる。具体的に、相互作用のある大自由度である身体運動を，複数のサブシステムの混合とみなし，各サブシステムに固有の力学的な不変量の分析を行った。この分析から、我々が「動作」と自然にみなせる運動系列の分節化が、フラクタル次元の推定により可能であることが示された。

OS02-2　脳機能からみる言語と身体

大槻美佳(北海道大学)

脳損傷患者における言語症状には、一定のパターンがある。このパターンは、言語システムについて、どのような壊れ方はあり得て、どのような壊れ方はあり得ないかという情報をもたらす。これらの情報は、言語機能を知る手掛かりを与える。今回は、言語の障害の中で、意味カテゴリー特異性のある障害、モダリティー特異性のある障害(入力方法に依存する障害)と称されてきた障害パターンに関して、様々な視点で検討し、言語と脳～身体の関わりを考察した。

OS02-3　コミュニケーションの 3 つのレベルにおける接地・脱接地

橋本敬(北陸先端科学技術大学院大学)

記号の使用に関してコミュニケーションを 3 つのレベルに分けることができる．それは，構造依存性を持つメッセージによる言語的コミュニケーション，構造依存性を持たない記号メッセージによる記号非言語コミュニケーション，記号によらない感情などの共有である非記号コミュニケーションである．本稿では，この 3 レベルの関係において，記号の接地と脱接地がどのように行われ得るかを，主に実験記号論アプローチによるコミュニケーション実験により検討する．

OS02-4　身体接地から抽象的な記号システムを構築するためのブートストラッピングメカニズム

今井むつみ(慶應義塾大学)

語彙の学習はシステムの学習に他ならない.通常システムを創るためには,最初に目的があり,全体像の青写真があって,そこから必要な要素を考えていく.しかし人は語彙の全体像がわからないのに,要素を学習し要素を学習しながらボトムアップにシステムを構築していかなければならない.
本研究では，色語彙システムをテストケースとして,子どもが色の連続体の中でどのように色を分割し色名と対応付け．色語彙のシステムを獲得していくのかを実験データを基に検討した。

オーガナイズドセッション：
生活者に寄り添う認知科学：超々高齢社会に向けて（OS07）

9 月 18 日（金）　9:30–12:00　会場：総合校舎 D 号館 D33

オーガナイザ：小橋康章（大化社・成城大学），齋藤洋典（名古屋大学）

概要：今後 30 年の日本（および欧州，東アジアなど世界のいくつかの地域）の社会的変化を考えたとき，ひとつだけ間違いのないことがある．それは社会の超々高齢化である．その構成員の高齢化に伴い，社会そのものが従来の機能を失いかねない．この現象は年金制度の崩壊や医療費の爆発的増大など社会・経済的な諸問題を引き起こすだけでなく，比較的高齢な者が若者を教育して一人前の市民や職業人（研究者も含む）に育てるというこれまでの常識的な世代間分担が正常に機能しなくなるリスクも生む．

いっぽう高齢者の健康を保ち，社会の中で有意義な目標のある活動を継続させる（この2つには相関がある）ためには，高齢者の運動機能と認知機能の制約に見合った活動を発見するとともに，その支援が欠かせない．育児などもそうした活動の一例であるが，ここでは広義の「研究」という活動がそうした制約を充たし，あるいは乗り越える可能性を検討したい．

高齢者に研究という活動を軸に社会に貢献させるためには，彼らの知識や経験をありがたがるだけでは十分ではない．高齢者自身の不適切な学習の修正(unlearning)も必要だろうし，高齢者と若年者，高齢者と高齢者を組み合わせて（広義の）研究コミュニティの中に位置づける社会的な再構築も必要だろう．

以上のような問題の解決には，認知科学が暗黙の前提としてきた認知の個別性，均質性といった仮定を再考するとともに，「前例のない仕事を構想し実行する創造性」が要求される．「モノを作り上げる創造性を生活者の手に取り戻そう」という主張がある（e.g.，野口・井上，2014）が，モノに限らず、サービスやネットワーキングなどのコトにおいてもこの主張は有効であると思われる．こうした実践的構想力の有効性を検証するためにもオーガナイズドセッションで JCSS 会員と問題意識を共有し，関連する研究の現状を展望したい．

キーワード：超々高齢社会，高齢者認知，野外科学，一人称的研究，加齢と健康，社会イノベーション，創造性

構成

イントロダクション（小橋康章）
高齢化社会におけるライフへの認知科学のまなざし（齋藤洋典）
超々高齢社会のモノづくりの創造性（野口尚孝）
余白のデザイン（水津功）
高齢者が人工物利用時に見せる「怖がり」（田中伸之輔）
介助の質を高める介助者と非介助者の協調と相互理解（武藤真理）
認知症とともによりよく生きるための実践知の言語化（井庭崇）
ディスカッション

OS07-1　高齢化社会におけるライフへの認知科学のまなざし

齋藤洋典（名古屋大学）

James W．が心理学をマインドの科学と呼んだことに倣い，認知科学を知の科学と呼ぶ．では，その知は我々が高齢化社会に生きるのに何の役に立つのだろうか．高齢化社会での実生活に関する認知科学のまなざしが問われている．本稿は，架空の発表者と査読者を仮定し，認知科学者として高齢化社会で生きる準備へのガイドラインを提起する

OS07-2　超高齢社会におけるモノづくりの創造性

野口尚孝

制御不能となった現代資本主義社会での生産・消費体制の矛盾が生む過剰生産・過剰消費状態に晒された生活と、同時進行しつつある超高齢社会という現実の中で、本来あるべきモノづくりの姿を地域共同体レベルで考え、それに高齢者がどう関わっていけるのかを考えた。ここでは、地域共同でのモノづくりによる高齢者の認知症防止とコミュニティーでの合意形成にもとづくボトムアップ的生活空間デザインへの参加の可能性について考える。

OS07-3　余白のデザイン

水津功（愛知県立芸術大学），齋藤洋典（名古屋大学大学院情報科学研究科）

デザインがユーザーを満足させるには，ユーザーの要求が明白でなければならないが、現実のデザインではユーザーの要求はしばしば不明瞭であり，デザインの主要な問題は不良設定問題に解を与えることにあると言える。デザインが決定した計画的余白が、ユーザーの関与の自由度を上げ，どの程度の自由度が満足度につながるのかを知るための基礎資料を得て、不良設定問題に解を与える具体的な方法論として機能するのかを考察する。

OS07-4　高齢者が人工物利用時に見せる「怖がり」：オフィス用複合機利用での若年 - 高齢者間比較を通して

田中伸之輔（筑波大学大学院人間総合科学研究科心理学専攻），原田悦子（筑波大学人間系）

高齢者の人工物利用困難は，知覚・身体・認知的加齢から説明されてきたが，感情・動機づけの加齢変化についても検討が必要である。本研究は「高齢者が新奇な人工物を利用する際に怖がる」現象に着目し，感情・動機づけからの説明を試みる。オフィス用複合機の利用について年齢群比較を行った結果，高齢者は人工物利用を怖がる発話や行動が若年者よりも多いこと，および，怖がり行動が認知的加齢現象と合わさって利用困難を生み出すことを報告する。

OS07-5　介助の質を高める介助者と被介助者の協調と相互理解—日常的に介助を受ける障害当事者へのインタビューから—

武藤真理（電気通信大学大学院情報システム学研究科），藤本幹（国際医療福祉大学小田原保健医療学部），阪口豊（電気通信大学大学院情報システム学研究科）

被介助者が感じる良い介助の要素を明らかにする目的で，日常的に介助を受けている障害当事者 4 名にインタビューをした．被介助者は，良い介助の実現には，介助者の知識，技能や心構えに加え，介助動作における介助者と被介助者の協調的作業や相互理解・意思疎通が重要であると述べていた．従って，介助動作の指導においては，従来の介助者個人の技能だけでなく，介助者と被介助者が互いの意図や状態を推測しつつ介助動作に反映させることの意義を教授することが重要である．

OS07-6　認知症とともによりよく生きるための実践知の言語化

井庭崇(慶應義塾大学総合政策学部)，岡田誠(富士通研究所)，金子智紀(慶應義塾大学環境情報学部)，田中克明(コクヨＳ＆Ｔ株式会社)

本論文では、「認知症とともによりよく生きる」ためのパターン・ランゲージである『旅のことば』を取り上げ、その作成プロセスについて論じたのち、読者からのフィードバックを紹介する。

オーガナイズドセッション： グループワークの創造性 (OS08)

9 月 18 日 (金)　9:30-12:00　会場：総合校舎 D 号館 D43

オーガナイザ： 近藤健次 (北陸先端科学技術大学院大学)，石井成郎 (愛知きわみ看護短期大学)

概要:創造性は，経済の発展や社会問題の解決にとって重要な基盤であると考えられ，現在，様々なところで創造性に関連するグループワークが行われている．
創造性が社会に還元されるためには，創造的なアイデアが生成され，評価・選択され，実施される必要がある．グループによる創造的なアイデアの生成については，これまでブレインストーミング研究を中心に多くの研究がなされてきたが，その後のプロセスであるグループによる創造的なアイデアの評価，選択及び実施についての研究は多くなく，これらの数少ない研究においては，創造的なアイデアを選択することが必ずしも上手くないことが示されているに過ぎない．
また，グループワークに関する研究には，ブレインストーミング研究のように主としてグループワークの産物に焦点を当てたものと，教育やソーシャルワークの分野での研究のように主としてグループワークの参加者に焦点を当てたものとに分類される．
本セッションでは，まずグループワークの創造性を検討するきっかけとして「マシュマロ・チャレンジ」を実施し，その後，グループワークの創造性について認知科学の観点からさまざまな検討を行うとともに，グループワークの創造性自体の評価についても検討を行う．
キーワード：グループワーク，創造性，評価

構成

趣旨説明　近藤健次(北陸先端科学技術大学院大学)
グループワーク体験:マシュマロ・チャレンジ　近藤健次(北陸先端科学技術大学院大学)
(依頼講演)グループによるイノベーションデザイン法　國藤進(北陸先端科学技術大学院大学)
グループワークの創造性についての考察　近藤健次，永井由佳里(北陸先端科学技術大学院大学)
教育場面におけるグループワークの創造性　石井成郎(愛知きわみ看護短期大学)
三者間の共同創作における言語・非言語行動の分析～作品の独創性への影響　鈴木紀子 (帝塚山大学)
総合討議

OS08-1　グループによるイノベーションデザイン法

國藤進(北陸先端科学技術大学院大学)

今年から開講したイノベーションデザイン方法論という講義の概要を講演する．本方法論は創造思考とデザイン思考を統合したアクティブ・ラーニング法である．参加する院生にグループワークを課し，イノベーティブなアイデアを創出し，実現可能なスケッチに展開し，その結果を3D プリンターでプロトタイピングすることを目途とする講義である．

OS08-2　グループワークの創造性についての考察

近藤健次(北陸先端科学技術大学院大学)，永井由佳里(北陸先端科学技術大学院大学)

創造性は様々な問題の解決のために重要であり，現在，創造性に関連するグループワークがいたるところで行われている．本論文では，ブレインストーミング，創造性の概念，グループワークの概念についての先行研究をレビューし，創造性のレベルおよびグループワークの目的によってグループワークの分類をおこなった．この分類に基づいて，グループワークの創造性に関する今後の研究についてのいくつかの方向性を示す．

OS08-3　教育場面におけるグループワークの創造性

石井成郎(愛知きわみ看護短期大学)，鈴木裕利(中部大学)，板井陽俊(中部大学)，山下隆義(中部大学)

本研究では教育場面におけるグループワークの創造性に関して，(1)グループの社会的スキルとパフォーマンスの関係，(2)グループの社会的スキルと学習効果の関係について検討を行った．大学のプログラミング教育におけるグループワークを分析した結果，(1)社会的スキルの高い学習者ペアは高いパフォーマンスを発揮していた，(2)とくに社会的スキルに差のあるペアの社会的スキルが授業後に向上していたことが確認された．

OS08-4　三者間の共同創作における言語・非言語行動の分析～作品の独創性への影響

鈴木紀子(帝塚山大学経営学部)，正田悠(日本学術振興会/同志社大学文化情報学部)，西本光志(同志社大学大学院文化情報学研究科)，阪田真己子(同志社大学大学院文化情報学研究科)，伊藤紀子(同志社大学大学院文化情報学研究科)

本稿では、レゴブロックを用いた共同創作場面において、参加者の言語・非言語行動が創作作品の独創性に及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。さらに、作品の持つ特徴が独創性の評価に貢献しているのかについても調べていく。これらによって、創造的活動における多人数インタラクションに関する知見とともに、創作された作品の独創性に関する新たな評価指標を得られることが期待される。

オーガナイズドセッション：学校の学びを捉え直す：これからの学校教育に向けて (OS04)

9 月 18 日 (金)　13:10-15:40　会場：総合校舎 D 号館 D24

オーガナイザ： 青山征彦(駿河台大学)，香川秀太(青山学院大学)，有元典文(横浜国立大学)，岡部大介(東京都市大学)

概要： 従来、認知科学では、学習を、より上手にできるようになる熟達とか、新しいことを覚える知識獲得として捉えてきた。しかし、近年、新たな視点から学習を捉え直そうとする動きが見られ

るようになっている。一つは、学習科学である。21 世紀スキルなど、コラボレーションや問題解決を重視した学習が唱道されるようになっている。もう一つが、ヴィゴツキーに端を発するホルツマンらのアプローチである。彼女は、ヴィゴツキーのZPD概念を捉え直して、集合的な学習＝発達の場を生み出すためにパフォーマンスを利用している。ここでは、学習とは、すでにあるものを学ぶことではなく、いわば新しい自分になることである。

このセッションでは、学習科学やホルツマンのアプローチのように、近年起こりつつある新しい学習研究をもとに、これからの学校教育について考えてみたい。

学習科学は、学校教育を組み替えていくことを狙っているが、ホルツマンらのアプローチは学校とは異なる場を創出するというものであり、学習科学のスタンスとは根本的に異なっている。学校教育に対して、認知科学的な見地から、学校という場の持つ意義や改善すべき点について、議論したい。そのことを通して、認知科学からの学習研究をどのように変えていくべきかが見えてくるだろう。

2015年は、状況論では上野直樹、学習科学では三宅なほみという、それぞれの分野を主導した存在を失った年になった。このセッションを、今後われわれがどのように新しい展開を示していくかを考える場にしたい。

キーワード:21世紀型スキル、ZPD、パフォーマンス

構成

企画趣旨
招待発表
　白水　始(国立教育政策研)　学習の再定義 ―学校を学校的でないものに
　有元　典文(横浜国立大学)　教育の再定義 ―学校的でないものを学校に持ち込む
一般発表
　遠山　紗矢香(静岡大学)　前向きな対話の特徴と育成可能性の検討
　広瀬　拓海(筑波大学大学院)　子ども達の放課後支援に携わる者の学習に関する語りについての質的検討
　伊藤　崇(北海道大学)　授業におけるコミュニケーションの暗黙的な次元を探る:ウェアラブルセンサとビッグデータ解析システムの応用
討議

OS04-1　学習の再定義―学校を学校的でないものに

白水始(国立教育政策研究所)

今の学校教育は、教える側が決めたゴールに一定時間内で到達させるような「後ろ向き」の学び方である点が問題である。そこで本発表では、学校教育をこうした後ろ向きアプローチから、前向きアプローチ、つまり学習をより高いゴールを目指した終わりなき追求と考える方向へと変換することを提案する。

OS04-2　教育の再定義―学校的でないものを学校に持ち込む

有元典文(横浜国立大学)

学校教育は、「変化の可視化」というテクノロジーによって、学習者の可視的な変化を志向する実践になっている。しかし、テクノロジーによって観察し得る変化だけが変化ではない。
本発表では、即興的、集合的、発達的、支援的といった学校的でない要素を学校に持ち込むことで引き起こされる co-learn、つまり発達場の c-creation としての「教育」概念について議論したい。

OS04-3　前向きな対話の特徴と育成可能性の検討

遠山紗矢香(静岡大学大学院教育学研究科附属学習科学研究教育センター)，益川弘如(静岡大学学術院教育学領域)

学習者同士が話し合うことで1人では解けなかった問題を解く「前向きな対話」ができる学習者を育成するための方法を検討した．日頃から前向きな学びを学校で経験してきた児童と，話型指導を受けて育った児童について，通称全国学テの B 問題をペアで話し合いながら解かせた対話の特徴を比較した．その結果，前者の児童は短い発話を相互に繰り返しながら互いの考えの過程を吟味し合う発話が見られたが，後者では自分の考えを述べるのみで，考えを確かめ合う対話が乏しかった．

OS04-4　子ども達の放課後支援に携わる者の学習に関する語りについての質的検討

広瀬拓海(筑波大学大学院人間総合科学研究科心理学専攻)

本研究では，放課後活動に関わる実践者が「学習」をどのようにとらえているのかを検討した。実践者にとって「学習」を定義することは日常的なものではなく，それらは彼らの実践での経験や問題意識などをリソースに，例えば自分の見てきた子ども達を取り巻く問題とそれに対する対処の必要性を表明する語りとして即興的に語られた。本研究では加えて，コミュニティを構成することを「学習」とする観点からも彼らの活動を切り取り，それらと学校制度の関係についても検討した。

OS04-5　授業におけるコミュニケーションの暗黙的な次元を探る：ウェアラブルセンサとビッグデータ解析システムの応用

伊藤崇(北海道大学大学院教育学研究院)

本研究の大きな目的は2つある．第一に，ウェアラブルセンサやデータ解析技術を応用し，授業中の教師と児童のコミュニケーション過程を可視化することである．第二に，身体の揺れや対面行動という観点から授業を振り返るための教師の授業改善ツールを開発することである．本発表では，これまでに得られた結果の一部を紹介する．

オーガナイズドセッション：　自己・他者認識の脳メカニズム (OS05)

9 月 18 日 （金）　13:10–15:40　会場：総合校舎 D 号館 D44

オーガナイザ：　樋田浩一 （明治大学），嶋田総太郎 （明治大学）

概要: 我々はどのようにして自己自身を認識し，他者を他者として認識しているだろうか．哲学をはじめとする諸科学の基本問題でもある「自己と他者」の認識の問題は，社会性認知の基礎となる能力であるにも関わらず，そのメカニズムは未だ明らかでない部分が多い．こうした中で認知神経科学研究および実験心理学研究により、自己と他者認識の脳内処理機構が徐々に明らかにされつつある。本セッションでは，自己身体認識・他者認識・社会性認知・コミュニケーションなどのトピックに関して，その認知モデルを探るための脳機能イメージング研究、行動・心理実験研究、

計算モデル研究などを広く募り，最新の知見を題材に自己・他者認識の脳メカニズムについて議論を行いたい．

具体的なトピックとしては、たとえば、自己身体認識、ラバーハンド錯覚、身体保持感、運動主体感（エージェンシー）、自己顔認識、表情認識、鏡像認識、心の理論、アニマシー知覚、ミラーシステム、模倣、共感、コミュニケーションなどが挙げられるが、これに限定することはない。また近年では自己・他者認識に関して得られた知見をリハビリテーション医療へ応用する動きも活発になってきており、それらの関連分野からの研究発表も歓迎する。

構成

樋田浩一，嶋田総太郎 - 自己・他者認識の脳メカニズム -
樋田浩一，上野佳奈子，嶋田総太郎 - 自己主体感に関連する事象関連電位成分 ?身体運動に伴う聴覚フィードバックの遅延検出-
辻田匡葵，一川誠 - 身体運動-視覚間時間再較正における視覚的フィードバックの遅延に対する気付きへの依存性の検討
田中章浩，井上照沙 - 自己主体感の規定因と個人差
渕上健，森岡周 - 歩行観察時の大脳皮質活動とイメージの鮮明度 ー自己モデルと他者モデルによる違いー
渡邉翔太，川合伸幸 - 操作対象の随伴性が対象への自己感に及ぼす影響
Akitoshi Ogawa, Izumi Hirayama, Tatsuya Kameda - Neural correlates of inference of opponent’s belief about self in competitive game
【招待講演】杉浦元亮 - 自己と他者：順予測モデルでどこまで行けるか？
総合討議

OS05-1　自己・他者認識の脳メカニズム

樋田浩一（明治大学），嶋田総太郎（明治大学）

我々はどのようにして自己自身を認識し，他者を他者として認識しているだろうか．哲学をはじめとする諸科学の基本問題でもある「自己と他者」の認識の問題は，社会性認知の基礎となる能力であるにも関わらず，そのメカニズムは未だ明らかでない部分が多い．本セッションでは，自己身体認識・他者認識・社会性認知・コミュニケーションなどのトピックに関して，その認知モデルを探るための脳機能イメージング研究、行動・心理実験研究などを通じ議論を行う．

OS05-2　自己主体感に関連する事象関連電位成分 -身体運動に伴う聴覚フィードバックの遅延検出-

樋田浩一（明治大学大学院／JST CREST），上野佳奈子（明治大学／JST CREST），嶋田総太郎（明治大学／JST CREST）

自己を認識する上で、身体運動とそれに伴う感覚フィードバック間の時間的整合性が重要である．本研究では，身体運動に伴う聴覚フィードバックに複数の遅延を挿入し，遅延検出に伴う事象関連電位(N300)と自己主体感(agency)の関係について検討した．実験の結果，遅延が大きくなるに従い主体感が低下し，N300 成分の振幅が大きくなる相関関係がみられることが示された．このことから N300 成分は，自己主体感の生理指標として有効である可能性が示された．

OS05-3　身体運動-視覚間時間再較正における視覚的フィードバックの遅延に対する気付きへの依存性の検討

辻田匡葵（千葉大学融合科学研究科），一川誠（千葉大学文学部）

能動的な身体運動に対して視覚的フィードバックが遅れて提示される状態が持続すると，身体運動-視覚間の時間順序知覚が順応的に変化する。本研究では，身体運動-視覚間時間再較正が視覚的フィードバックの遅延に気付いていなくても生じるのか検討した。実験の結果，遅延に気付いた実験参加者においてのみ時間再較正が生じた。この結果は，身体運動-視覚間時間再較正の成立には高次の認知過程が重要な役割を果たしていることを示唆している。

OS05-4　自己主体感の規定因と個人差

田中章浩（東京女子大学），井上照沙（東京女子大学（現所属：東京大学））

「行為を自分でおこなっている」という感覚である自己主体感は、予測可能性が高いときに強く、行為結果がネガティブなときに弱い。本研究では、ネガティブな予測を高めればネガティブ事象に対する自己主体感はむしろ強まるとの仮説を立て、実験的に検証した。実験の結果、ネガティブ声での自己主体感が強く、ネガティブ声割合が高いとさらに強くなる傾向が認められた。個人差を検討した結果、統合失調症傾向が高いほどポジティブ声での自己主体感が強まる傾向があった。

OS05-5　歩行観察時の大脳皮質活動とイメージの鮮明度 ー自己モデルと他者モデルによる違いー

渕上健（畿央大学大学院　健康科学研究科　神経リハビリテーション学研究室），森岡周（畿央大学大学院　健康科学研究科　神経リハビリテーション学研究室）

自己と他者の歩行観察における脳活動の違いとイメージの鮮明度について調査することを目的とした．自己条件では右背側運動前野と右上頭頂小葉が活動し，他者条件では左腹側運動前野と左下頭頂小葉が活動した．また，観察中のイメージは自己条件が他者条件に比べ鮮明だった．自己条件では自己の身体表象にかかわる脳領域が活動し，より鮮明なイメージが導かれることが明らかとなった．

OS05-6　操作対象の随伴性が対象への自己感に及ぼす影響

渡邉翔太（名古屋大学 大学院情報科学研究科），川合伸幸（名古屋大学 大学院情報科学研究科）

参加者と操作対象の身体的な動作が同期する場面では，体性感覚と視覚の両感覚から入力される運動情報が時間的に同期していることが重要である。しかし，操作対象の随伴性を操作した研究はなく，時間的に同期していて随伴性が低い場合も，操作対象への身体保持感は生じるかは不明である。本研究では，操作対象の随伴性の程度を操作することで，操作対象への身体保持感に及ぼす影響の検討を心理・生理反応の側面から行った。

OS05-7　Neural correlates of inference of opponent’s belief about self in competitive game

小川昭利（東京大学大学院人文社会系研究科），平山いずみ（東京大学大学院人文社会系研究科），亀田達也（東京大学大学院人文社会系研究科）

これまでの非協力ゲームを用いた fMRI 研究では，相手の行動を読むことに関わる脳活動が示されてきた．本研究では，非協力ゲームのひとつであるマッチングペニーにおいて，相手が手を読んでくるという認識に関わる脳活動を fMRI により調べた．fMRI データをモデルベース解析した結果，右側頭頭頂接合部が，相手が手を読むことと、読んだ結果を利用した行動決定を行うことの推定に関わることを示した．

OS05-8　自己と他者：順予測モデルでどこまで行けるか？

杉浦元亮（東北大学）

脳の中で「自己」がどのようにして実現されているか、様々な人が様々な形で興味を持ってきた。しかし脳機能マッピング研究は、単一の「自己」の神経基盤という仮説に対して否定的な結果を示してきた。私はこれらの結果から、自己は少なくとも3つのカテゴリーに区別されるが、それらの間には、順予測モデルとしての共通性があることを指摘し、その統一モデルとしての可能性を提唱してきた。本講演ではその現状と課題を共有したい。

オーガナイズドセッション：　J･D･M:Issues in the real world (OS06)

9 月 18 日 （金）　13:10-15:40　会場：総合校舎 D 号館 D43

オーガナイザ：本田秀仁（東京大学），中村國則（成城大学）

概要: JDM とは Judgment and Decision Making の略であり、英語圏でしばしば用いられる表現である。判断や意思決定を専門分野と掲げる認知科学研究者の数は決して多くはないが、判断や意思決定は多くの認知や行動と関係があり、潜在的には多くの研究者が興味を持つトピックを扱っている。

そこで本セッションでは、(1)判断や意思決定は狭い内容を扱う研究分野ではなく、人間の本質的な認知を垣間見ることができるトピックを扱っていること、また同時に、(2)判断や意思決定研究の中には広い意味での人間の認知を考えていく上でも、多くの興味深い現象に溢れていること、これら2点について、認知科学コミュニティーの研究者に知っていただく機会にしたいと考えている。

これらの目的を達成するために、以下のようなセッションを計画している。まず、実際場面での判断や意思決定に関わる研究を行っている2名の研究者に講演を依頼し、実際場面の文脈から、人間の判断や意思決定について考える場を設ける。また会員による通常の通常発表では、扱うトピック・研究手法を含め、幅広い内容をできる限り扱う。

キーワード:判断、意思決定、推論

構成

本セッションの趣旨説明　中村國則（成城大学）

招待講演

和田有史（国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構食品総合研究所）
『食と意思決定-品質評価からリスク情報理解まで-』

平原憲道（慶應義塾大学医学部医療政策管理学講座）
『医療現場で活躍する JDM：患者や医師のリスク認知研究からビッグデータまで』

公募発表

白砂大（千葉大学）『課題の具体化が確率判断に及ぼす影響』

松永聡太（東京大学）『概念的調和度が選択行動に与える影響の分析』

オーガナイザーによる最新トピックの紹介

中村國則（成城大学）『量刑判断に対する被疑者の写真の影響』

全体討論

OS06-1　食と意思決定-品質評価からリスク情報理解まで-

和田有史（国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構食品総合研究所）

人間の日常的な食品の認知には多くの意思決定が含まれている．食品と非食品の判断のような感覚・知覚的な判断だけではなく，高次な認知の問題もある．本講演では，前者に係わる事例として，乳児期の視-嗅覚統合と，成人期の新奇食品の選好に与える嗅覚の影響についての心理物理学的研究を紹介する．さらに，後者の例として認知傾向の個人差と食品表示の理解の関係についての web 調査研究を紹介する

OS06-2　医療現場で活躍する JDM：患者や医師のリスク認知研究からビッグデータまで

平原憲道（慶應義塾大学）

医療文脈での JDM とも呼べる MDM（Medical Decision-Making）は、欧米では JDM 研究とほぼ時を同じくして発展してきたが、日本においては未だ歩みが遅い領域である。欧米での優れた研究を示しながら我が国での MDM 研究を紹介する。昨今大きな注目を浴びる「ビッグデータ」の現場からも、実験室を飛び出した JDM の可能性を探ってみたい。

OS06-3　課題の具体化が確率判断に及ぼす影響

白砂大（千葉大学），松香敏彦（千葉大学）

本研究は，因果強度判断課題における主題化効果の影響を検討することを目的とした。課題では，実験参加者が操作可能な「標的原因」と操作不可能な「文脈」のそれぞれが結果事象をどのくらい引き起こすかを判定させた。結果として，文脈への判定時には主題化効果は有利に働かなかったが，標的原因への判定時には主題化効果が多少ながら有意に働くことが示唆された。

OS06-4　概念的調和度が選択行動に与える影響の分析

松永聡太（東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻広域システム科学系），本田秀仁（東京大学大学院総合文化研究科，植田一博（東京大学大学院総合文化研究科）

Evers ら(2014)は、選択肢セットの色・形などがすべて“同じ”ことが全体としての調和度を生み、それが選択に影響を与える Set-fit 効果を報告した。本研究ではこの効果を拡張し、“英国風”・“オリエンタル風”といった、概念的な特徴から形成される調和度が選択行動に与える影響について実験的に検討を行った。結果として、選択肢セットの概念的調和度は選択に影響を与え、非一貫した選択行動につながることが明らかになった。

OS06-5　量刑判断に対する被疑者の写真の影響

中村國則(成城大学社会イノベーション学部), 神田咲(成城大学社会イノベーション学部)

本研究の目的は, 量刑判断に対して被疑者の画像が与える影響を検討することである. この目的のため, 実験参加者に架空の事件に対する量刑判断を被疑者の画像(写真/イラスト)×被疑者の数(1 人/3 人)の計 4 条件のいずれかで行わせた. 実験の結果, 被疑者の数の影響は被疑者がイラストで提示された場合よりも写真で提示された場合の方が強いことが示された.

オーガナイズドセッション: 前衛表現の理論・実装・認知 (OS11)

9 月 18 日 (金) 13:10-15:40 会場 : 総合校舎 D 号館 D34

オーガナイザ : 小川 有希子 (法政大学), 小方 孝 (岩手県立大学)

概要: 前衛とは、「先頭に立つ部隊、最前線、先駆的」という字義を持つ一般用語であるが、これを意味する「アヴァンギャルド」というフランス語が日本においても芸術や文化の文脈では普及しており、これは実験的な創作を試みた作家群や作品群を指す、思想的 なニュアンスを含んだ言葉である。本セッションにおける「前衛」は、その正統な意味合いを基調としながらそれを敷衍し、何ら かの点で「異彩を放つ・際立つ」要素・側面を持った表現、「並ではない」効果を生じさせる表現の全てを、議論の射程に入れる。 例えば、異彩を放つ「ことば(文学・演劇)」、異彩を放つ「造形(美術)」、異彩を放つ「演技・演出(映像・演劇・芸能)」、際立つ「構図(絵画・写真・映像)」、際立つ「音色(音楽)」、際立つ「形式(文学・映像・演劇・音楽・芸能)」などが考えられるが、表 現媒体や表現手段(アナログ・デジタル)は問わないので、切り口はこれらには限定されない。例えば、異彩を放つ「ソフトウェ ア(ゲーム, アート, 教育, 物語生成システム)」なども含まれる。

並ではない効果とは、表現の受け手の知識構造や情動が極めて大きく揺り動かされる、という意味であり、これが議論の主要な 主題の一つとなる「認知」である。表現が肌から染み渡り、細胞が振動するような身体感覚を伴うこの認知を、パッション、制御 不能感と仮に言語化する。現代においては、このような認知を引き起こす前衛表現の多くが、テクノロジーと結びついて実現され ている点には特に着眼しつつ、「前衛」と「人間」及び「知」の関係を総合的に議論する場を創出したい。

なお、発表者は必ず作品(研究対象にしている作品、あるいは研究として創作している作品・システムなど)を具体的に提示し、

1. それはどのような点で、本セッションが含意する「前衛」であるのか。
2. それはどのような意味で、恒久的な「知」の核心部、あるいは周辺部を
    - 構成する必然性が高いと考えられるのか。あるいは、
    - 構成することが予見されたり、期待されたりするのか。

について言及すること。作品が「実装」に当たる。これを発表の要件とする。また、以上のような問題構制に対する批評・批判を 含む論考も歓迎する。

キーワード(左上から縦方向に見てください)

- 芸術
- 芸能
- おもしろい
- わからない
- 弁証法
- 物語
- テクノロジー
- 生成
- パッション
- 制御不能感
- 過剰性

構成

企画説明 小川有希子(法政大学) その表現、斬新につき?

依頼講演

阿部明典(千葉大学)

【タイトル】:彼の信奉者により裸にされた「前衛」としての書きことば、さえも

高橋範行(愛知県立大学)

【タイトル】:前衛音楽についてのいくつかの私見

安藤花恵(西南学院大学)

【タイトル】:即興劇と脚本劇における即興性

小方孝(岩手県立大学)

【タイトル】:(1)歌舞伎『道明寺』 (2)個別の作品の計算・認知物語論へ

公募講演

岩垣守彦

【タイトル】:日本語の「は」と中原中也の「一つのメルヘン」

総括 小方孝(岩手県立大学)

OS11-1 その表現、斬新につき?

小川有希子(法政大学)

昨今は, 表現の自由を主張することによって「表現すること」の敷居が低くなり, いわゆるアートというものが大衆化してきている一方で, 真にプロフェッショナルな表現者たちは, 素人の追随を許さない表現の高みに舞い昇っていくという, 両極化した状況が広がっている. 本セッションでは, 後者に該当する淘汰されない異彩を放つ表現を「前衛表現」と呼び, 「真の芸とは何か」, 「人を魅了し豊かにする芸とは何か」を議論する.

OS11-2 彼の信奉者により裸にされた「前衛」としての書きことば、さえも

阿部明典(千葉大学/ドワンゴ人工知能研究所)

本 OS では、「前衛」を「異彩を放つ・際立つ、表現の受け手の知識構造や情動が極めて大きく揺り動かされる」と定義している。その定義に従って、「前衛」としての書きことばに就いて議論を行う。特に、小説や、詩、広告などに於いて、どのように書きことばが洗錬されているか、どう受容されるか等に就いて議論を行い、更に、「前衛」としての書きことばの機械的生成に就いても議論したいと思う。

OS11-3 前衛音楽についてのいくつかの私見

高橋範行(愛知県立大学)

社会的ステータスの象徴性や認知上の適度な複雑性などを失った前衛音楽は、徐々に終焉へ向かっているように思われる. これからの前衛音楽では、過去の語法の新規な組み合わせや他の領域とのコラボなどによる未知なる体験の提供が、その主たる目的となっていくと予想される. ま

た、前衛音楽の終焉は“調性”や“拍節”のもつ強い魅力に対する疑問を呈示する. この議論において認知科学が果たす役割は大きいと考えられる.

OS11-4　即興劇と脚本劇における即興性

安藤花恵(西南学院大学)

即興劇においてはセリフもストーリーも決まっておらず, 俳優は共演者の演技が提示された後, その演技に呼応した演技を即座におこなわなければならない。相手の演技やその裏の意図に敏感な感性, 相手の演技に即座に反応できる柔軟性, 創造性, 協調性といった能力を駆使し, 俳優たちは本人たちにも先のわからないストーリーをその場で創造していく。この能力は, 脚本に基づいた劇を演じる際や, 私たちが日常生活を送る際にも共通する, 普遍的な能力であると考えられる。

OS11-5　日本語の「は」と中原中也の「一つのメルヘン」

岩垣守彦

助詞の「は」は「主題を表す」とか「関心の対象をピックアップする」と説明されるが, 言語の表層情報で言語変換する自然言語処理的には「主語」であったり「目的語」であったりする他に「副詞句」で対応しなければならない場合がある. これを援用して, 詩人語を自分語に変換して中原中也の「一つのメルヘン」を勝手読みしてみる.

OS11-6　ある歌舞伎作品の個人的体験を巡る随想

小方孝(岩手県立大学)

筆者が平成 22(2010)年 2 月に歌舞伎座で観た, 十八代目中村勘三郎と五代目坂東玉三郎の共演による, 三世河竹新七作『籠釣瓶花街酔醒』の舞台を題材として取り上げる. 歌舞伎の特徴が, 過去を賛美することにあり, 過去からの多重構造の縛めと柵に好んで従属することにあると考え, それを反／非・前衛的, 後衛的な芸術(芸能)と捉える. 筆者が研究する物語生成システムは, 歌舞伎的な多重構造に基づく仕組みを手本とする.

オーガナイズドセッション: フィールドに出た認知科学 (OS12)

9 月 18 日 (金)　13:10-18:30　会場 : 総合校舎 D 号館 D33

オーガナイザ : 諏訪正樹 (慶應義塾大学), 伝康晴 (千葉大学), 藤井晴行 (東京工業大学)

概要: 従来の認知科学は、知能に関するモデルを心理学的実験やコンピュータシミュレーションによって検証することを方法論としてきた。しかし、実験室実験やシミュレーションは、立てたモデルにおいて予め想定される特定要因のみに着目したものにならざるを得ず、実環境や実生活の状況に依存した知の姿を明らかにするためには限界があるという批判も叫ばれていた。

知能はそれ自体独立して存立するのではなく、主体の身体、身体を取り囲む環境(他者を含む)、社会や時代とともにある。環境の中で物事を認識し、行動し、他者と交わりを持ち、社会の中で影響を受けながら、知は発現し、進化する。したがって、実環境や実生活になかにある知の姿を観察、記述、分析しないと、知の本質には迫れない。

2014 年度には、同じ問題意識のもとで、学会の機関誌「認知科学」に同名の特集号が企画された(フィールドに出た認知科学)。本特集号は 2015 年3月発行の学会誌に掲載予定である。本オーガナイズドセッションは、学会誌の企画にタイアップして、大会で同じ趣旨のセッションを開催しようと目論むものである。

「フィールド」とは研究者によって設定された人工的活動や統制された実験環境ではなく、当事者たちの生活におけるリアルな動機や目的に基づく自発的な活動が繰り広げられる場を指す。生活のなかにはそのような場が溢れている。例えば、スポーツ・演劇・ダンス・音楽・料理・教育・介護・制作などである。こういった現場を研究対象にして、ひとの行動をつぶさに記録・観察し、フィールドの文脈を切り離さずに、知の姿についての新しい研究仮説や、ひいては理論構築につながる知見を得るような萌芽的研究を募集したい。

必ずしも客観的な方法論に基づき普遍的な知見を得ることに縛られる必要はなく、個別具体性、主観性、状況依存性を捨象しない研究態度を高く評価するセッションとしたい。

キーワード:フィールド、現場、生活、状況依存性、主観性

構成

「フィールドに出た認知科学」の必要性 ―『認知科学』同名特集号と本セッションの意図―
(諏訪正樹)
日本手話の心理言語学的調査の実践と問題 (高嶋由布子)
多人数インタラクションとしての歯科診療 ?歯科医師はいかにして発言の宛先を特定するか?
(坂井田瑠衣)
共同体〈心体知〉の経年的変化に関する分析 ~相互行為データと当事者の内省的叙述を手がかりに~ (榎本美香)
空間図式の身体的原型の実地における空間体験に基づく探究ー写真日記を基礎資料とするKJ 法の試みー (篠崎健一)
ロボットは井戸端会議に入れるか: 日常会話の演劇的創作場面におけるフィールドワーク
(坊農真弓)
会話の映像収録冒頭部分の検討-実験環境会話データとフィールド環境会話データの比較を通して- (牧野遼作)
アイスホッケー初心者のスケートスキル獲得過程 (山田雅之)
無作為行動による文化的回復力の増加の可能性について (松香敏彦)

OS12-1　「フィールドに出た認知科学」の必要性

諏訪正樹(慶應義塾大学), 伝康晴(千葉大学), 藤井晴行(東京工業大学)

OS12-2　日本手話の心理言語学的調査の実践と問題

高嶋由布子(日本学術振興会/東京学芸大学)

日本手話を心理言語学的な方法で調査するとき, 2つの問題があった. 生まれながらに聞こえない「見る文化」のろう者の知覚の問題と, 社会言語学的な問題, すなわち言語のパワーバランスや規範の問題である. これらの問題は, 日本手話を第一言語にする聞こえない人, すなわち「ろう者」と共に, 実験準備から実施, 分析まで行うことで解決した. これを通して, 実験環境という人工的な場を作る営みには, 多くの知見を要し, それ自体に分析する価値があることを示す.

OS12-3 多人数インタラクションとしての歯科診療 —歯科医師はいかにして発言の宛先を特定するか—

坂井田瑠衣(慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科)，諏訪正樹(慶應義塾大学環境情報学部)

3 者以上の多人数インタラクションにおいて，話し手はしばしば任意の聞き手を宛先として特定しようとする．しかしフィールドの活動に埋め込まれた相互行為では，身体配置や環境の制約を受け，宛先の特定は必ずしも容易でない．本発表では，歯科診療のフィールドにおいて，歯科医師から患者／歯科衛生士への宛先の特定に曖昧さが生じる事例を分析する．その上で，同じく多人数インタラクションに特徴的な傍参与という構造によって，宛先特定の失敗が回避されうることを示す．

OS12-4 共同体〈心体知〉の経年的変化に関する分析 ~相互行為データと当事者の内省的叙述を手がかりに~

榎本美香(東京工科大学)，伝康晴(千葉大学)

本研究では野沢温泉村でのフィールドワークの成果を報告する。祭りの支度を共に行うことで、共同体〈心体知〉が経年的に習得されることを示す。心は成員たちの価値観や見識というエートス、体は力や身体配分などの共同活動技法、知は祭具の名称や用法などの共有知識を指す。祭りの準備活動3年間分の相互行為データと当事者の内省的叙述を分析する。参与者たちの動きは経年的に状況に応じた相互連携性を帯び、共同活動への参与技法が〈身体知〉であることを示す。

OS12-5 空間図式の身体的原型の実地における空間体験に基づく探究ー写真日記を基礎資料とするKJ法の試みー

篠崎健一(日本大学)，藤井晴行(東京工業大学)，片岡菜苗子(日本大学)，加藤絵理(日本大学)，福田隼登(東京工業大学)

空間図式の身体的な原型(prototype)を，私たちの空間の経験を通して探究し明らかにするこころみである．実在のフィールドにおいて実際に生活することを通して見いだされるものごとの断片を写真と言語によって表現し，それらの断片を合議しながら組織化することによって，表現，断片の組織化を方向づける空間図式を明らかにする．そして,そのこころみの意義を考察する．

OS12-6 ロボットは井戸端会議に入れるか：日常会話の演劇的創作場面におけるフィールドワーク

坊農真弓(国立情報学研究所/総合研究大学院大学)

本講演では 2012 年から継続して行っているロボット演劇フィールドワークで得た知見を紹介する．この知見を通し，ロボット研究者がロボットを携えてフィールドへ出て行く姿勢の問題点について指摘する．具体的に本研究は，実証実験などによりロボットをコミュニケーション(≒井戸端会議)の中心に据えるといった，従来のロボット研究のフィールドへの出方を批判し，ロボットが会話の周辺から井戸端会議に参加する様子をロボット演劇創作場面でのやりとりから観察・記述することを試みている．本研究がとる「研究者がフィールドにいるいないに関わらず実世界に存在する現象」に対するアプローチは，ロボット研究者による「ロボットの中心性」 を排除することに成功している．しかしながら，社会における「ロボットの異質性」をむしろ浮き彫りとする結果を得ることになった．本研究の成果を通し，ロボットと人の共在のあり方について議論したい．

OS12-7 会話の映像収録冒頭部分の検討-実験環境会話データとフィールド環境会話データの比較を通して-

牧野遼作(総合研究大学院大学複合科学研究科)，古山宣洋(早稲田大学人間科学学術院)，坊農真弓(国立情報学研究所コンテンツ科学研究系・総合研究大学院大学複合科学研究科)

本稿では，実験環境会話データとフィールド環境会話データと分類されうる 2 種類の会話データの収録冒頭部分の比較検討を行った．参与者たちが自発的に環境を構築し，研究者の介在がなくても会話を行ったのかという観点から，実験／フィールド環境は区別されている．しかし，この環境の差異に関わらず，参与者はそれぞれの環境中で適切な参与者として振る舞うことをしている点では，同様のデータとして扱うことができることを示す

OS12-8 アイスホッケー初心者のスケートスキル獲得過程

山田雅之(日本教育大学院大学)

本研究はアイスホッケー初心者の子供を対象にスケートを滑れるようになるまでの過程における補助者のコーチング方法と認知の過程をフィールドで採取した研究である．本論文では初めてスケートを履いた 4 歳 10 か月児 1 名を対象に，約 40 分間の映像と音声について学習者の姿勢および，補助者が与える課題について検討した．結果から，補助者が学習者の状態に対して適宜課題を変えている可能性が示唆された．

OS12-9 無作為行動による文化的回復力の増加の可能性について

松香敏彦(千葉大学)，小谷真吾(千葉大学)，伝康晴(千葉大学)，牛谷智一(千葉大学)

本研究では、フィールド調査で得た知見をコンピュータ上にモデル化し、現実の条件とは異なる条件での結果と比較することで、そのフィールドの本質が何であるかにせまることを試みる。具体的には、小谷(2002，2010)のフィールドデータのエッセンスを反映したコンピュータシミュレーションを用いて、無作為な作付け行動がまさにこのフィールドにおける文化的回復力の源となっていることを示す

オーガナイズドセッション： バイリンガルと認知 (OS03)

9 月 18 日 （金） 16:00-18:30 会場：総合校舎 D 号館 D34

オーガナイザ： 田浦秀幸 （立命館大学)，井狩幸男 （大阪市立大学)，森 （三品） 聡美 （立教大学)

概要: 最初に井狩からバイリンガルの子供の認知的発達に関する研究紹介を行い、このセッションの基調講演とする。バイリンガル児の認知発達研究についての先行研究を概観後、脳機能イメージングの観点から、関連分野の研究可能性を展望する。次に森から、日英同時バイリンガル幼

児における時制概念の発達について紹介する。言語発達初期の長期的自然発話データにおいて、日本語と英語で時制形態素の出現時期に大きなずれがあることに基づき、概念と形態素発達との関係について考察する。3 番目に田浦から、メタ認知能力の獲得に関して日本人モノリンガルと日英バイリンガルの比較研究を紹介する。幼稚園児対象に認知的葛藤をともなうタスクを課し、その行動データ及びタスク遂行時の脳賦活データの分析結果を報告する。一般講演として赤木から、日独バイリンガルのナラティブ構造について、日本語ナラティブとドイツ語ナラティブ比較研究を紹介する。これまであまり研究対象となってこなかった言語形成期後期（10-15 歳）の生徒 20 名から収集したデータ分析の結果の報告をする。

構成

井狩幸男（大阪市立大学）「認知能力の発達」
森（三品）聡美（立教大学）「同時バイリンガルにおける過去時制形態素と過去時制概念の発達」
田浦秀幸（立命館大学）「日英バイリンガル園児のメタ認知力の発達と脳賦活」
赤木実香（お茶の水女子大学）「日独バイリンガルのナラティブ構造について-日本語ナラティブとドイツ語ナラティブの比較-」
総合討議

OS03-1　バイリンガル児の認知発達

井狩幸男（大阪市立大学）

バイリンガルの子供の認知的発達に関する研究紹介を行い、このセッションの基調講演とする。バイリンガル児の認知発達研究についての先行研究を概観後、脳機能イメージングの観点から、関連分野の研究可能性を展望する。

OS03-2　同時バイリンガルにおける過去時制形態素と過去時制概念の発達

森（三品）聡美（立教大学）

日英同時バイリンガル幼児における時制概念の発達について紹介する。言語発達初期の長期的自然発話データにおいて、日本語と英語で時制形態素の出現時期に大きなずれがあることに基づき、概念と形態素発達との関係について考察する。

OS03-3　日英バイリンガル園児のメタ認知力の発達と脳賦活

田浦秀幸（立命館大学）

メタ認知能力の獲得に関して日本人モノリンガルと日英バイリンガルの比較研究を紹介する。幼稚園児対象に認知的葛藤をともなうタスクを課し、その行動データ及びタスク遂行時の脳賦活データの分析結果を報告する。

OS03-4　日独バイリンガルのナラティブ構造について―日本語ナラティブとドイツ語ナラティブの比較―

赤木美香（お茶の水女子大学）

De Houwer(2009),田浦(2014)は,公教育での教育媒体言語がバイリンガルの優勢言語となり家庭内言語が非優勢言語となることに言及し,非優勢言語の発達研究の必要性を喚起している.本研究では,日独バイリンガル生徒(言語形成期後半 10-15 歳)を対象に,frog-story ナラティブを収集し,Labov(1972)の分析枠組みにより時系列型・因果律型構成要素の出現について調査を行い,日独バリンガルの言語使用の一端を明らかにした.

オーガナイズドセッション： 創造性のキモをつかむ (OS09)

9 月 18 日 （金）　16:00-18:30　会場：総合校舎 D 号館 D43

オーガナイザ： 阿部慶賀（岐阜聖徳学園大学），清河幸子（名古屋大学），寺井　仁（近畿大学）

概要: 新しいものを生み出す，これまでにないやり方で問題を解決するなど，創造性が関わる認知活動は，認知科学において常に関心を集めてきた。これまで，行動実験，神経科学的検討，計算機モデリング，フィールドワーク，インタビューなどの様々なアプローチにより，洞察，アイデア生成，芸術，デザイン，科学的発見等，多様なテーマについて研究が蓄積されてきている。その結果，創造性が関わる認知活動を促進する，あるいは妨害する要因や，その生起メカニズムなどが徐々に明らかにされつつある。しかし，方法論やテーマの異なる研究領域間の交流はいまだ比較的乏しいのが現状である。そこで，本オーガナイズドセッションでは，研究領域間の交流に重点を置き，研究間の関係性を明らかにすること，また，新たな協同の可能性を探ることを目的とする。具体的には，洞察，アイデア生成，芸術，デザイン，発見など，広く創造性に関わるテーマを扱う研究発表を募集する。タイトルにある「キモ」とは，「創造性とは何か」「創造性を生み出す認知プロセスとはどのようなものか」「創造性を高めるのに必要な要因は何か」など，創造性を考えるにあたって各自が重要と考える問いとその答えを意味している。それぞれがキモと考えるテーマについて発表していただくとともに，(a) 創造性をどのように捉えるのか，(b) 創造性を高める上でどのような要因・条件が必要かの 2 点を共通の問いとし，発表時に，各自の研究を報告することに加えて，問いへの回答を明示していただく予定である。多様な背景をもつ研究者が，創造性に関する共通の問いを足場として議論を行う中で，それぞれが考える創造性のキモをつかむきっかけとなることを期待したい。

キーワード: 洞察，アイデア生成，芸術，デザイン，発見

構成

趣旨説明
横山拓　洞察問題解決におけるメタ学習
小田切史士　洞察問題解決における潜在情報の性質 ―連続呈示された閾下情報は統合できるのか
寺井仁　説明転換における事実参照に関する検討
寺井あすか　比喩における創発的解釈生成における神経機構の時間動態
山川真由　共通点発見課題を通じた創造的アイデア生成プロセスの検討
小室 弘樹　オブジェクトとの相互作用が創造的アイデア生成に及ぼす影響 ―視覚的入力の抑制はアイデアの質を高めるか―
本田秀仁　多様な視点で未来を見る: 未来に関するアイデア生成プロセスにおけるエキスパートとノンエキスパートの違い
縣　拓充　総合大学におけるアートを通じた創造的な思考のトレーニング

OS09-1　洞察問題解決におけるメタ学習

横山拓(青山学院大学社会情報学研究科)，鈴木宏昭(青山学院大学教育人間科学部)

本論文は洞察問題解決の熟達化におけるメタ学習のプロセスを明らかにする. 被験者 1 名に複数の洞察問題を解かせる実験を行ったところ, 被験者が多様な問題群に対する向き合い方, すなわち知覚と行為を協調させながら, 外的環境との巧みな相互作用を通じて問題を解決しようとする態勢(disposition)を形成していくことが示された. この過程は学習や発見の起こし方それ自体が学習されるメタ学習の過程であり, 定型的熟達化や特定の解決策の学習とは区別される.

OS09-2　洞察問題解決における潜在情報の性質 ー連続呈示された閾下情報は統合できるのかー

小田切史士(青山学院大学社会情報学研究科 HI コース修士課程)，鈴木宏昭(青山学院大学)

洞察問題解決において, 潜在処理が重要な役割を担うことが示されてきている。本研究では複数の情報を連続して閾下呈示し, 先に呈示された情報が後から呈示された情報によって上書きされる可能性を検証した。実験は洞察問題の正解画像を 6 秒間呈示したヒント画像呈示群, 正解画像と上書き画像を 3 秒ずつ呈示した上書き画像呈示群, 何も呈示しない統制群の 3 群で成績の比較を行った。結果, 閾下呈示を行った両群の解決人数は同程度増加し, 上書きは起こらなかった。

OS09-3　説明転換における事実参照に関する検討

寺井仁(近畿大学産業理工学部)，三輪和久(名古屋大学大学院情報科学研究科)，松林翔太(名古屋大学大学院情報科学研究科)，遠山直宏(名古屋大学大学院情報科学研究科)

本研究では, 初期の説明(先行説明)を根本的に覆す事実(キーファクト)が与えられた後, 説明の再構築を行う過程を対象に, 説明の根本的な転換(説明転換)の成否とキーファクトへの注意との関係について, 眼球運動測定を用いた検討を行った. 実験の結果, (1)キーファクトが与えられた後, 一旦はキーファクトへの注意が抑制されること, (2)説明転換に成功した参加者は, 説明転換の直前にキーファクトへの注意が高まっていたことが明らかにされた.

OS09-4　比喩における創発的解釈生成における神経機構の時間動態

寺井あすか(東京工業大学大学院社会理工学研究科)，中川正宣(東京工業大学大学院社会理工学研究科)，楠見孝(京都大学大学院教育学研究科)，坂上雅道(玉川大学脳科学研究所)，地村弘二(慶應義塾大学理工学部)

「A は B だ」という形式で表現される比喩の解釈として被喩辞(A)、喩辞(B)のどちらにも由来しない創発的解釈が生成される過程の神経回路に関して検討した。実験では、「A は B だ」という形式の文を被験者に提示し、自由に口頭で文の解釈を回答させ、課題遂行中の脳活動を測定した。その結果から、創発的解釈生成は、腹側内側前頭前野を中心とした大域的神経回路によって実装されており、その回路は右半球に側性化していることが示された。

OS09-5　共通点発見課題を通じた創造的アイデア生成プロセスの検討

山川真由(名古屋大学大学院教育発達科学研究科)，清河幸子(名古屋大学大学院教育発達科学研究科)

新奇なアイデアを生み出すには通常とは異なる枠組みで知識を用いることが重要となる。本研究では対象間の共通性を発見することを通じたカテゴリの再構成について検討した。参加者は 2 つの対象の関連性評定と共通点の発見が求められた。結果として, 対象間の関連性が低いほど発見された共通点は少なく, 妥当性も低かったが, 独自性と面白さは高かった。以上より, 離れた対象の共通点を発見することで新奇なアイデアのベースが作られることが示唆された。

OS09-6　オブジェクトとの相互作用が創造的アイデア生成に及ぼす影響 ―視覚的入力の抑制はアイデアの質を高めるか―

山下美穂(名古屋大学大学院教育発達科学研究科)，木村友香梨(名古屋大学教育学部)，小室弘樹(名古屋大学教育学部)，中村優花(名古屋大学教育学部)，清河幸子(名古屋大学大学院教育発達科学研究科)，中山清香(名古屋大学教育学部)

本研究はオブジェクトとの相互作用で得られる情報, 特に, 視覚的入力が創造的なアイデア生成に及ぼす影響を検討した. 大学生 64 名を対象にプラスチック板の使い道を考える課題を実施した結果, オブジェクトと相互作用出来る場合に創造的なアイデアの生成が促されることが明らかになった. また, オブジェクトと相互作用時に視覚的入力を制限した場合には, 触覚的情報に着目したアイデアがより多く生成されることが示された.

OS09-7　多様な視点で未来を見る： 未来に関するアイデア生成プロセスにおけるエキスパートとノンエキスパートの違い

本田秀仁(東京大学)，鷲田祐一(一橋大学)，須藤明人(東京大学)，栗田恵吾((株) 博報堂)，植田一博(東京大学)

本研究では、未来に関するアイデア生成手法である未来洞察手法を用いて、この手法のエキスパートとノンエキスパートを比較することにより、洞察力に富むアイデア生成に関わる認知的要因について、心理実験を実施して検討を行った。結果として、エキスパートはノンエキスパートに比べ、多様な視点からアイデアを生成していることが明らかになった。このことから、洞察力に富むアイデアを生成する上で、視点の多様性が重要な役割を果たしていることが明らかになった。

OS09-8　総合大学におけるアートを通じた創造的な思考のトレーニング

縣拓充(千葉大学コミュニティ再生・ケアセンター)，神野真吾(千葉大学教育学部)

筆者らは千葉大学の一般教養の科目の中で, アーティストとの協働によるアート・プロジェクトへの参加を通じた, 創造性の育成のための実践を行っている. 本発表では, この実践の背後にある創造性の考え方やモデル, 授業のカリキュラム, そしてインタビューや観察に基づく学生の体験を紹介する. 現時点では, 実証的な効果の検証は不十分と言わざるを得ないが, 多様な創造性の捉え方を比較したり, 創造性の育成方法を議論する上での, 一つの材料を提供できたらと考えている.

オーガナイズドセッション：
相互作用（インタラクション）を通じた英語の学習効果に関する認知科学的観点からの検討（OS10）

9 月 18 日（金）　16:00–18:30　会場：総合校舎 D 号館 D24

オーガナイザ：森下美和（神戸学院大学），坪田康（京都工芸繊維大学），横森大輔（九州大学），原田康也（早稲田大学）

概要：近年の日本の英語教育では，文科省の学習指導要領も含めて，コミュニケーション能力育成にはコミュニケーション活動が必須であるという考え方が支配的であるが，一見合理的に思えるこの考え方を支持・証明する理論的・実証的な研究結果は必ずしも多くない。

第二言語習得研究研究の分野では，「理解可能な大量のインプットが言語習得を促進する」というインプット仮説（Krashen, 1980），「アウトプットが言語運用の自動性を高める」というアウトプット仮説（Swain, 1985）に加えて，「コミュニケーション場面における意味のやりとりが特定の言語形式の習得を促す」というインタラクション仮説（Long, 1988, 1996）が提唱されてきた。

一方，心理言語学の分野では，プライミングを利用した実験が多用されるが，プライミングは対話の中では話し手の使用した語彙・構文を聞き手が使用する傾向（Levelt & Kelter, 1982）として現れるため，第二言語・外国語学習者の言語産出における統語構造の学習や統語処理能力の向上に利用できる可能性が指摘されている（McDonough, 2006; Morishita, 2013 ほか）。英語教育の現場で近年広く採用されているコミュニケーション活動には，相互作用（インタラクション）の同調効果を利用したプライミングに基づく学習効果が期待されるが，この点を教室での調査で明らかにすることが今後の課題である。

本セッションでは，上記のような観点から，相互作用を通じた英語の学習効果について，認知科学的観点からデータに基づく検証を行いたい。

キーワード：日本人英語学習者，相互作用（インタラクション），同調（アラインメント），プライミング，フィラー，談話分析，学習効果

構成

モデレータ：森下美和

【公募発表】坪田康「学部向け英語スピーキング授業におけるインタラクションの分析」

【公募発表】遠藤智子・横森大輔・河村まゆみ・原田康也「外国語としての英語スピーキング活動におけるメタ認知と聞き手の参与」

【公募発表】森下美和・原田康也「日本人英語学習者の wh 疑問文の知識と運用に関する調査：習熟度の観点から」

【依頼講演】原田康也・森下美和「日本人英語学習者のインタラクション（相互行為）を通じた自律的相互学習プロセス解明に向けて」

パネルディスカッション

司会進行：横森大輔

パネリスト：原田康也・坪田康・遠藤智子・森下美和

OS10–1　学部向け英語スピーキング授業におけるインタラクションの分析

坪田康（京都工芸繊維大学）

発表者が受け持つ学部向け英語プレゼンテーションの授業では、口頭発表、ポスター発表、口頭要約などのスピーチを練習させている。練習時には、受講者同士のペアワーク、受講者と社会

人が参加したグループワーク、Skype 経由で英語話者でつないた状態で全員の前で発表等と、随時、聴き手を変えさせている。それぞれの発表練習においてどのようなインタラクションが行われているか、どのような課題が残っているかについて具体的な事例を交えて発表する。

OS10–2　外国語としての英語スピーキング活動におけるメタ認知と聞き手の参与

遠藤智子（日本学術振興会・筑波大学），横森大輔（九州大学），河村まゆみ（言語アノテータ），原田康也（早稲田大学）

授業内のスピーキング活動は、外国語を話す練習の場であるだけでなく、それ自体がコミュニケーションの場でもある。本発表は比較的自発的で、聞き手に向けての発話である『応答練習』アクティビティをデータとする。英語から日本語へのコードスイッチングに着目することで、学習者がどのようなメタ認知を言語化しているのかを明らかにする。また、それと関連して他のメンバーがどのように応答の産出に参与するのかを分析する。

OS10–3　日本人英語学習者の wh 疑問文の知識と運用に関する調査：習熟度の観点から

森下美和（神戸学院大学），原田康也（早稲田大学）

著者たちのこれまでの調査で，日本人英語学習者はその習熟度によらず，wh 疑問文の統語構造についての知識が乏しく，また運用に結びつく訓練を受けていてないため，特に音声産出において大きな困難を伴うことが分かっている．本調査では，習熟度の異なる大学生に対して，授業内で平叙文・疑問文の再生または（平叙文から wh 疑問文への）転換を繰り返す練習を行い，その効果を分析・検討した．

OS10–4　日本人英語学習者のインタラクション（相互行為）を通じた自律的相互学習プロセス解明に向けて

原田康也（早稲田大学），森下美和（神戸学院大学）

コミュニケーション活動の中で英語の知識が定着し運用能力が向上することを実証することをめざして，インタラクションに基づく自律的相互学習について報告する．『仕事で英語が使える』ためには，大学英語教育においてアカデミックな学習活動の中で英語を使用する訓練を行い，文法・語彙の知識定着・運用の自動化・発音・リスニング能力の向上・英語でコミュニケーションを図ろうとする態度の育成が求められる．

オーガナイズドセッション：　同調，共感，そして社会性をつなぐ（OS13）

9 月 18 日（金）　16:00–18:30　会場：総合校舎 D 号館 D44

オーガナイザ：髙橋英之（大阪大学），小森政嗣（大阪電気通信大学），村田藍子（北海道大学）

概要：近年の研究により，社会性の根幹には個体間の潜在的な運動や感情の同調が重要な機能を担っていることが明らかになりつつある．同調と社会性をつなぐ一つのキーワードが「共感」であると思われるが，運動の同調がどのように共感に結びつき，それが社会形成に結ぶ着くのか，その道筋については明らかにされていない．本オーガナイズドセッションにおいては，主に同調

や共感という観点から社会性の研究をされている多様な分野（心理、工学、神経科学）の研究者の方々に様々な観点から御講演いただくことで，個体間同調が社会性に結びつくメカニズムについて議論を深めたい．

キーワード：同調，模倣，共感，社会認知

構成

太鼓叩きロボットとのリズム遊びがそのロボットをモチーフとした子どもの描画に与える影響
　伴碧（同志社大学）
相互作用場面における苦痛の情動伝染　村田藍子（北海道大学）
みつめあいにおける社会的随伴性検出の神経基盤：Hyperscanning fMRI を用いた研究
　小池耕彦（生理学研究所）
リズムの協調による脳間コミュニケーション（招待講演）　水原啓暁（京都大学）
ペア歩行時の歩調の引き込みは対人印象に影響を与えるか　加藤正晴（同志社大学）
絆をはこぶドラミングセッション -リズムから恋愛パートナーの識別は可能か？
　岡崎善弘（岡山大学）
2 個体のイルカの首振り動作の相互影響　小森政嗣（大阪電気通信大学）
社会に遍在する潜在情報と身体同調（招待講演）　渡邊克己（早稲田大学）

OS13-1　太鼓叩きロボットとのリズム遊びが そのロボットをモチーフとした子どもの描画に与える影響

伴碧（同志社大学／大阪大学），高橋英之（大阪大学／CiNet），浅田稔（大阪大学）

個体間でリズムを共有することは，コミュニケーションにおいて重要な機能を担っていると考えられている。本研究では，機械的な外見をしたロボットとのリズム遊びの前後で，子どものロボットに対するイメージがロボットのリズムの特性に応じてどのように変化をするのかを検討した。その結果，子どもはリズム遊び後のロボットを対象とした描画において，ロボットに目を付与する傾向がみられた。今後は，リズム遊びにおける子どもの打点行動についても解析を進める。

OS13-2　相互作用場面における苦痛の情動伝染

村田藍子（北海道大学・日本学術振興会），西田洋司（慶応大学），大家慧（北海道大学），亀田達也（東京大学）

自他の間で情動が共有される現象は“情動伝染”と呼ばれ、共感性の基盤であると考えられている。しかし、従来の研究では他者の情動状態を観察した際の反応を一方向的にとらえるものが主流であったため、自他間で互いに影響を与え合うといった双方向的な過程を捉えることができなかった。本発表では双方の状態がリアルタイムで観察できる相互作用場面において、2者間の生理反応が同期する過程を示した実験研究について報告する。

OS13-3　みつめあいにおける社会的随伴性検出の神経基盤：Hyperscanning fMRI を用いた研究

小池耕彦（生理学研究所心理生理学研究部門），中川恵理（生理学研究所心理生理学研究部門），角谷基文（生理学研究所心理生理学研究部門），定藤規弘（生理学研究所心理生理学研究部門）

ヒトは自分の行動に相手が反応する社会的随伴性に，すなわちコミュニケーションがオンラインであることに非常に敏感である．しかしどの脳領域が，コミュニケーションのオンライン性を検出する役割を果たしているかについては，明らかになっているとは言いがたい．本研究では，二者同時計測 fMRI 装置を利用して，オンラインコミュニケーション時には，小脳が選択的に反応することを明らかにした．

OS13-4　リズムの協調による脳間コミュニケーション

水原啓暁（京都大学）

リズムの協調現象はさまざまな場面でみられる現象であり，脳の情報処理の観点からも注目を集めている．脳内でのリズムの協調は，複数の脳部位間の結合を状況に応じて切り替える役割を担っており，このことで柔軟な情報処理を実現している．さらに同様のリズムの協調現象が，コミュニケーションの場面においても脳と脳の間で観察される．講演では脳部位間の情報伝達と，脳間のコミュニケーションのアナロジーを検証することでリズムの協調の役割を議論する

OS13-5　ペア歩行時の歩調の引き込みは対人印象に影響を与えるか

加藤正晴（同志社大学赤ちゃん学研究センター），北川智利（NTT コミュニケーション科学基礎研究所），高野裕治（同志社大学赤ちゃん学研究センター），木村聡貴（NTT コミュニケーション科学基礎研究所），廣瀬治人（NTT コミュニケーション科学基礎研究所），柏野牧夫（NTT コミュニケーション科学基礎研究所）

だれかと話しながら歩いている時，自分の歩調がつい相手に引き込まれてしまうことがある．我々は歩調引き込みの時間が長いほどその後の互いの対人印象が良くなることを見いだした．この関係は相手が初対面の時にのみ観測され，事前に交流を深めた場合には見られなかった．また歩行中の二人の発話の総重複時間によっても対人印象の改善は予測可能であった．特にペア歩行の初期段階では歩調引き込みと重複時間が独立して対人印象に影響を及ぼすことが示唆された．

OS13-6　リズムの集団間シンクロが促進するパレイドリア錯覚 -没集団行動が生み出すエージェント幻想の脳プロセスの探究-

高橋英之（大阪大学　/　CiNet），伴碧（同志社大学 / 大阪大学），守田知代（大阪大学　/　CiNet），内藤栄一（CiNet），浅田稔（大阪大学）

様々な宗教行事において，楽器や体の動きなどによる集団のリズムシンクロがみられる．このように集団シンクロは我々の文化と密接に結びついている一方で，リズムシンクロがどのような心理的作用を個人にもたらすのかについては，まだわからない点が多い．本研究では，このような集団のリズムシンクロがパレイドリア錯覚（無意味な刺激の中に生き物を見出す現象）を促進するという我々が発見した行動実験と fMRI 実験の知見を紹介したい．

OS13-7　2 個体のイルカの首振り動作の相互影響

小森政嗣（大阪電気通信大学情報通信工学部），小窪久美子（大阪電気通信大学大学院工学研究科），Lira Yu（京都大学霊長類研究所），堂崎正博（名古屋港水族館），友永雅己（京都大学霊長類研究所）

本研究ではリズミカルな協調動作がどのような相互作用過程を経て生じるのかを検討するための手法を構築し，2 個体のイルカのペアが頭部を振る動作のシンクロニーの生起・継続過程の詳細な検討を行った．オスのハンドウイルカのペアが飼育員のハンドシグナルによって 15 秒間左右に頭部を振る動作を行った 8 事例を解析対象とした．頭部動作を位相角に変換しこれらの角度の関係を角度相関および角度偏相関により評価し，シンクロニーのおよび相互影響の変化を分析した．

OS13-8　社会に遍在する潜在情報と身体同調

渡邊克巳（早稲田大学/東京大学）

行動と生理状態の同期は社会的相互作用や共感の基礎となると考えられている．今回の講演では，オーガナイズドセッションにおける各発表に対する総評を行った後に，特に社会的相互作用における潜在的な側面の重要性について議論したい．また我々が最近始めた「潜在アンビエント・サーフェス情報の解読と活用による知的情報処理システムの構築」に関する研究プロジェクトについても紹介を行い，その上でフロアも交えて「同調・共感・社会性」というテーマを今後，如何に研究していくのかについての議論を深めたい．

口頭発表 1（O1）

9 月 19 日（土）　9:30–10:50　会場：総合校舎 B 号館

O1-1　下位構文スキーマが容認性判断に与える影響の統計的評価

斎藤幹樹（京都大学大学院博士課程）

本研究は、下位構文スキーマの定着度が容認性判断に対して与え得る影響を統計的に評価する事を目的とする。下位構文スキーマは「○○先生」のように、部分的にスロットを有するような言語知識である。重回帰分析を主軸とした分析の結果、母語話者に対する容認性判断実験によって得られた各刺激語の評定値の予測に下位構文スキーマの頻度が有意に寄与していた。この事から本論は下位構文スキーマの定着度が容認性判断に影響している可能性があると結論付ける。

O1-2　説明しながらメイクする―談話・非談話境界の相互作用―

天谷晴香（東京大学大学院総合文化研究科）

メイク動画では、参与者が行う化粧の行程を教示・実演し、また行程に関する雑談を行うというマルチアクティビティーが行われている。発話内容は教示と雑談であり、身体動作としては教示に伴う動作と実演が含まれる。発話を談話セグメント(Grosz & Sidner 1986)で区切り、身体動作をジェスチャー・ユニット(Kendon 2004)を援用しタグ付けした。これらの談話／非談話の単位の重なりとずれから活動の滞りを検知する。

O1-3　読書における文脈依存的な認知処理のモード

布山美慕（慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科），日高昇平（北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科），諏訪正樹（慶應義塾大学環境情報学部）

小説を読む際の読者の認知処理は質的に変化するのだろうか？本研究では，小説を読む間の 2 ページ単位の読解時間を観測し，この読解時間の統計的な分布を推定して，読者の認知処理内容と処理速度の変化を調べた．その結果，読解時間の分布は 2 つのガンマ分布の混合分布と推定され，読書中に処理内容・速度の異なる 2 種類の認知処理が用いられることが示唆された。さらに，この処理の変化は同一作品を読んだ被験者間で類似し，作品の文脈に依存することが示唆された．

O1-4　肝切除手術における 3D 肝臓モデルの利用に関する検討

前東晃礼（名古屋大学未来社会創造機構），三輪和久（名古屋大学大学院情報科学研究科），寺井仁（近畿大学産業理工学部），伊神剛（名古屋大学医学部），中村嘉彦（ 国立苫小牧工業高等専門学校情報工学科），森健策（名古屋大学情報連携統括本部）

本研究では，エスノグラフィーの手法に基づいて，肝切除の手術現場における 3D 印刷された肝臓モデルの利用について検討を行った．分析の結果，3D 印刷された肝臓モデルの利用は，医師らが持つ患者の肝臓のメンタルモデルの精緻化，正確な肝切除のメンタルシミュレーション，そして，医師間のメンタルモデルの共有を促進することが示唆された．

口頭発表 2（O2）

9 月 19 日（土）　15:30–16:50　会場：総合校舎 B 号館

O2-1　学習方法の違いが視覚運動系列学習に及ぼす影響

田中観自（東京大学先端科学技術研究センター），渡邊克巳（東京大学先端科学技術研究センター）

試行錯誤を伴いながら連続的な動作を学習していく場合，エラー後の学習をどのようにするのかが重要である．本研究では，系列の学習中にエラーが生じたとき，系列の最初からやり直す場合とエラーが生じた場所からやり直す場合の学習効果を比較した．結果として，最初から系列操作をやり直す方が，その場でやり直す場合に比べて，少ないエラー回数かつ速い平均速度で操作できることが明らかとなり，効率的な学習方法であることが示された．

O2-2　自閉スペクトラム症の特異な視覚とその発生過程の計算論的解明：知覚体験シミュレータへの応用

長井志江（大阪大学），秦世博（大阪大学），熊谷晋一郎（東京大学），綾屋紗月（東京大学），浅田稔（大阪大学）

本研究では，ASD の特異な知覚の発生過程を計算論的アプローチから解明することを目的とする．特異な症状が現れる知覚として視覚に注目し，コントラストの強調や不鮮明化，砂嵐状のノイズといった視覚過敏・鈍麻が，環境からのどのような視聴覚刺激によって引き起こされるのかを，構成的手法を導入した認知心理実験によって明らかにする．さらに実験結果をモデル化することで，ASD の視覚世界を再現するヘッドマウントディスプレイ型知覚体験シミュレータを開発する．

O2-3　Neural Correlates of Action and Speech Memory Based Deception: A Near-Infrared Spectroscopy (NIRS) study

齋藤洋典(名古屋大学大学院情報科学研究科)，Victor Palacios(スタンレー電気株式会社)，大井京(名古屋大学大学院情報科学研究科)，林辰暉(名古屋大学大学院情報科学研究科)，山田涼馬(日本大学)，巌島行雄(日本大学)，齋藤五大(東北大学大学院文学研究科)，行場次朗(東北大学大学院文学研究科)

本研究では，嘘と欺きを含む情報の発信者(Liar)とその受信者(Detector)の脳活動を対面状況で近赤外分光法(NIRS)によって同時計測し，嘘と欺きの生成と検出に関わる認知神経機構を検討した．特に，Liar による遂行(発話と動作)の真偽の口頭報告が， Liar と Detector の脳活動に与える影響を検討し，嘘や欺きに関わる特定の脳領野を仮定することなく，動作や発話による虚偽に応じた神経基盤の追求が可能であることを検証した．

02-4　鏡で自分を見ると食事をおいしく感じる –大学生と高齢者の比較–

中田龍三郎(名古屋大学大学院情報科学研究科)，川合信幸(名古屋大学大学院情報科学研究科)

本研究は鏡を見ながら食事すると単に孤食するよりも食品をよりおいしく感じることを初めて報告する。この結果は従来考えられてきた気分(ムード)以外の要因も共食によるおいしさの向上に関係していることを示唆するものであった。さらに大学生でも高齢者でも年齢に関係なく鏡を見るとおいしさの認知は向上した。高齢化が急速に進む日本では高齢者の孤食が社会問題化している。本研究から孤食の問題に対処するうえで有用な高齢者の食認知に関する知見が得られた。

フラッシュトーク (FT1)
9 月 19 日 （土）　17:00–17:40　会場：総合校舎 B 号館

フラッシュトーク

P1-1〜P1-8, P1-10, P1-12〜P1-35　各1分間の口頭による概要発表

ポスターセッション 1 (P1)
9 月 19 日 （土）　18:00–19:40　会場：大学会館 1 階
フードコート 1・2

P1-1　事業企画のためのデジタルストーリーテリング

竹田陽子(横浜国立大学・環境情報研究院)

本研究は、事業企画のデジタルストーリーテリングのワークショップを実践し、作品の構造・内容と視聴者の反応・評価(N=74)の関係を見て効果的な方法を探った。各作品には、主人公が困難に遭うことで問題の所在を暗示し、そこからビジネスの成功要因を分析し、方法を提示するという構造が共通して見られ、物語と分析が過不足なく構造的、内容的に接続されていることが視聴者の高評価につながった。また、物語では、聞き手にも共有された経験を示すことが有効であった。

P1-2　研究手法のモデル化によって提案した ITS と情報社会論の融合による成果

森田均(長崎県立大学国際情報学部)

本研究では、パッシブからアクティブへの転換を基本コンセプトとした情報社会論を拡張するためのフィージビリティースタディ(FS)の成果について報告する。この FS の目的は、情報社会論に移動や運搬の手段を安全性経済性と環境に配慮した網(ネットワーク)へと変貌させた ITS(Intelligent Transport System)の研究・教育と実践の手法を導入する可能性を検討することである。

P1-3　間合いにおける受動と能動

園田耕平(滋賀大学)，谷伊織(総合研究大学)，佐藤亘(神戸大学)，郡司幸夫(早稲田大学)

我々は、日常生活において”間合い”を日々感じている。本研究は、その間合いとはなにかという疑問を出発点としている。間合いは通常、自然状況に現れる自発的な現象ではあると留意しつつも、本研究では実験的な検証を試みた。実験では、動画から切り出した静止画を使い、被験者がその静止画をめくる時間間隔を間合いであると定義した。その間隔を解析することで、間合いがもつ幾つかの性質の一端を明らかにしていつもりである。

P1-4　音楽演奏における観客効果：演奏者の心拍，不安および第三者評価の分析

正田悠(同志社大学文化情報学部・日本学術振興会・Centre for Performance Science, Royal College of Music)，阪田真己子(同志社大学文化情報学部)，Aaron Williamon(Centre for Performance Science, Royal College of Music)

音楽演奏における観客効果を調べるために，10 人のバイオリン演奏者に，自身にとって十分に学習された楽曲と挑戦的な楽曲を観客あり条件と観客なし条件で演奏してもらった．その結果，従来の研究と一致して，学習された楽曲では「観客あり」の方が，挑戦的な楽曲では「観客なし」の方が，それぞれよい評価を得ることが示された．実践的には，十分に楽曲を学習することによって人前でのパフォーマンスが向上する可能性が示唆された．

P1-5　運動計測と言語報告に基づく身体スキル習得過程の分析

市川淳(名古屋大学大学院情報科学研究科)，三輪和久(名古屋大学大学院情報科学研究科)，寺井仁(近畿大学産業理工学部)

本研究では，3 ボールカスケードの習得において，基本動作に従っていないような個人特有の身体動作が観察されるのか，加えて，個人特有の身体動作が観察された際，それは意識的な工夫である着眼点に基づいているのかについて実験的検討を行った．その結果，連続キャッチ数 100 回以上を達成したジャグラー5 名のうち 2 名で，個人特有の身体動作が観察され，着眼点に基づいていることが確認された．これは，意識的制御が身体動作に作用することを示す．

P1-6　専門家によるワークショップ型教育実践における教授行為のシークエンス–小学校での音楽アウトリーチにおける教授行為の形態に着目して

新原将義(筑波大学大学院博士後期課程)

近年，教育現場に校外の専門家が出張して行われるワークショップ型の実践が急増している。本研究では，プロの音楽家によって行われた「音楽アウトリーチ」の事例から，参加者間の対話を詳細に分析し，ワークショップにおける教授・学習プロセスを「スキャフォールディング」及び「非スキ

ヤフォールディング」の 2 つの観点から整理すると共に，オーケストラの集団練習過程の相互行為分析（新原・茂呂，2014）との比較から，学校における実践特有の特徴について考察した。

P1-7　中学生は、資料から堆積当時の地層をどのように推察するのか。　～現場教員のデザイン実験を通した足場掛けの進化～

岩田眞樹子（放送大学教養学部（みどり市立笠懸南中学校））

日々の授業実践において、多くの教師は、生徒の実態に応じて、指導のねらいを達成するために、指導内容を変えずに、より効果的な指導方法を教師が探究的に選択していく。今回、授業において、指導内容をそのままに、指導方法を変えたときに、根拠を適切に用いて課題解決ができる生徒がどのように増えるかを見て取りながら，子供の問題解決を効果的に支える「足場掛け」について考察した.

P1-8　環境との相互作用から見た“ぼんやり”：ビデオデータ記録作業時の観察から

大塚翔（筑波大学大学院人間総合科学研究科心理学専攻），原田悦子（筑波大学人間系）

本研究の試みは，従来，認知心理学的に検討されてきた“ぼんやり”を，環境との相互作用の視点から問い直すことである。長時間のビデオデータ記録作業中の行動とインタビュー内容を分析した結果，人が，記録作業を局所的に組織化する中で「この状況では何もイベントが出ないはず」と見通しを立てており，その説明可能性をリソースに，自身の経験を“ぼんやり”と語っていた。本研究の議論は，“ぼんやり”の本質を「状況」に置くための視点を提案する。

P1-9　スランプ回避のための学びのデザイン

堀内隆仁（慶應義塾大学環境情報学部），諏訪正樹（慶應義塾大学環境情報学部）

スポーツスキル獲得を目指してからだメタ認知を行う学び手は、身体統合モデルの破壊と構築を繰り返す。その過程において、客観的パフォーマンスの低下に加えて学び手自らが身体統合モデルの構築に難航していることを自覚する状態をスランプと定義すると、学び手がスランプを回避するには、異分野で活動する人間を集めて語り合う場を設けることが有効であろう。分野が違うことによる語り方・考え方の根本的な違いをヒントとして新たな着眼点を得ることにつながるからである。

P1-10　退屈度を予測する誘発性と覚醒度の 2 次元モデルの作成

吉村直己（大阪府立大学），牧岡省吾（大阪府立大学）

これまでの研究では退屈の原因を認知的な要因に絞って考えており感情全体的から退屈を検討した研究は行われていない．そこで本研究は質問紙を使って誘発性と覚醒度の2次元を使って退屈を予測する重回帰モデルを作成することを目的とする．重回帰モデルの決定係数は.79 であり，誘発性より覚醒度が退屈に大きく影響を与えている事が明らかになった.

P1-11　個性ある個体を最大化するための条件探索

城真範（東大・産総研）

個人を取り巻く環境、個人の考え方によって、個人の特異性を磨くためには何が大事であるかを調べるため、簡略化したモデルでシミュレーションを行った。その結果、広いジャンルに目を向けることが最も重要であり、特に他者との能力差において、自己と近い点に着目して努力する場合には、多くの人と結合することも重要であることが分かった。

P1-12　文の産出に関わる意味情報と照応

伊東朱美（非常勤講師（東京外国語大学））

本研究では代名詞などの照応表現を含む文が産出される際「意味役割」の情報が指示内容の決定に大きな影響を及ぼすことを明らかにする。代名詞照応に関しては現在のところ中心化理論による説明が一般的だが、意味役割という概念を導入しての詳細な検討は行われていない。「対象物＞到達点＞出発点」という意味役割の階層を中心に、従来から代名詞照応に影響するとされる語順や格、時には主題や視点よりも意味役割の情報が照応に大きく作用することを示す。

P1-13　日本語の相づちの頻度とタイミングに関する総合的考察

羅希（神戸大学国際文化学研究科），定延利之（神戸大学）

従来の研究では「そもそも相づちとは，相手とのコミュニケーションの中で，インタラクティブな状況に埋め込まれた形で発せられるものだ」という認識が十分透徹されているようでいて，実は必ずしもそうではなかったのである．というのは，「相づちが相手の先行発話（速度，内容に対する理解度や態度）にどのように影響されるか」という問題が追求されていないからである．本発表では発表者らの先行研究を発展させることによって，この問題の解決をはかろうとするものである.

P1-14　討論動画視聴においてテキストによるコメント提示が理解と批判的思考に及ぼす影響

犬塚美輪（大正大学）

本研究では，動画に SNS のコメントがテキストで表示されることによって，視聴者の理解と批判的思考がどのような影響を受けるかを検討した。疑似科学に関する討論動画を題材に SNS コメントあり群(n=30)と，コメントなし群(n=31)に分け，視聴後の理解度と疑似科学に関する態度を比較したところ，SNS あり群が，取り上げた疑似科学に対してより懐疑的に判断した。結果をもとに，SNS コメントの影響プロセスについて論じた。

P1-15　なぜロボットは「はい-いいえ」質問に対して「はい」と答える傾向があったか：人とロボットのインタラクション実験に基づく計算論的考察

岡夏樹（京都工芸繊維大学 情報工学・人間科学系），服部侑介（京都工芸繊維大学 大学院工芸科学研究科），深田智（京都工芸繊維大学 基盤科学系），尾関基行（京都工芸繊維大学 大学院工芸科学研究科）

Okanda & Itakura (2010)は、3 歳児は質問に対する答を知っている場合でも「はい-いいえ」質問に対して「はい」と答える傾向があることを示した。我々のロボットは物の名前と「はい-いいえ」質問を含む 3 種類のモダリティの発話への適切な応答を並行して学習する。このロボットが物の名前を正しく覚えた後でも肯定バイアスを持つことを実験的に示した。本論文では、肯定バイアスの成立メカニズムを計算論的に論じる。

P1-16　ソフトウェア技術者の思考の特徴：その役割認識と価値観

谷川由紀子(NEC 情報・ナレッジ研究所／筑波大学大学院)，鈴木栄幸(茨城大学)，加藤浩(放送大学)，福住伸一(NEC 情報・ナレッジ研究所)，原田悦子(筑波大学人間系)

情報システムの設計開発を担うソフトウェア技術者とユーザビリティ専門家に，仕事の経験や環境，仕事に対する認識をインタビューし，その役割認識と価値観に焦点をあてて分析した．その結果，ソフトウェア技術者とユーザビリティ専門家には，システム視点と利用者視点に基づく役割認識の違いや，制御焦点理論(Higgins，1997)における予防焦点と促進焦点に類似する価値観の違いがあること，それが協業時の齟齬を誘発していることが示唆された．

P1-17　芸術活動の経験と鑑賞態度が表現の触発に及ぼす影響

石黒千晶(東京大学大学院教育学研究科)，岡田猛(東京大学大学院教育学研究科)

本研究は芸術表現経験が触発体験にどのように影響するかを検討した。その際に、媒介変数として、芸術表現への有能感と芸術鑑賞の態度を仮定し、自分と他者の表現を伴う鑑賞態度が最も触発体験を予測し、芸術表現経験は芸術表現の有能感と自分と他者の表現を伴う鑑賞態度を媒介して触発体験に影響するという仮説を立てた。185 名の大学(院)生を対象に仮説を検証する調査を実施した。重回帰分析と構造方程式モデリングの結果、仮説が部分的に支持された。

P1-18　写真のスタイルが鑑賞時の作者に関する推測に及ぼす影響–発話プロトコルに基づく検討–

米山佳那(東京大学)，石黒千晶(東京大学)，岡田猛(東京大学)

私たちは芸術作品を鑑賞しているときに、その作品を作った作者に思いを馳せることがある。本研究は、写真作品の現実性が作者に関する推測に及ぼす影響を検討する実験を行った。20 名の実験協力者は、非現実的な写真を鑑賞する条件と、現実的な写真を鑑賞する条件にランダムに割り当てられ、計 8 枚の写真をそれぞれ 5 分ずつ鑑賞した。鑑賞中の発話データと鑑賞後の質問項目への回答を分析した結果、現実性の低い写真の方が作者に関する推測を促進することが示された。

P1-19　比喩理解における文脈情報利用の過程に関する予備的検討

平知宏(大阪市立大学大学教育研究センター)

本研究では，比喩文そのものの要因と比喩文が含まれる文脈の両者が，比喩理解過程そのものに与える影響について検討を行った．その結果 (1) 比喩的な理解を誘導される状況においては，字義通りの理解を誘導される状況よりも，文脈を参照しやすくなること，また，(2) こうした傾向は，比喩文を構成する語の慣習性に影響を受け，比喩的な意味で使用されやすい語が使用されているほど，文脈が参照される傾向は弱くなることが示された．

P1-20　協同学習形式の散文理解における役割と討議方法の効果（II）

光田基郎(聖霊女子短期大学)

協同学習形式の散文理解と内容討議において事前に先行オルグを与えられた閲読内容の説明役と無教示の傾聴・補足役と言う役割の差異と，ウェブ上での内容討議か対面での討議かの差異によって集団内対人態度(課題志向性,親和性とリーダーシップ・フオロワーシップ)の自己評定値が異なる傾向から対面討議での非言語的コミュニケーション効果を指摘した．

P1-21　Moral は道徳と何が違うか~道徳判断における異言語効果の分析～

中村國則(成城大学社会イノベーション学部)

本研究の目的は，第 2 言語の使用が意思決定に対して合理的な反応を促進するとする異言語効果の影響を日本人参加者で検討することである．実験参加者は 12 種類の道徳のジレンマ課題を日本語か英語のいずれかで判断することを求められた．分析の結果，先行研究の知見は再現されたものの，先行研究の解釈に疑問があることも同時に示された．

P1-22　拡張現実物を用いた条件文理解

佐藤有理(東京大学大学院総合文化研究科)，杉本雄太郎(慶應義塾大学 論理と感性のグローバル研究センター)，植田一博(東京大学大学院総合文化研究科)

図的推論における外的表現として、仮想現実物と現実物を同時に使用する拡張現実 AR に着目した。条件文の推論課題と共に、前提文に対応するように物を配置する実験を行った。「もし P なら、Q。かつ R。」からの「P」や「Q」の導出は必ず正しいとは言えないが、P と Q が仮想現実物として与えられた拡張現実の環境における正答率は、全てが現実物として与えられた場合よりも高かった。拡張現実物の存在の仕方と条件文の連言解釈回避の点から、AR の認知効果の説明を行う。

P1-23　対象スポーツへの関心が身体に対する美意識へ与える認知的効果の検証

山田雅敏(静岡大学大学院情報学研究科)，竹内勇剛(静岡大学大学院情報学研究科)

他者とのコミュニケーションにおいて，重要な魅力として身体美があるが，人の経験・環境が美意識の認知に影響を及ぼすとされる．本研究では対象スポーツを砲丸投とし，「砲丸投への関心により，砲丸投の身体に対する美意識に変化がある」と仮説を立て，構成的知覚(諏訪，2002)により仮説検証を行った．臨床心理士による半構造化面接結果を KBDeX により言語化ネットワークを作成したところ，有効なケースが確認された．

P1-24　指示詞使用における到達可能性の影響

鈴木陽介(東京電機大学大学院　理工学研究科　情報学専攻)，明地洋典(日本学術振興会　海外特別研究員　(タンペレ大学))，安田哲也(十文字学園女子大学人間生活学部　人間発達心理学科)，小林春美(東京電機大学理工学部 情報システムデザイン学系)

適切かつ効率的で社会的なコミュニケーションの実現には、進行中の指示対象をお互いに確認することが必要であり、指示詞はそれにおいて重要な役割を果たしている。指示詞は全ての言語に存在し、物理的距離はその理解及び使用に関して顕著な特徴を示す。しかし、指示詞の実際的な使用を決定するのは物理的距離ではなく、到達可能性である可能性が考えられる。そこで、

我々は対象物から指先までの物理的距離を正確に統制し、到達可能性の指示詞使用への影響を調査した。

P1-25　マルチモーダル生体信号解析によるパーソナルな写真に対する興味と記憶の強さの推定

速水慎太朗(名古屋大学大学院情報科学研究科)，森田純哉(名古屋大学未来社会創造機構)，平山高嗣(名古屋大学大学院情報科学研究科)，間瀬健二(名古屋大学大学院情報科学研究科)，山田和範(パナソニック株式会社)

本研究では，なつかしさを感じさせることで活動意欲を引き出させ心理的な健康を促進させることが目的としており，なつかしさを感じさせるために，写真の提示を行う．
本研究ではなつかしさを引き起こす要因に記憶と興味の強さが関係していると仮定し，脳波からこれらの要素の強さを推定するために相関を調べた．結果として，興味の強さではβ波との関係性の強さが確認でき，記憶の強さではγ波との関係性の強さが確認できた．

P1-26　入力モダリティによる音韻表象のちがい － 促音・非促音の音韻カテゴリ境界を手掛かりとした検討

中村暢佑(東京工業大学大学院　総合理工学研究科)，麦谷綾子(日本電信電話株式会社　コミュニケーション科学基礎研究所)，渡邊淳司(1．東京工業大学大学院　総合理工学研究科　2．日本電信電話株式会社　コミュニケーション科学基礎研究所)

私たちは、聴覚的(音声)もしくは視覚的(文字)に言語情報を処理する。このとき、聴覚的な言語処理において音韻処理が行われることは明らかであるが、視覚的な言語処理においても、文字等の形態分析から意味を理解するだけでなく、その文字の音韻処理が半自動的に行われることが示されている。そこで本研究では、聴覚的・視覚的言語情報の音韻処理によって生じるそれぞれの音韻表象が同じ性質を示すものであるのかを検討した。

P1-27　発話パタンとしてのつっかえの認定と話し手の能力

定延利之(神戸大学)，杜思宇(神戸大学院生)

驚いてつっかえる場合，その形式は「マ、マケドニア」のような途切れ型・語頭戻り方式になりやすい。本発表は，このように話し手の態度を漏らすつっかえ発話の「雄弁」性が，語音やアクセントを正しく実現できるという話し手のスキルを前提としていることを示す．つっかえ発話の意味は話し手の能力を見て解釈される．発話が話し手から独立していない点で，「雄弁」な非流ちょう性は「通常」の文法とは違ったあり方をしている．

P1-28　外部イベントと同期する人の行為～エスカレーターの観察より～

太田垣歩(神戸大学発達科学部)，野中哲士(神戸大学人間発達環境学研究科)

会話から昼夜のサイクルへの適応にいたるまで，外部イベントのタイミングに対して行動を調整することは，日々の活動において重要な位置を占めている．本研究では，人々がエスカレーターに乗る際に，どのようにタイミング制御を行っているかを理解することを目的としている．エスカレーターに乗る場面における人々の行動を 2 種類の異なる速さのエスカレーターで観察したところ，着

地に至る3歩の滞空時間や，接地タイミングにばらつきが見られた．

P1-29　啓発資料上の表現が読み手の態度に及ぼす影響

長岡千賀(追手門学院大学)

本研究の目的は，資料上のいかなる表現が読み手の態度に影響するかについて特定を進めることである．発達障害に関わる資料を題材とした．他者の存在の有無，および，文言のネガティブ／ニュートラルを操作した刺激を作成し評価実験に用いた．結果から，他者との関わりについて本来の当惑と，刺激との相互作用，および，他者の存在の有無，および，ネガティブ語の影響について考察した．

P1-30　周期的聴覚刺激の遅延逸脱に伴う事象関連電位成分の検討

桃川智行(明治大学／JST CREST)，富澤創(明治大学／JST CREST)，樋田浩一(明治大学大学院／JST CREST)，上野佳奈子(明治大学／JST CREST)，嶋田総太郎(明治大学／JST CREST)

外界の事象を知覚処理する上で，事象に伴う感覚刺激の時間的整合性は極めて重要である．そこで，本研究では，周期的に呈示される聴覚刺激列中に遅延を挿入した際の脳波計測から，遅延検出の知覚特性を検討した．実験の結果，挿入する遅延が大きくなるに従い，事象関連電位(N300 成分)の振幅が増大し，更に，遅延の検出回数と相関関係がみられた．このことから，N300 成分は聴覚刺激列中の遅延を検出する神経活動を反映した成分である可能性が示された．

P1-31　コンテンポラリーダンスにおける振付創作プロセス

中野優子(東京大学大学院学際情報学府)，岡田猛(東京大学大学院教育学研究科，情報学環)

熟達した振付家・ダンサーの森山開次氏に注目し，コンテンポラリーダンスにおける振付創作過程を，認知プロセスと身体プロセスの関わり合いという観点から検討した．結果，振付創作における認知プロセスは「着想の観点」「具現化の観点」「目的」の観点から捉えられ，これらの内容は，異なる特徴を持つ 3 つのフェイズを経て移り変わることが明らかになった。更に認知プロセスは，実際の身体運動である身体プロセスと輻輳的に相互作用しながら展開することも明らかになった。

P1-32　ブレイクダンスにおける即興的な対応方略とその要因

清水大地(東京大学大学院教育学研究科)，岡田猛(東京大学大学院教育学研究科・東京大学大学院情報学環)

本研究では，熟達者の有する即興的な表現方略について，ブレイクダンスを対象とした長期的なフィールドワークを行った．その際，既に獲得している 5 つの技術を複数回に渡る実践でどのように使用しているか，その使用方法はどのように変化するのかに着目した．結果として，熟達者は，各技術について 3 つのレベルから変更を加えつつ状況に適応した表現を行うこと，ある程度基本的なパターンを構築しつつ，状況に応じてそれらを変更して利用することが示唆された．

P1-33　原初的なインタラクションを通した他者性認知過程の検討

坂本孝丈(静岡大学創造科学技術大学院)，竹内勇剛(静岡大学創造科学技術大学院)

本研究では，身体的なインタラクションを通して対象が自身と関係を構築し得る他者である可能性に気付く過程を明らかにすることを目指し，抽象的な形状のロボットを介した人同士のインタラクションを観察した．参加者のインタラクション最中の発話からロボットの動作が他者によるものである可能性に気付いた時点を特定し，そのきっかけとなる要因を検証した．結果として，身体動作の同期や交互に行われることが他者性認知のきっかけとして機能していることが示唆された．

P1-34　ペットボトルキャップの開栓を困難にする要因：なぜ加齢によってペットボトルが開けにくくなるのか

栗延孟(東京都健康長寿医療センター，筑波大学)，富田瑛智(筑波大学)，須藤智(静岡大学)，原田悦子(筑波大学)

本研究では，加齢によりペットボトルキャップが開けにくくなる要因を明らかにするため，アンケート調査と，日常からキャップを開けることが困難な高齢者と容易な高齢者を対象に開栓実験を行った．その結果，両群の間に握力やピンチ力の差はなく，困難な高齢者はキャップの握り方，力のかけ方が多様であった．このことから，経験による「開けにくい」というメタ認知の結果，「より開けにくい」環境を作っている可能性が考えられた．

P1-35　視線追跡を用いた顔への注意と対人印象の関係の検討

徐昱哲(千葉大学人文社会科学研究科)，松香敏彦(千葉大学文学部)

本研究で注目したのは対人印象と顔全体かあるいは顔部分(顔のパーツ)との関連性である。特に、顔の印象形成には、目や鼻など、顔を部分的に着目するのか、それとも顔を総合的に観察するのか眼球運動を基に定量的に検証することを本研究の目的とした。

P1-36　広範囲の視線移動は拡散的創造思考を促進しない

仲嶺真(筑波大学大学院人間総合科学研究科)，山田陽平(奈良教育大学)，河原純一郎(北海道大学大学院文学研究科)，永井聖剛(愛知淑徳大学人間情報学部)

我々は，大きく腕を回すと，小さく腕を回したときに比べ，拡散的思考が促進されることを明らかにした。しかし，大きく腕を回す動作が必須であるのか，広範囲に視線を向けるだけで十分なのかは明らかではなかった。そこで，本研究では，広範囲の視線移動が，拡散的思考を促進するかを検討した。その結果，広範囲の視線移動は，狭範囲の視線移動に比べ，拡散的思考を促進しなかった。この結果から，拡散的思考の促進には，腕を回す動作が必須であることが示唆された。

口頭発表 3 (O3)

9 月 20 日 (日)　9:00-10:20　会場：総合校舎 B 号館

O3-1　情報探索経験を通して獲得される知識に関する ACT-R モデルを用いた検討

松室美紀(名古屋大学大学院情報科学研究科)，三輪和久(名古屋大学大学院情報科学研究科)，寺井仁(近畿大学産業理工学部情報学科)

情報が図的に提示される情報機器を用いて情報探索を行うとき、ユーザがどのような知識を獲得し、使用しているかを検討した。実験とコンピュータシミュレーションの 2 つの手法を用い検討を行った、その結果、ユーザは主に情報が提示される形式や、形状に関する知識を獲得、使用していることが示された。あわせて、情報の階層構造に関する知識を部分的に獲得、使用することにより、効率の良い探索を行っていた。

O3-2　問題解決における潜在ヒント効果の不安定性

織田涼(立命館大学文学部)，服部雅史(立命館大学文学部)

本研究では，問題解決における潜在ヒントの利用に，解決者の状態や特性の個人差が及ぼす影響を検討した．遠隔連想テストの一部の問題でヒントを閾下提示した．ヒントによる正答率の上昇効果と外向性および開放性の特性と正の相関が示され，環境からの情報受容性が高いほどヒントが利用されやすいことが示差された．また，ヒントの効果と覚醒水準の負の相関が示された．覚醒水準の上昇による認知機能の向上が，潜在ヒントの利用を妨害したと考えられた．

O3-3　重さ刺激の提示箇所による印象評価への影響

阿部慶賀(岐阜聖徳学園大学)

本研究では重さ刺激の事前提示が後続の価値判断に与える影響を検討した。実験ではジュースの印象評価について、ジュースの品質と量は同じでありながら、コップが重い条件と腕に重りがある条件、追加の重量負荷のない統制条件を設けて比較した。その結果、同じ重さでも評価対象物であるコップが重い方が、腕が重い条件より価値を高く評価することが示された。

O3-4　他者観察時の構えが洞察問題解決に及ぼす影響の検討

堀江美早(名古屋大学教育学部)，野々部佐紀(名古屋大学教育学部)，鈴木悠平(名古屋大学教育学部)，清河幸子(名古屋大学大学院教育発達科学研究科)

本研究では，他者の取り組みを観察する際の構えが洞察問題解決に及ぼす影響を検討した．実験参加者は，他者の取り組みのうち，よい点に着目するよう促された他者利点観察条件，よくない点に着目するよう促された他者欠点観察条件，観察のない条件の 3 条件のいずれかに割り当てられ，30 秒ごとの取り組みと観察を繰り返しながら T パズルに取り組むよう指示された．その結果，解決成績に条件間に差は見られず，着眼点の固定は促進効果をむしろ損ねた可能性が示唆された．

ポスターセッション 2 (P2)

9 月 20 日 (日)　10:30-12:30　会場：総合校舎 D 号館　D23・D24

P2-1　ダンス必修化に伴う教員の不安構造の分析

山口莉奈(同志社大学大学院　文化情報学研究科)，正田悠(同志社大学大学院　文化情報学研究科，日本学術振興会)，鈴木紀子(帝塚山大学　経営学部)，阪田真己子(同志社大学大学院　文化情報学研究科)

平成 20 年告示の中学校学習指導要領に伴い、従前では選択であった「ダンス」が必修となった。

それに伴う様々な問題を解決するためには教員が抱えている不安を明らかにすることが重要であると考えられる。そこで本研究ではリズムダンス研修会に参加している現職教員を対象にアンケート調査を実施することで、教員が抱いているダンス指導不安がいかなる構造をもつのか、また、そのダンス指導不安が指導者の属性によってどのように異なるかを明らかにすることを目的とする。

P2-2　日本語の同音異義語処理への文脈の影響

水野りか（中部大学人文学部），松井孝雄（中部大学人文学部）

筆者らは，日本語母語者が種類や仲間の多い同音異義語を円滑に処理できるのは，日本語が高文脈依存だからではないかと考えた。そして，文脈がある条件とない条件で同音異義語と非同音異義語の語彙判断時間を測定し，文脈がある条件では同音異義語と非同音異義語の語彙判断時間に差がなくなることを確認してこの考え方を検証し，各母語者が母語や文化の特性に応じた処理を行っている可能性を示唆し，それらを再現しうる柔軟かつ包括的モデルの必要性を説いた。

P2-3　地球環境への取組みの評価におけるフレーミングの影響

山内保典（大阪大学），八木絵香（大阪大学）

地球温暖化対策事業を推進する際の三つの説明フレームとして，「地球温暖化」，「持続可能な社会」，「新成長戦略」を取り上げ，温暖化対策事業の評価に与える影響を比較した．その結果，約1/3 の事業で，フレームによって評価に有意差がみられた．また女性より男性，若年層より高齢層の方がフレームの影響を受けていた．また市民の平均的な支持を得られるフレームと，強い賛成と反対を比較的多く得られる論争的なフレームの存在が確認された．

P2-4　高齢者による高齢者のための高齢化研究の構想

小橋康章（株式会社大化社・成城大学）

認知科学的観点で高齢化研究の課題を展望し、研究のテーマ、研究の方法論、研究のコミュニティのあり方という3つの角度から JCSS に提案を行う：(1)認知的な諸問題など高齢化に伴う様々な問題や機会を、認知科学の重点テーマの一つと位置付ける。(2)高齢者を実験参加者とする実験研究のほか、高齢者の一人称研究を重点的に奨励する。(3)日本認知科学会にシニア会員制度を導入し、高齢化研究の主役を担ってもらう。

P2-5　加重による負荷が跨ぎ越え動作の知覚と行為の乖離に及ぼす影響

児玉謙太郎（神奈川大学経済学部），安田和弘（早稲田大学理工学術院総合研究所理工学研究所），園田耕平（滋賀大学教育学部），青山慶（東京大学大学院教育学研究科），樋口貴広（首都大学東京人間健康科学研究科）

本研究は、跨ぎ越え動作における知覚と行為の乖離を調べた。その際、行為能力を低下させるため非利き脚に加重による負荷を与え、実験的に知覚と行為の乖離を構成し、加重部位による乖離の現れの違いを調べた。実験の結果、足首条件では、行為能力を過小評価する傾向が見られたのに対し、太もも条件では、過大評価する傾向がみられた。これらの結果について、加重部位と身体特性変化後の探索行為、実験課題として求められる行為の間の複雑な関係から議論する。

P2-6　生活支援技術の修得過程 - ワークシートを用いた分析 -

武田啓子（日本福祉大学）

本研究は，生活支援技術「車いすで平地の移送介助ができる」の学修内容を認知，精神運動，情意領域に区分したワークシートを用いて，講義，学内演習，実習後の評価から修得過程を吟味することを目的とした．評価区分ごとに学修内容を自己評価してもらい修得状況を検討した．結果，生活支援技術の修得過程として，学内演習での模倣から学ぶ基本的技術を反復練習し，対象者と関わる中で個別的技術を自己評価するなど，客観的に自分を認識する視点を育む必要性が示された．

P2-7　バナー広告の集中呈示とインターバルが単純接触効果に及ぼす影響

松田憲（山口大学），中嶌拓希（山口大学），楠見孝（京都大学）

本研究は刺激にバナー広告を用い，インターバル（5 分，1 週間）と呈示方法（集中，分散），呈示回数（3，6，9 回）の操作が単純接触効果に及ぼす影響を検討した。接触フェーズでは，架空 HP 上に 18 種類のバナー広告を大学生 36 名に呈示した。5 分後ないし 1 週間後の評定フェーズでは，好意度，親近性，新奇性，懐かしさ，商品購買意図を 7 件法，再認を 2 件法で求めた。実験の結果，1 週間のインターバルにより，集中呈示条件における各尺度の評定値が上昇した。

P2-8　知覚的母音挿入再考：母音変異としての摩擦音

松井理直（大阪保健医療大学）

Dupoux et al. (1999, 2011) は、日本語母語話者や子音連続間に母音を知覚することを報告し、これを知覚的母音挿入と呼んだ。これは借用語音韻論や日本語の母音無声化現象にも示唆を与える重要な研究である。しかし、この研究は音響的に母音が存在しないことが前提となっている。本稿は、日本語に子音に類似した摩擦母音が存在し、日本語母語話者が子音連続間に母音を知覚するのは、この摩擦母音の直接認識であることを論じる。

P2-9　テキストからの対象物認識における情報提示順序の影響

加藤祥（人間文化研究機構国立国語研究所），浅原正幸（人間文化研究機構国立国語研究所）

対象物に関する特徴的情報と情報提示順序が読み手の対象物認識に及ぼす影響を，クラウドソーシングを用いた大規模な被験者実験によって調査した．結果，各種の情報を追加することで正答率が単調増加するタイプの対象物と，情報提示順序によって情報が増えても正答率が減少するタイプの対象物が見られた．対象物の認識は，先に提示された情報で想定したカテゴリのメンバー間における差異情報が得られたときに進む傾向が確認された．

P2-10　「〜N を VN する」型重複の文法的理解

程莉（神戸大学大学院）

この発表では現代日本語共通語における「〜N を VtN する」型重複（例：「ノーベル賞を受賞する」）について，その自然さ〜不自然さを文法的な観点から検討する。重複が必ずしも不自然なものではなく，VtN が他動詞の場合は「VtN の性質」と「修飾要素の効果」といった要因，また，VtN が自動詞の場合は「動作主性」と「意志性」，「意識の推移」といった要因によって，重複の自然さを変えることを具体的に示す。

P2-11　文末詞による心理的関係構築の調整：顔文字と間合い感覚（１）

伊東昌子（常磐大学）

文末詞的に使用された顔文字の頻度が，送り手の受け手に対する身体的距離感に与える影響を調べた．独立変数は顔文字の頻度，受け手の性別，送り手が同性か異性かであった．状況設定は，お昼に友人を通して知り合った相手からメールがあり，来週の昼食に誘われるというものである．結果，顔文字が無しと少数使用の場合は，プロクセミックスにおける個体距離・近接相と遠方相の境界内外の距離感が喚起され，顔文字多用の場合は密接距離に近い距離感が喚起された．

P2-12　活動の中で学習を捉えるための理論枠組みの一検討（2）

三宅芳雄（放送大学）

この小論は活動の中で、学びがどう位置づけられるのかを考察し、議論するめの一つのエッセイである。人の活動は全体としてみれば、無数の事象がその実現に関わっているという意味で、大変複雑である。それを捉える枠組みも一つだけではない。ここでは、人の学びが活動のなかでどのように成立するのかを捉えるための枠組みの一端を提出し、議論の材料にしたい。

P2-13　人間の脳が果たす情報処理の相補的で多重的な相互作用を考える

福永征夫（アブダクション研究会）

地球環境問題、資源・エネルギーの枯渇、災害や事故の巨大化、貧富の差の拡大、難病の発生、内外の対立と争いの激化など、21世紀に生きるわれわれが直面する地球規模の難題群に主体的に対処するためには、人間の認知と思考や行動に、部分／全体、深さ／拡がり、斥け合う／引き合う、競争／協調、という一見矛盾し二項対立する相補的なベクトルの間に融合という臨界性を実現していくことが必須の条件となるだろう。

P2-14　障害者が働くことについて語ったナラティブについてのテキストマイニングを用いた分析

清野絵（（独）高齢・障害・求職者雇用支援機構），春名由一郎（（独）高齢・障害・求職者雇用支援機構），石崎俊（慶應義塾大学）

本研究の目的は、障害者雇用の促進に資するため障害者の就労の現状、課題、意見を明らかにすることである。対象者は 4,546 人、平均年齢 44.3±14.3 歳であった。方法は郵送法による調査を行い、自由記述文をテキストマイニングで分析した。その結果、障害者の具体的な就労の課題、仕事内容、重要な職場の配慮、就労に関する意見の傾向が示唆された。この結果は効果的な支援方法や制度を検討する際の基礎資料として活用できる。

P2-15　キャラクターの空間位置ステレオタイプが文章読解時の空間メンタルモデル構築に及ぼす影響

小島隆次（滋賀医科大学）

本研究は、キャラクターの空間位置ステレオタイプに注目し、このステレオタイプが文章読解時のキャラクターの位置関係把握や空間メンタルモデル構築に及ぼす影響について検討した。その結果、文章読解時における空間メンタルモデル構築に対するキャラクターの空間位置ステレオタイプ効果の存在と、キャラクターに関する空間位置ステレオタイプが特に想定されない場合には、文章中におけるキャラクターの登場順が空間メンタルモデル構築に影響を及ぼす可能性が示唆された。

P2-16　論理と確率についての推理を導く心の中のゲーム

犬童健良（関東学園大学）

本論文はゲーム理論を認知モデルに応用する．本論文が提案するアプローチでは，思考の結果は均衡点におけるエージェントの最適反応（本論文では情報反応モデルと呼ばれる）として近似される．ゲームの均衡点はフレーム理論に基づき解釈される．具体的応用として，4枚カードの選択課題と3囚人問題をとりあげる．これらは論理や確率を問うクイズ問題であり，直観的な解と数学的な解との間の対立が，適切なゲームモデルの選択として明快に説明される．

P2-17　縦格子とドット平面による立体錯視現象の研究—立体錯視像の実測データと脳内計算モデルとの誤差計量方法—

大槻正伸（福島工業高等専門学校），臼木大翔（福島工業高等専門学校），鈴木直也（福島工業高等専門学校），久野裕哉（福島工業高等専門学校）

「ドット平面」（一辺 0.5[cm]程度の正方形を制御し配置した平面）を「縦格子面」（幅 0.2[cm]程度の帯を縦に規則的に配置した平面）を通して，数 10[cm]離れて両眼視すると，帯状立体が知覚される錯視現象が起こる．h（縦格子面－ドット平面間距離）を変化させると，立体錯視が生起したりしなかったりする．本研究では h の変化による観察者の帯状立体知覚データと計算機シミュレーション結果の距離（誤差）を計量する方法を提案し実際に計量した．

P2-18　反響・残響下での避難誘導サイン音により生じる「迷い」の分析

山崎治（千葉工業大学情報科学部），小嶌直樹（インクリメントＰ株式会社）

本研究では、避難時誘導を想定し，サイン音の反響や残響によって方向判断の迷いがどのように表れるのかを明らかにしていく．そこで，仮想的な地下街空間に対して音響シミュレーションを行い，主要地点におけるサイン音の聴こえを再現した実験環境である「地下街シミュレータ（Sound Maze）」を構築し，サイン音の音源探索課題を実施した．結果，サイン音の音源位置を変えることで，迷いやすい位置が変化することが観察された．

P2-19　ピアノ演奏熟達過程における読譜視線の発達的変化と曲の構造との関係

長井りら（神戸大学発達科学部），野中哲士（神戸大学人間発達環境学研究科）

ピアノ譜は 2 段構成である複雑さ故に、注意を向ける対象は多数ある。本研究では、熟達者の練習過程における読譜視線に着目し、視線の変化や視線と曲の構造との関係性について明らかにすることが目的である。視線がより予期的になること、停留時間が長くなること、共通のポイントで眼が楽譜に近寄ると共に眼と楽譜の距離の変動が大きくなることが明らかになった。これら3つの結果は相互関係によって起こると考えられる。

P2-20　音韻カテゴリの形成過程における音響手がかりの利用と抑制

川﨑貴子（法政大学），マシューズジョン（中央大学），田中邦佳（法政大学）

本研究では 1)音韻習得が進むと音響手がかりの利用に変化が見られるか，2) L2 音の音素弁別に必要な手がかりに注意を払い，必要でない手がかりを抑制するようになるのか調査した．調査の結果，音韻習得が進んだ群は/s /と/ θ /の差をより大きく評価し，/f/を含む同一語の話者間の違いは小さく評価した．JLE にとって習得が容易な/f/では抑制が起こり，/ θ /の習得ではカテゴリ形成の音響手がかりを模索している段階だと考えられる．

P2-21 説明的文章の理解における最適な視聴覚提示タイミングの検討

髙橋麻衣子(日本学術振興会／東京女子大学)，田中章浩(東京女子大学)

本研究は，説明的文章を視聴覚提示する際に理解に最適な提示方法を検討することを目的としたものである。実験 1 では文章を視覚先行，聴覚先行，視聴覚同時のタイミングで提示し，理解成績を比較した。それに加えて実験 2 では視覚情報に，実験 3 では聴覚情報に参加者の注意を方向づけて文章理解の成績を比較した。3 つの実験の結果，視覚情報を聴覚情報に先行して提示し，かつ視覚情報に意識的に注意を向けることで理解が促進されることが示された。

P2-22 非説明的な映像表現に対する共感と運動前野の活動量の推移：北野武監督作品『Dolls』による検証

小川有希子(法政大学社会学部)，嶋田総太郎(明治大学理工学部)，金井明人(法政大学社会学部)，佐藤晃裕(明治大学大学院理工学研究科)，餘田尚彦(明治大学大学院理工学研究科)

本研究は日本映画『Dolls』を用いてフィクション映画の鑑賞過程における情動的共感を検証するとともに，非説明的な映像表現がどのような内的プロセスを活性化させるのか探ることを目的とし，鑑賞中の受け手の脳活動を NIRS で計測した．実験の結果，受け手の運動前野の活動量は登場人物の行為の経緯が提示されるに従い有意に上昇した．鑑賞中の MNS の活動を測定することで，映画のストーリーと演出がいかに受け手の共感を引き起こすか検証できることが示唆された．

P2-23 Twitter でのシャイな人々の自己開示～行動シャイネスと自己開示抑制～

小比田涼介(筑波大学　人文社会科学研究科　文芸言語専攻　応用言語学領域)，宮本エジソン(筑波大学　人文社会科学研究科)

先行研究では、シャイな人々の自己開示を促進する CMC 特徴に焦点が当てられてきたが、本邦では自己開示の促進に関わるシャイネス特徴について検討した。質問紙調査の結果、行動シャイネスは自己開示の抑制と関わっており、それが Twitter では弱くなっていた。一方意識シャイネスは、直感に反し、自己開示と正相関にあった。意識的にシャイな人々は、他者から認められたいがゆえに不安を感じやすい傾向にあり、両者の正相関はその欲求の現れである可能性を示した。

P2-24 計算機により生成された物語が人間の物語制作に与える影響の調査

秋元泰介(電気通信大学)，小方孝(岩手県立大学)

筆者らが開発した一つの物語生成システムを用いて，その出力が人間の物語制作に与える影響を調べる実験を行った．人間が，システムの出力を改変して物語を作るという使用方法を想定する．複数の物語の案を作る課題において，システムを利用する被験者群と利用しない被験者群の制作物の構造的な差異を分析し，人間がシステムによる物語の構造的な不完全さを補うことなどによって，特徴的な構造の物語が作られることを確認した．

P2-25 中国語における帰納的推論の計算モデルの構成 —名詞と形容詞及び名詞と動詞の関係を用いて—

張寓杰(東邦大学理学部情報科学科)，孫星越(東京工業大学大学院社会理工学研究科)，菊地賢一(東邦大学理学部情報科学科)，中川正宣(東京工業大学大学院社会理工学研究科)

本研究では、中国語における名詞と動詞の関係に名詞と形容詞(名詞修飾語)の関係を加え、大規模言語データの統計解析に基づき、確率的言語知識構造を再構築して、中国語における帰納的推論の計算モデルを構成し、心理学実験によりモデルの妥当性を検証する。さらに、本研究で構築した新しいモデルと先行研究のモデルを比較し、シミュレーションの結果が改善されていることを検証する。

P2-26 記号コミュニケーションにおける言外の意味による行動価値修正メカニズムの役割

金野武司(北陸先端科学技術大学院大学　知識科学研究科)，橋本敬(北陸先端科学技術大学院大学　知識科学研究科)

記号的なコミュニケーションにおいて，人は字義通りの意味だけではなく言外の意味を伝える．本稿では，これらの意味を伝えるための記号的なコミュニケーションシステムの形成実験を実施し，そこで得られる行動傾向を再現する計算モデルを構築する．この計算モデルを用いて我々は，言外の意味の成立には記号から意味を推定する仕組みだけでなく，その推定に基づく行動のシミュレーションと，先行的な行動価値の修正メカニズムが必要であることを示す．

P2-27 広告形式と商品画像が広告への移入に及ぼす影響

福田怜生(学習院大学大学院)

本研究の目的は，広告への移入を向上させる要因を明らかにすることである。移入とは、消費者が物語に没頭した状態と定義され，広告の説得効果を向上させる状態としてマーケティング研究などから注目を集めている。しかし、これまでの研究では、移入を向上させる要因は十分に検討されてこなかった。そこで本研究では、広告形式と商品画像に着目し、これらが移入に及ぼす影響について検討を行った結果、物語形式と高品質商品の画像が移入を向上させることが明らかになった。

P2-28 創造的なアイデア生成における観察の効果：紅茶を入れる場面のデザインを題材とした検討

新垣紀子(成城大学)，折戸朗子(桜美林大学)

本研究では、デザインなどを行う場面において、新たなアイデアの生成に「観察」がどのように影響するのかを明らかにする。紅茶を入れる場面の新しいデザインを行う実験を行った。その結果紅茶を入れる具体的な場面を観察すると、観察しない場合よりも、気づきの内容は、観察内容に依存したものとなり、生成されるアイデアは、より実現可能性の高い具体的なものになる傾向がみられた。

P2-29 自身の「嘘」に対する確信の生まれ方 ～他者視点取得と懸念的被透視感から～

石川悟（北星学園大学文学部）

嘘を吐く時，「自身の嘘によって相手を騙すことができた」という確信はどのように得られるのか．本研究では，相手の立場に立った思考および自身の振る舞いについてのモニタリングと，自身が吐いた嘘への自身の程度との関係について検討した．その結果，嘘を吐いているときの自身の内的過程に対するメタ認知が不十分なことが，嘘に対する確信を生み出す可能性が示唆された．

P2-30　漆芸用ヘラ製作過程における技能伝達

小谷俊輔（神戸大学），野中哲士（神戸大学）

漆芸に使われるヘラの製作技法の伝達場面における指導者とその周辺の分析を行った。具体的に指導者の発話・行動を観察し分析した。また製作の一連の流れを、それを構成する下位工程のユニットに分節化し、指導者の発話・行動の分析と関連づけ、指導者が目的の達成のために行う状況作りの特徴を明らかにした。また漆芸用ヘラの完成という目的に進む組織の創発において、逐一製作工程の細かい指示が出されるのではなく、ある種の「柔軟性」が存在することも示唆された。

P2-31　子どもの因果関係の理解と英語の動詞・不変化詞構文獲得の繋がりについて

本多明子（至学館大学 健康科学部）

言語の有標性に関して，無標形は有標形より構造的かつ認知的に単純で，頻度分布が広いと一般に考えられている(Givon (1991))．そして，このような無標形の特性により，無標形は有標形に比べて獲得され易いと言われている，この点に関して，英語の動詞・不変化詞構文 (Verb-Particle Construction)を取り上げ，当該構文の獲得について探究する．

ポスターセッション 3 (P3)

9 月 20 日 （日）16:10-18:10　会場：総合校舎 D 号館　D23・D24

P3-1　“デザインがよい” 日用品の印象の因子構造

後藤靖宏（北星学園大学文学部　心理・応用コミュニケーション学科）

“デザインがよい”日用品の印象の因子構造を明らかにするため大学生に対して質問紙調査を行った．因子分析の結果，斬新，洗練，機能，スタイリッシュ，および愛着の 5 因子が抽出された．この結果は，製品の新しさや形状、質感，あるいは色などの構成要因が整合性を持って融合していると認識されたときに“デザインがよい”と評価されるということを示している．また，外観に加え，製品本来の実際的な使われ方もデザインの善し悪しに関与していた．

P3-2　社交不安傾向が他者視線に対する脳内処理プロセスに与える影響 ー事象関連電位：P200 による検討ー

都地裕樹（明治大学大学院理工学研究科），嶋田総太郎（明治大学理工学部）

社交不安障害は他者からの批判的な評価に対して強い不安や恐怖を覚え,特徴的な生理反応を示す精神疾患である．
本研究では，健常者の社交不安傾向と他者視線の処理プロセスの関係について事象関連電位(ERP)を用いて検討したところ，正中前頭部での ERP:P200 の潜時が高社交不安者は直視＜よそ見＜閉眼の順で，低社交不安者は直視・よそ見＜閉眼の順で惹起した．
これは社交不安傾向が他者視線に対する処理プロセスを早める影響があることを示唆している．

P3-3　音楽の終止構造認識と身体性との関わり

柴玲子（東京電機大学、理研 BSI），古川聖（東京芸術大学），根本幾（東京電機大学）

音楽は、ヒトとヒトとが言葉を介さずにお互いに情動情報をやりとりできる、重要なコミュニケーションツールのひとつである。私たちが提唱している音楽情動コミュニケーションモデルを基に考えると、人間が音楽を介して情動情報をやり取りする際、音楽に関連した動作が音楽情動情報の伝達に影響を与える可能性がある。本研究では、終止構造認識時の脳活動が現れる脳の部位と運動に関連する脳の部位との関連を調べるため、fMRI による計測と解析を行った。

P3-4　一人ひとりが使いやすい図を活用する協調的な算数授業の効果

中村嘉美（放送大学教養学部），白水始（国立教育政策研究所）

小学生にとって理解困難な算数の単元において，自ら図を描き協調的に吟味することが理解を進めるかは重要な検討課題である。本研究では「割合」の単元で一人ひとりが選択した図で考えの可視化を図り，話し合いのツールとして活用する効果を検証した。5年生から6年生の10か月間にわたり同一児童を継続観察した結果，問題内容や難易に応じた作図選択が可能になり，作図が協調過程のツールとして活用され，成績向上に繋がった。

P3-5　自主的なプログラミングスキルの習得環境の提案

Ellina Rienovita（静岡大学），谷口政志（静岡大学），河原正人（静岡大学），竹内勇剛（静岡大学），林勇吾（立命館大学）

協調学習は多種多様な考え方を取り入れることにより従来の教師と学生の 1 対 1 による学習よりよい回答結果を得ることを目指す手法である．
本研究では自尊感情と学習意欲に着目して協調学習に及ぼす影響に関して調査を行ってきた．
実験ではエージェントを用いた学習環境の構築を行い，実学習状況でどのようなインタラクションがツールによる影響を受け，どのように自尊感情，学習意欲が変化していくのかを明らかにする．

P3-6　他者運動観察における代理報酬が行動選択に与える影響

小出允善（明治大学理工学研究科），嶋田総太郎（明治大学理工学部）

本研究では、代理報酬が観察者のその後の行動選択に与える影響を調べた。実験では、被験者に 2 人のモデルがジャンケンをしている動画を見せた後、ジャンケンの動作を実際にしてもらった。このとき、モデルはある手で勝つ確率が他の手よりも高くなるように設定されていたが、被験者はそのことに気づいていなかったにもかかわらず、自らもその手を他の手よりも多く選択した。この結果から、報酬を伴う他者運動の観察が観察者の行動選択に影響を与えることが示された。

P3-7　機能機構階層図を用いた知識構成型ジグソー法による学習の分析

大崎理乃（岡山大学），三宅なほみ（東京大学）

本研究は，協調学習における理解深化過程を明らかにすることを目的とするものである．今回の発表では，ツールとしての機能機構図の有用性検討のため，教材に対応する機能機構階層図を作成し，学習者の発話を分析した結果，あるレベルの理解のために他のレベルの知識を使いながら説明を構築していること，あるレベルの説明に一定の合意に到達することで次のレベルに対する問いが発生し，対話のレベルが移動することが確認されたことを報告する．

P3-8　人は情報機器利用をどのように学習しているのか：シミュレーションアプローチ

大門貴之（筑波大学人間総合科学研究科心理専攻），原田悦子（筑波大学人間系），須藤智（静岡大学大学教育センター）

高齢者に共通する IT 機器に対する学習困難さに関して，先行研究では系列的な問題解決の学習が高齢者と若年者で異なることを示した．本研究はその学習メカニズムを明らかにし実験データの説明を試みるためモデル比較ができるシミュレーションを行った．実験データから 2 つのシンプルな経路選択ルールを設定し 1000 回反復したところ，若年成人のデータについては部分的に実測値と適合を示したが，高齢者の学習を説明するにはより複雑なルールが必要であることが示された．

P3-9　二重課題状況における複雑な機器利用と加齢の効果：車載エアコンによる検討

富田瑛智（筑波大学），須藤智（静岡大学），原田悦子（筑波大学）

本研究では，複雑な操作を必要とする日常的な機器として車載エアコンを対象とし，二重課題状況において，認知的な加齢の効果がどのように現れるのか検討した。実験では大学生と高齢者が，車載エアコンの操作課題を行った後，模擬的な運転課題と同時に車載エアコンの操作課題を行った。その結果，高齢者は模擬運転課題とエアコン操作課題を同時に行うことよりも，課題間の切り替えに困難を示している可能性が示された。

P3-10　ケーキ職人現場の事例研究から現場参加と技能の関係を探る

松熊亮（首都大学東京大学院　人文科学研究科）

本発表は社会文化的アプローチを理論的背景に同じケーキ屋で先輩-後輩関係にある職人1事例の検討を行う．協力者にはそれぞれ一回ずつの作業観察と仕事意識についての聞き取りを行った．作業分析では，以前の分析では違いが目立たなかった両者に作業没頭の度合いにおいて差異が見つかった．言語報告からは先輩が後輩に関わる態度や，両者の態度共有を示すやりとりが見られた．本事例検討を通して主体の試行錯誤とそれをささえる仕組みに関する考察を行う．

P3-11　空間的な動作に対するミニマムエージェントの感情推定

吉岡源太（静岡大学創造科学技術大学院），竹内勇剛（静岡大学創造科学技術大学院）

本研究ではラッセルの円環モデルに対して，対人距離と反応の激しさを当てはめて，円盤形のロボットに円運動を行わせることで感情のような内的状態を表現させた．実験では実験協力者に運試しゲームを行わせて，ゲームの結果に応じてロボットに円運動を行わせて共感が生じるかを検証した．その結果，モデルに当てはめた運動に応じた反応を示すことで，より多くの利他行動が観測された．このことから，単純な円運動からでも内的状態を示すこと示唆した．

P3-12　ミラーニューロンシステムと報酬系の機能的結合

佐藤晃裕（明治大学大学院　理工学研究科），嶋田総太郎（明治大学　理工学部）

自分がある行動しているとき、および他者が同じ行動をしているのを見ているときの両方で活動する脳領域をミラーニューロンシステム（MNS）と呼ぶ。また、人は無意識に他者のしぐさ等を模倣し、模倣された人は模倣した人に対して高い好感度を持つとされている。本研究では、被験者が書字動作を模倣されたときの MNS と報酬系の活動を機能的核磁気共鳴画像法で計測した。その結果、書字動作を模倣されたときに MNS と報酬系の機能的結合がより強くなることが示された。

P3-13　ハンドジェスチャーを規定する短文の意味処理

齋藤五大（東北大学大学院文学研究科），Victor Palacios（スタンレー電気株式会社），大井京（名古屋大学大学院情報科学研究科），林辰暉（名古屋大学大学院情報科学研究科），山田涼馬（日本大学大学院文学研究科），巌島行雄（日本大学大学院文学研究科），行場次朗（東北大学大学院文学研究科），齋藤洋典（名古屋大学大学院情報科学研究科）

いかにして抽象的な心像から具体的なハンドジェスチャーが産出されるのかを検討するために，表音文字である仮名で表記された短文の読了後に，その理解内容を手の動作として遂行する過程の解明を本研究の目的とした。その結果，短文の内容を手の動作として遂行するためには，その短文に対する理解度と心像価が前提であり，実施頻度，観察頻度，犯罪性がそれぞれの動作の産出を規定することを示している。

P3-14　英語学習者における日本語文と英語文理解時の運動シミュレーション

粟津俊二（実践女子大学　），鈴木明夫（東洋大学），赤間啓之（東京工業大学）

22 人の日本人大学生を対象に、英語文と日本語文とで、行為・文一致効果が見られるか実験した。英語文では、行為・文一致効果が見られ、日本語文でも一部確認された。また、行為・文一致効果による反応時間の促進量は、英語文理解時の方が大きかった。これは、外国語文理解時と母語文理解時とで運動シミュレーションが同様に活性化されること、またシミュレーションが活性化するのは英語文の意味処理過程中であり日本語への変換後ではないことを示唆する。

P3-15　英語の中間構文と連結的知覚動詞構文の認知的／概念的連続性：　「感性表現」という立場から

板垣浩正（大阪大学大学院言語文化研究科）

本研究の目的は、英語の中間構文と連結的知覚動詞構文の並行性・連続性を、認知的／概念的な観点から批判検討し補強することである。具体的には、先行研究で指摘された両構文の並行的特性が、部分的にしか保障されず、厳密に見れば連続的であることを示す。また本稿は、構文現象の考察にあたって感性という概念を導入し、概念上の基礎付けと動機づけを与えることで、一貫性のある解決策を講じており、構文の記述に対する新たな手法を探求してい

る。

P3-16 多重主格構文の容認性判断について：容認性についての一般理論に向けて

藤田元（上智大学大学院）

本発表では日本語の多重主格構文を心理統計学の観点から考察する。先行研究に従い多重主格構文を2つのタイプに分類して、それらが実在するかを2つの方法で検証した。第一に2つのタイプの容認度が、名詞の数が多いときに振る舞いが異なるかを調査した。第二に名詞の数が増えた時に文の容認度に変化があるかを調査した。調査の結果、前者の方法では2つのタイプが実在することを示したのに対し、後者の方法では有意な差がみられなかった。

P3-17 ミラーニューロンシステムの活動と記号コミュニケーションシステムの形成との関係についての脳波研究

李冠宏（北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科），金野武司（北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科），奥田次郎（京都産業大学大学院先端情報学研究科），橋本敬（北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科）

人はやりとりを繰り返すことで記号コミュニケーションシステムを作り，記号を通じてお互いにコミュニケーションができる．このプロセスを支える神経機構の一つの候補として，ミラーニューロンシステムが考えられる．本研究では，実験記号論を用いた脳波計測実験を行うことで，記号コミュニケーションシステムの形成におけるミラーニューロンシステムの活動を調べた．実験の結果では，ミラーニューロンシステムの活動に基づいたシミュレーションプロセスの存在を示唆する．

P3-18 階層分析法によるメディア認知の可視化と省察の提案

後藤康志（新潟大学教育・学生支援機構）

本研究では，メディア認知を AHP で可視化し，その可視化されたメディア認知を省察するメタ認知的活動（自己分析，他者との対話，再度の自己分析）を行った．上記の処遇を行うことで，メタ認知的知識を提供できたことが示唆された．

P3-19 教授学習の前提としての教育コンテンツの表現可能性：放課後児童クラブ支援員研修を例として

高橋秀明（放送大学／総合研究大学院大学）

放課後児童クラブ支援員の研修に関するアクションリサーチにおいて、支援員の仕事は「言葉で説明できない」「映像コンテンツが無い」という言説が得られた。これらの言説が発せられた背景を検討した結果、放課後児童クラブ支援員の研修に関しては、制度的な裏付けが始まったばかりであり、学問的な裏付けが不十分であることが分かった。

P3-20 隠喩的表現における面白さと見劣り効果の関係の検討

中村太戯留（慶應義塾大学），松井智子（東京学芸大学），内海彰（電気通信大学）

隠喩的表現の面白さには，見劣り効果，すなわち不調和な2つの解釈の同時生起において，初めの解釈よりも、重要性や価値が低下し、見劣りする2つめの解釈が重要な効果を発揮すると考えられている．本研究では，44 名の大学生に面白い隠喩的表現の提示前後での使用された語の印象変化を調査した．結果，「価値のある」「神聖な」そして「上品な」の印象低下，特に「神聖な」の低下が認められた．従って，隠喩的表現の面白さには，見劣り効果が関与する可能性が示唆された．

P3-21 ディープラーニングに用いる畳み込み演算 による概念操作の表現

浅川伸一（東京女子大学情報処理センター）

ディープラーニングでも要られる幾つかの構成の技法を概観し高次認知過程への拡張について議論した．性能が保証されたこれらのモデルは翻って人間のモデルとして考え得る可能性が指摘できる．予め獲得した機構と可能な範囲のパラメータ再調整も見極めることは教育，職業訓練，病理診断，リハビリテーション，QOL に有益な示唆を与えるだろう．

P3-22 中学校理科における中一ギャップと中一ジャンプ

平真木夫（宮城教育大学），小野耕一（仙台市立中山中学校）

The authors hypnotized that if the students were enhancing their meta-cognition, motivation became stronger and use of higher-order learning strategies became frequent. The results supported the hypothesis.

P3-23 Kosslyn island 課題における空間認知と性差

安念保昌（愛知みずほ大学人間科学部）

Kosslyn 課題でどの様な性差があるかを明らかにした。参加者は239名。その結果、女性の方向音痴群は、移動距離と所要時間に相関がみられないが、方位正確群は、有意な正相関がみられた。また、重回帰分析の結果、女性仮想群では、場所の記憶因子が、男性では、方位と回転因子が方向音痴に影響を持った。以上の結果から、女性は、記憶したランドマークをひとつずつ追いながら、空間的表象内を移動するのに対し、男性は経路情報に集中していることが示唆された。

P3-24 買い物場面における行動支援

林侑輝（千葉大学大学院人文社会科学研究科総合文化研究），阿部明典（千葉大学）

家族内でコミュニケーションが不足する状況は、望ましくないと考える。日々の些細な変化に気付いてやれるという点で、家族は貴重な存在だからである。しかし、家族だからこそコミュニケーションを取るというのが難しいという場合も考えられる。本稿では、日常の行動の一つとして「買い物」に着目し、買い物をテーマとした会話手法が無理なく継続的にコミュニケーションを取るきっかけになる可能性を示す。

P3-25 視覚的長期記憶が変化検出過程に与える影響

益岡都萌（岡山大学大学院教育学研究科），西山めぐみ（名古屋大学大学院環境学研究科），寺澤孝文（岡山大学大学院教育学研究科）

変化前の情報の事前学習によりその後の変化検出課題において変化検出率が向上することが示された Nishiyama & Kawaguchi(2014)の実験手続きを用いて，結果の再現性を検討した（実験 1）．

また事前学習から変化検出課題までに 1 ヵ月のインターバルを設け，視覚的記憶の長期持続性と変化検出率への影響を検討した（実験 2）．結果，実験 1 の再認テストにおいて事前学習の効果が見られる可能性が示された．

P3-26 像面位置と輻輳位置の一致が 3D ディスプレイ観察時の眼精疲労に与える影響

正田真利恵（（株）ニコン映像事業部），岩根透（（株）ニコン映像事業部），新美亮輔（東京大学大学院人文社会系研究科）

本研究では 3D 映像観察時の眼精疲労が，像面位置と輻輳位置の不一致により生じるか，あるいは何らかの高次な認知処理によって生じるかを検証する。そこで従来の視差付与型の 3D 映像観察後の眼精疲労と，画面上に被写体と共役となる 3D 像面を再現する新 3D 映像を観察した後の眼精疲労を比較した。結果として像面位置と輻輳位置の一致だけでは，3D 映像観察後の眼精疲労が決定されず，高次な認知処理も寄与していることが示唆された。

P3-28 操作する身体オブジェクトの方向性が運動に及ぼす影響

渋谷賢（杏林大学医学部統合生理学教室），畝中智志（杏林大学医学部統合生理学教室），大木紫（杏林大学医学部統合生理学教室）

被験者は右手を動かして，実際の手の左側に呈示される仮想手もしくは矢印の前後運動を行った．右手の前後方向の動きのみがオブジェクトの動きに反映された．前後運動中の左右方向のドリフト運動を検討した．オブジェクトの回転方向に依存したドリフト運動の変調が観察され，方向が左向きの時，仮想手の方が矢印よりも有意に大きなドリフト運動量を示した．このようなドリフト運動は，固有感覚と視覚に基づく手の位置情報の不一致に対する脳の補償作用であると推測される．

P3-29 経頭蓋直流電気刺激がラバーハンド錯覚に与える影響と統合失調症傾向の関連性

餘田尚彦（明治大学大学院　理工学研究科），五十嵐隆昭（明治大学大学院理工学研究科），嶋田総太郎（明治大学　理工学部）

ラバーハンド錯覚(RHI)は視触覚刺激の時間的同期により生じる身体保持感の錯覚である．本研究では，左半球の側頭頭頂接合部（TPJ）へ経頭蓋直流電気刺激（tDCS）を加えたときの RHI の錯覚強度の変化と統合失調症型パーソナリティの関連性を調査した．その結果，TPJ への陽極刺激によって視触覚刺激が非同期状態でも錯覚を感じやすくなり，統合失調症の陰性症状の傾向が高いほど顕著に出ることが示された．

P3-30 ラバーバンドイリュージョンと皮質感位相同期の関連の検討

金山範明（広島大学），小西宏奈（広島大学），櫻井悟（広島大学），松本知也（広島大学），岡本泰昌（広島大学），山脇成人（広島大学）

本研究では，ラバーハンドイリュージョンを起こす視触覚刺激呈示後 300ms までに，感覚皮質間、および感覚皮質と頭頂皮質および前運動野にどのような関連があるかを、皮質間位相同期を指標に検討した。結果、刺激呈示後 100 ms 程度までに各感覚領域間で皮質間位相同期に、またそれ以降は、刺激した手の対側である右体性感覚野と、左右頭頂連合野、前運動野との皮質間位相同期に、視触覚刺激の空間位置の一致条件・不一致条件の有意差が見られた。

P3-31 前提の投射における left-right asymmetry と「P かもしれない」について

山森良枝（同志社大学）

ある表現 E の持つ前提(presupposition)は、E の先行情報に含まれるとされるが、前提の投射は常に左から右に行われるとは限らない。本論では、「P かもしれない」を対象に、「か」「も」と直近の文脈との意味論的関係に着目して「P かもしれない」の論理構造を明らかにする。また、その結果から、複文における前提の投射の仕組についても考察する。

P3-32 孤食と共食における人の食事行動の仕組み

徳永弘子（東京電機大学），庄司優（東京電機大学），武川直樹（東京電機大学）

本研究は，食事環境としての孤食と共食が，それぞれ食事者の摂食動作にもたらす影響について定量的に分析する．同一協力者による孤食と共食を実験的に行って映像データを収録し，人の視線行動と食事動作を分析した．その結果，孤食環境では食事者の視線や摂食動作に一貫性がないのに比べ，共食環境では食事者の動作は統制されていた．これにより共食環境は，他者とのコミュニケーションを維持しながら食事をするという，社会的振舞いを要請する場である可能性が考えられた．

索引

【A】
Aaron Williamon P1-4

【E】
Ellina Rienovita P3-5

【L】
Lira Yu OS13-7

【V】
Victor Palacios 02-3, P3-13

【Y】
井狩幸男 OS03-1

【あ】
青山慶 P2-5
赤木美香 OS03-4
赤間啓之 P3-14
縣拓充 OS09-8
秋元泰介 P2-24
明地洋典 P1-24
浅川伸一 P3-21
浅田稔 02-2, OS13-1, P3-27
浅原正幸 P2-9
阿部明典 OS11-2, P3-24
阿部慶賀 03-3
天谷晴香 01-2
綾屋紗月 02-2
有元典文 OS04-2
粟田恵吾 OS09-7
粟津俊二 P3-14
安藤花恵 OS11-4
安念保昌 P3-23

【い】
伊神剛 01-4
五十嵐隆昭 P3-29
石井成郎 OS08-3
石井理恵 OS01-2
石川悟 P2-29
石黒千晶 P1-17, P1-18
石崎俊 P2-14
板垣浩正 P3-15
市川淳 P1-5
一川誠 OS05-3
厳島行雄 02-3, P3-13
板井陽俊 OS08-3
伊東朱美 P1-12
伊藤崇 OS04-5
伊藤紀子 OS08-4
伊東昌子 P2-11
犬塚美輪 P1-14
井上照沙 OS05-4
井庭崇 OS07-6
今井むつみ OS02-4
岩垣守彦 OS11-5
岩田眞樹子 P1-7
岩根透 P3-26
犬童健良 P2-16

【う】
植田一博 OS06-4, OS09-7, P1-22
上野佳奈子 OS05-2, P1-30
牛谷智一 OS12-9
臼木大翔 P2-17
内海彰 P3-20
畝中智志 P3-28

【え】
榎本美香 OS12-4
遠藤智子 OS10-2

【お】
大家慧 OS13-2
大井京 02-3, P3-13
大木紫 P3-28
大崎理乃 P3-7
太田垣歩 P1-28
大塚翔 P1-8
大槻正伸 P2-17
大槻美佳 OS02-2
岡崎善弘 OS13-6
岡田猛 P1-17, P1-18, P1-31, P1-32
岡田誠 OS07-6
岡夏樹 P1-15
岡本泰昌 P3-30
小方孝 OS11-6, P2-24
小川昭利 OS05-7
小川有希子 OS11-1, P2-22
奥田次郎 P3-17
尾関基行 P1-15
小田切史士 OS09-2
小谷慎吾 OS12-9
小野耕一 P3-22
織田涼 03-2
折戸朗子 P2-28

【か】
柏野牧夫 OS13-5
片岡菜苗子 OS12-5
加藤絵理 OS12-5
加藤祥 P2-9
加藤浩 P1-16
加藤正晴 OS13-5
金井明人 P2-22
金山範明 P3-30
金子智紀 OS07-6
亀田達也 OS05-7, OS13-2
苅宿俊文 OS01-2
川合伸幸 02-4, OS05-6
川﨑貴子 P2-20
河原純一郎 P1-36
河原正人 P3-5
河村まゆみ OS10-2
神田咲 OS06-5

【き】
菊地賢一 P2-25
北川智利 OS13-5
北島宗雄 OS01-1
木村聡貴 OS13-5
木村友香梨 OS09-6
清河幸子 03-4, OS09-5, OS09-6

【ぎ】
行場次朗 02-3, P3-13

【く】
楠見孝 OS09-4, P2-7
國藤進 OS08-1
熊谷晋一郎 02-2
栗延孟 P1-34

【ぐ】
郡司幸夫 P1-3

【こ】
小池耕彦 OS13-3
小出允善 P3-6
小窪久美子 OS13-7
小島隆次 P2-15
小鳥直樹 P2-18
小谷俊輔 P2-30
児玉謙太郎 P2-5
小西宏奈 P3-30
小橋康章 P2-4
小林春美 P1-24
小比田涼介 P2-23
小室弘樹 OS09-6
小森政嗣 OS13-7
近藤健次 OS08-2
金野武司 P2-26, P3-17

【ご】
後藤康志 P3-18
後藤靖宏 P3-1

【さ】
齋藤五大 02-3, P3-13
齋藤洋典 02-3, OS07-1, OS07-3, P3-13
斎藤幹樹 01-1
坂井田瑠衣 OS12-3
坂上雅道 OS09-4
阪口豊 OS07-5
阪田真己子 OS08-4, P1-4, P2-1
坂本孝丈 P1-33
櫻井悟 P3-30
定藤規弘 OS13-3
定延利之 P1-13, P1-27
佐藤晃裕 P2-22, P3-12
佐藤有理 P1-22
佐藤亘 P1-3

【し】
篠崎健一 OS12-5
柴玲子 P3-3
渋谷賢 P3-28
嶋田総太郎 OS05-1, OS05-2, P1-30, P2-22, P3-12, P3-2, P3-29, P3-6
清水大地 P1-32
庄司優 P3-32
正田悠 OS08-4, P1-4, P2-1
正田真利恵 P3-26
白砂大 OS06-3
白水始 OS04-1, P3-4
城真範 P1-11
新垣紀子 P2-28
秦世博 02-2
新原将義 P1-6

【じ】
地村弘二 OS09-4
徐朊哲 P1-35
神野真吾 OS09-8

【す】
水津功 OS07-3
杉浦元亮 OS05-8
杉本雄太郎 P1-22
鈴木明夫 P3-14
鈴木直也 P2-17
鈴木紀子 OS08-4, P2-1
鈴木栄幸 P1-16
鈴木宏昭 OS09-1, OS09-2
鈴木悠平 03-4
鈴木裕利 OS08-3
鈴木陽介 P1-24
須藤智 P1-34, P3-8, P3-9
須藤明人 OS09-7
角谷基文 OS13-3
諏訪正樹 01-3, OS12-1, OS12-3, P1-9

【せ】
清野絵　P2-14

【そ】
園田耕平　P1-3，P2-5
孫星越　P2-25

【た】
平知宏　P1-19
平真木夫　P3-22
田浦秀幸　OS03-3
高嶋由布子 OS12-2
高野裕治　OS13-5
高橋範行　OS11-3
高橋秀明　P3-19
高橋英之　OS13-1，OS13-6，P3-27
髙橋麻衣子 P2-21
竹内勇剛　P1-23，P1-33，P3-11，P3-5
武田啓子　P2-6
竹田陽子　P1-1
田中章浩　OS05-4，P2-21
田中克明　OS07-6
田中観自　02-1
田中邦佳　P2-20
田中伸之輔 OS07-4
谷伊織　P1-3
谷川由紀子 P1-16
谷口政志　P3-5
田平博嗣　OS01-3

【だ】
大門貴之　P3-8

【ち】
張寓杰　P2-25

【つ】
辻田匡葵　OS05-3
都地裕樹　P3-2
坪田康　OS10-1

【て】
程莉　P2-10
寺井あすか OS09-4
寺井仁　01-4，03-1，OS09-3，P1-5
寺澤孝文　P3-25

【で】
伝康晴　OS12-1，OS12-4，OS12-9

【と】
樋田浩一　OS05-1，OS05-2，P1-30
遠山紗矢香 OS04-3
遠山直宏　OS09-3
徳永弘子　P3-32
杜思宇　P1-27
富澤創　P1-30
富田瑛智　P1-34，P3-9
友永雅己　OS13-7

【ど】
堂崎正博　OS13-7

【な】
内藤栄一　P3-27
中川恵理　OS13-3
中川正宣　OS09-4，P2-25
中嶌拓希　P2-7
中田龍三郎 02-4
中野優子　P1-31
仲嶺真　P1-36
中村國則　OS06-5，P1-21
中村太戯留 P3-20
中村優花　OS09-6
中村暢佑　P1-26
中村嘉彦　01-4
中村嘉美　P3-4
中山清香　OS09-6
永井聖剛　P1-36
永井由佳里 OS08-2
長井志江　02-2
長井りら　P2-19
長岡千賀　P1-29

【に】
新美亮輔　P3-26
西田洋司　OS13-2
西本光志　OS08-4
西山めぐみ P3-25

【ね】
根本幾　P3-3

【の】
野口尚孝　OS07-2
野中哲士　P1-28，P2-19，P2-30
野々部佐紀 03-4

【は】
橋本敬　OS02-3，P2-26，P3-17
服部雅史　03-2
服部侑介　P1-15
林侑輝　P3-24
林勇吾　P3-5
速水慎太朗 P1-25
原田悦子　OS07-4，P1-16，P1-34，P1-8，P3-8，P3-9
原田康也　OS10-2，OS10-3，OS10-4
春名由一郎 P2-14

【ば】
伴碧　OS13-1，OS13-6，P3-27

【ひ】
樋口貴広　P2-5
久野裕哉　P2-17
日高昇平　01-3，OS02-1
平原憲道　OS06-2
平山いずみ OS05-7
平山高嗣　P1-25
広瀬拓海　OS04-4
廣瀬治人　OS13-5

【ふ】
深田智　P1-15
福住伸一　P1-16
福田隼登　OS12-5
福田怜生　P2-27
福永征夫　P2-13
藤井晴行　OS12-1，OS12-5
藤田元　P3-16
藤本幹　OS07-5
渕上健　OS05-5
布山美慕　01-3
古川聖　P3-3
古山宣洋　OS12-7

【ほ】
堀内隆仁　P1-9
堀江美早　03-4
本多明子　P2-31
本田秀仁　OS06-4，OS09-7

【ぼ】
坊農真弓　OS12-6，OS12-7

【ま】
前東晃礼　01-4
牧岡省吾　P1-10
牧野遼作　OS12-7
マシューズジョン P2-20
益岡都萌　P3-25
益川弘如　OS04-3
間瀬健二　P1-25
松井孝雄　P2-2
松井智子　P3-20
松井理直　P2-8
松香敏彦　OS06-3，OS12-9，P1-35
松熊亮　P3-10
松田憲　P2-7
松永聡太　OS06-4
松林翔太　OS09-3
松室美紀　03-1
松本知也　P3-30

【み】
水野りか　P2-2
水原啓暁　OS13-4
光田基郎　P1-20
三宅なほみ P3-7
三宅芳雄　P2-12
宮本エジソン P2-23
三輪和久　01-4，03-1，OS09-3，P1-5

【む】
武川直樹　P3-32
麦谷綾子　P1-26
武藤真理　OS07-5
村田藍子　OS13-2

【も】
桃川智行　P1-30
森岡周　OS05-5
森健策　01-4
森（三品）聡美　OS03-2
森下美和　OS10-3，OS10-4
森田純哉　P1-25
守田知代　P3-27
森田均　P1-2

【や】
八木絵香　P2-3
安田和弘　P2-5
安田哲也　P1-24
山川真由　OS09-5
山口莉奈　P2-1
山崎治　P2-18
山下隆義　OS08-3
山下美穂　OS09-6
山田和範　P1-25
山田雅敏　P1-23
山田雅之　OS12-8
山田陽平　P1-36
山田涼馬　02-3，P3-13
山内保典　P2-3
山森良枝　P3-31
山脇成人　P3-30

【よ】
横森大輔　OS10-2
横山拓　OS09-1
吉岡源太　P3-11
吉村直己　P1-10
餘田尚彦　P2-22，P3-29
米山佳那　P1-18

【ら】
羅希　P1-13

【り】
李冠宏　P3-17
林辰暉　02-3, P3-13

【わ】
鷲田祐一　OS09-7
渡邊克巳　02-1, OS13-8
渡邉翔太　OS05-6
渡邊淳司　P1-26
和田有史　OS06-1

ALT
IR-Advanced Linguistic Technologies Inc.

仕事の形態は
「研究のサポート」です

仕事の分野は
「言葉とコンピュータの繋ぎ目」です

研究者の
皆様へ

構造化
- データベース
- XML→Web化
- シソーラス
- オントロジ

構造化・共有化
詳細な分析

分析
- アノテーション
- 構文・意味解析
- 談話分析

言語・行動分析

整備
- テキスト化
- 音声処理
- 画像処理

管理・収集
- テキスト
- 音声
- 映像

実験室・収録ブース
実験環境の設営
ツールの開発

登録メンバー
- 日本語
- 英語
- 中国語
- 韓国語

計画・設計
- 被験者実験の計画
- アンケートの設計

協議・打ち合わせ

株式会社 アイアール・アルト
www.ir-alt.co.jp
info@ir-alt.co.jp
〒162-0053 東京都新宿区原町3丁目61 桂ビル
Tel.03-3202-1301／Fax.03-3202-1303

UCHIDA

未 FutureClassRoom®
来型学習空間をご提案します。

建築躯体に手を加えることなく ICT空間を容易に構築。

現在の授業では、一方的に話を聞く学習ばかりではなく、最新のICT機器を用いた授業や、PBL※などのグループ単位で能動的に活動するような授業が増えてきています。
そうした授業の中では、通常の「レクチュア」から、グループに分かれて活動する「グループワーク」、成果を共有・発表する「プレゼンテーション」や「ふりかえり」といった場面の転換が必要不可欠です。
それぞれのシーンにマッチした空間セッティングへの変換が、スムーズかつクイックに実現できるこれからの教室、それが「FutureClassRoom®（フューチャークラスルーム®）」の考え方です。
※PBL（Project Based Learning）：授業形態の一つで「課題解決型授業」のこと。

「フューチャークラスルーム®」は、学校関係者や企業・研究機関とご一緒に新しい授業スタイルの研究開発・実証実験を行える場所として、新川本社ビル（東京都中央区）と大阪支店（大阪府大阪市）に設置しております。ぜひ、ご来場ください。

内田洋行 第1企画部
〒135-0016 東京都江東区東陽2-3-25 ☎03(5634)6397

プライバシーマーク 10480001
いい「学校・教育・授業」づくりを支援いたします。
http://school.uchida.co.jp/

北大路書房
〒603-8303 京都市北区紫野十二坊町12-8
☎075-431-0361 FAX 075-431-9393
http://www.kitaohji.com
振替 01050-4-2083

心の中のブラインド・スポット
ー善良な人々に潜む非意識のバイアスー M. R. バナージ・A. G. グリーンワルド著 北村英哉・小林知博訳 四六・368頁・本体2400円＋税 近年，急速に進む「非意識」研究の知見により，日常生活をおくる人間の心には誤りや歪みが蔓延していることが分かってきた。自己や行動原理を理解し自己改善へ向かう重要なステップとなる。IATについても解説。

意識
ー難問ににじり寄るー J. グレイ著 辻 平治郎訳 A5・376頁・本体4500円＋税 パーソナリティを3つのシステム（BAS/BIS/FFFS）に分化して捉える「強化感受性理論」の提唱で著名な心理学者が，死の直前に総力をあげて挑んだ「意識」という難問。豊かな学識と科学的手法で本質に迫る。

ふと浮かぶ記憶と思考の心理学
ー無意図的な心的活動の基礎と臨床ー 関口貴裕・森田泰介・雨宮有里編著 A5・248頁・本体3000円＋税 無意図的想起やマインドワンダリング，洞察問題解決，思考抑制の皮肉過程，反すう，侵入想起など，自らの意志と無関係に意識に上る無意図的な心の働きにいち早く注目し，主に認知・臨床心理学から果敢に挑む。

思考と推論
ー理性・判断・意思決定の心理学ー K. マンクテロウ著 服部雅史・山 祐嗣監訳 A5・396頁・本体4000円＋税 現代的な思考心理学では，確率的説明が重要な位置を占める。その理解に必要な確率判断を解説。論理ベースでの発展に続き，二重過程理論やプロスペクト理論等の確率に基づく説明に至る。感情や合理性の影響がもたらす複雑さにも踏み込む。

ゆがんだ認知が生み出す反社会的行動
ーその予防と改善の可能性ー 吉澤寛之・大西彩子・G. ジニ・吉田俊和編著 A5・280頁・本体3000円＋税 攻撃行動，いじめ，少年非行など反社会的行動を行う者の「認知のゆがみ」に焦点を当てる。社会・教育・発達といった心理学領域に脳科学も含めて，先行研究を網羅的に概観。修正と予防の手掛かりとなる国内外の実践研究も紹介。

嫌悪とその関連障害
ー理論・アセスメント・臨床的示唆ー B. O. オラタンジ・D. マッケイ編著 堀越 勝監修・今田純雄・岩佐和典監訳 A5・340頁・本体3600円＋税 「嫌悪」という情動は，強迫性障害や動物恐怖症等の精神疾患を理解する上で，欠かせない要素でもある。本書は，その基礎研究から，精神疾患との関係，治療に関する研究まで，網羅的に解説。

メディア心理生理学
R. F. ポター・P. D. ボウルズ著 入戸野 宏監訳 A5・288頁・本体3600円＋税 心理生理学の研究手法を用いて，メディアが人間に及ぼす影響を明らかにするためのテキスト。身体化されたダイナミックな過程として，コミュニケーションを研究するためのパラダイムを詳説。心理生理測度を用いたメディア研究の歴史から，研究に役立つ実用的なヒントまで，具体的に紹介する。

Rによる心理学研究法入門
山田剛史編著 A5・272頁・本体2700円＋税 「心理学研究モデル論文集」「具体例に即した心理学研究入門書」「統計ソフトRの分析事例編」の3つの顔を持つテキスト。実際の研究例をもとに，研究法の基礎の紹介，研究計画立案のための背景や目的，具体的なデータ収集の手続き，Rでのデータ分析，研究のまとめやコメントなどで詳しく紹介。

認知心理学研究の現在を一望！ **現代の認知心理学〔全7巻〕** 日本認知心理学会 監修

第1巻 知覚と感性 三浦佳世 編
第2巻 記憶と日常 太田信夫・厳島行雄 編
第3巻 思考と言語 楠見 孝 編
第4巻 注意と安全 原田悦子・篠原一光 編
第5巻 発達と学習 市川伸一 編
第6巻 社会と感情 村田光二 編
第7巻 認知の個人差 箱田裕司 編

●各巻A5判・約350ページ・本体3,600円＋税

＜MIT CogNetのご案内＞

The MIT Press（マサチューセッツ工科大学出版局）より、脳科学および認知科学のポータルサイト「MIT CogNet」をご案内します。

MITCogNet From the MIT Press　http://cognet.mit.edu

MIT CogNet は**脳科学**および**認知科学**の研究に関する、オンライン上の研究・交流の場として、2000 年の開設以来、ヒトの精神に関する最先端の研究活動において不可欠な資料となっています。

取扱い分野
人工知能
言語学
神経科学
心理学
哲学
教育

収録内容　※全てのコンテンツが DRM Free です。
The MIT Press（マサチューセッツ工科大学出版局）刊行の
洋書約 650 点
主要レファレンス 11 点
認知科学関連ジャーナル 6 誌（下記参照）のフルテキスト
The MIT Press 以外の出版社(※)が刊行する 25 誌の抄録
※ Cambridge University Press, the British Psychological Society, Kingston Press Ltd, Lawrence Erlbaum Associates など。

お見積りは、紀伊國屋書店までお申し付けください。

ご参考）MIT発行認知科学関連ジャーナル7誌のご案内

1)-6)は CogNet 収録誌、個別タイトルでのご購読も可能です。
1)、3)-7)の 6 誌についてはお得なパッケージ価格もご用意しております。（詳細は紀伊國屋書店までお問合せ下さい。）

タイトル	ISSN（オンライン版）
1) *Artificial Life* 人工生命	1530-9185
2) *Computational Linguistics* コンピュータ言語学	1530-9304
3) Evolutionary Computation 進化型計算	1530-9312
4) *Journal of Cognitive Neuroscience* 認知神経科学	1530-8898
5) *Linguistic Inquiry* 言語学研究	0024-3892
6) *Neural Computation* ニューラル・コンピュテーション	1530-888X
7) *Presence:Teleoperators & Virtual Environments* プレゼンス：テレオペレーターと仮想環境	1531-3263

60 日間の トライアルが可能です。
●貴機関名（英文）●ご担当者名（英文）●Email アドレス●IP アドレス●電話番号
●ご希望の開始時期を、下記弊社担当部署までご連絡下さい。

日本販売総代理店
紀伊國屋書店

学術情報商品部：
〒153-8504 東京都目黒区下目黒3-7-10
Fax: 03-6420-1363
E-mail: journal@kinokuniya.co.jp

本邦初の認知科学辞典

認知科学辞典

日本認知科学会 編
400名に及ぶ研究者が執筆した約4,000項目を収録。
便利な和英／英和インデックス付。
■書　籍　版：978-4-320-09445-1　A5判・1,028頁・本体35,000円（上製函入り）
■デジタル版：978-4-320-12105-8　A5判・　184頁・本体12,000円（CD-ROM付）

THE MIT ENCYCLOPEDIA OF THE COGNITIVE SCIENCES, *MITECS*

MIT認知科学大事典

Robert A. Wilson・Frank C. Keil 編／中島秀之 監訳
認知科学全分野の方法論と理論を網羅した世界に類のない事典。
認知科学を構成する主要分野（哲学，心理学，神経科学，計算論的知能，言語学，文化・認知・進化）の中から471項目を厳選。
■書　籍　版：978-4-320-09447-5　B5判・1,632頁・本体38,000円（上製函入り）

人工知能学の集大成

人工知能学事典

人工知能学会 編　≪日本図書館協会選定図書≫
19の大項目と約420の小項目を収録。
自然・社会・人文科学などの広範・多岐にわたる分野を網羅。
■書　籍　版：978-4-320-12107-2　B5判・996頁・本体22,000円（上製函入り）
■デジタル版：978-4-320-12216-1　A5判・150頁・本体12,000円（CD-ROM付）

言語処理学会 創設15周年記念出版

言語処理学事典

言語処理学会 編　≪日本図書館協会選定図書≫
学会創設15周年を記念して学会の総力を挙げて編纂。
最新の理論・技術を解説した関係者必見の宝典。
■書　籍　版：978-4-320-12238-3　A5判・934頁・本体35,000円（上製函入り）
■デジタル版：978-4-320-12252-9　A5判・144頁・本体16,000円（CD-ROM付）

共立出版　〒112-0006 東京都文京区小日向 4-6-19 ／Tel. 03-3947-2511 ／Fax. 03-3947-2539（税別価格）
http://www.kyoritsu-pub.co.jp/　https://www.facebook.com/kyoritsu.pub

アスリートは不安やストレスにどう対処しているのか？　練習の質を高め、試合で最高のパフォーマンスをするには？

スポーツ・エクササイズ心理学百科事典（全２巻）

Encyclopedia of Sport and Exercise Psychology

Two-Volume Set

Edited by **Robert C. Eklund** (Univ. of Stirling, Florida State University),
Gershon Tenenbaum (Florida State University)

March-2014・880 pages
ISBN: 9781452203836　**List Price: £235.00**

スポーツとエクササイズに関する心理学的理論、研究成果、その応用についての百科事典です。専門家によって執筆された約400項目の記事のほか、テーマごとに項目を分類するリーダーズガイド、項目間の相互参照、文献・資料案内などが収録されており、さらなる学習・研究を支援するレファレンスです。

Key Themes:
Career Transition / Certification, Credentialing, and Roles of Sport and Exercise Psychologists / Disability / Emotion / Exercise Health / Group Dynamics / History and Foundation / Leadership / Morality, Aggression, and Ethics in Sport / Motivation / Motor Control / Perception and Cognition in Sport / Personality and Psychological Characteristics in Sport / Psychobiology / Psychological Skills/Interventions / Psychosociocultural / Self-Concept/Self-Perceptions, and Identity / Youth Sport

社会・行動科学における音楽の影響・応用について包括的に扱う百科事典

社会・行動科学における音楽百科事典（全２巻）

Music in the Social and Behavioral Sciences: An Encyclopedia

Two-Volume Set

Edited by **William Forde Thompson** (Macquarie University, Australia)

October-2014・1,360 pages
ISBN: 9781452283036　**List Price: £220.00**

社会・行動科学における音楽の応用や影響について解説する、決定版百科事典です。コミュニケーション学、心理学、言語学、社会学、スポーツ研究、政治学、経済学、さらには生物学や健康科学など、さまざまな社会科学分野における音楽の位置づけを検討しており、学際的なレファレンスとなっています。写真をふんだんに使用した約450記事のほか、テーマごとに各項目をまとめるリーダーズガイド、年表、重要用語集、史資料案内が収録されています。

Key Themes:
Aesthetics and Emotion / Business and Technology / Communities and Society / Culture and Environment / Elements of Musical Examination / Evolutionary Psychology / Media and Communication / Musicianship and Expertise / Neuroscience / Perception, Memory, Cognition / Politics, Economics, Law / Therapy, Health, Wellbeing

SAGE 50 YEARS

※ご注文は各洋書取扱い書店までお願いいたします。
※商品の価格は改定・変更する可能性がございます。ご了承ください。
内容のお問い合わせ：**セイジ・パブリケーションズ日本支社**
e-mail: sagejapan@sagepub.co.uk　website: www.sagepub.co.uk

ひつじ書房新刊・近刊案内

感動詞の言語学

友定賢治 編　定価 4,800 円＋税

感動詞研究の広がりを示し、今後の研究の指標となる初めての論文集。感動詞の言語学的性格、応答表現の構造、方言感動詞の記述、日本語非母語話者の運用、ビデオ調査法などからなる。

【執筆者】青木三郎／有元光彦／金田純平／串田秀也／小西いずみ／小林隆／定延利之／大工原勇人／冨樫純一／友定賢治／野田尚史／パウル・チブルカ／林誠／森山卓郎

Metaphor of Emotions in English

With Special Reference to the Natural World and the Animal Kingdom as Their Source Domains

大森文子 著　定価 9,500 円＋税

感情を表すメタファーの仕組を認知言語学の枠組で探究するものである。広く日常言語、文学の言語を研究対象とし、従来にない認知モデルを提唱。

ひつじ意味論講座　第 7 巻 意味の社会性

澤田治美 編　定価 3,200 円＋税

意味は、社会の様々な場においてどのように伝達されているのか。本巻では、翻訳、医療、司法、スポーツなどにおける言語使用を通して、意味とコミュニケーションをめぐる問題に光を当て、従来の意味論の枠を超えた新しい考察を展開する。講座総目次・総索引付。

【執筆者】山口節郎／亘明志／児玉徳美／堀井令以知／リリアン テルミ ハタノ／クレア・マリィ／影浦峡／北山修／野呂幾久子／堀田秀吾／名嶋義直／東海林祐子／森山卓郎

認知言語学論考　No.12

山梨正明 他編　定価 9,800 円＋税

【執筆者】黒田一平／小松原哲太／加藤祥・岡本雅史・荒牧英治／小川典子・野澤元／田口慎也／今井隆夫／甲田直美／和田尚明／田村敏広／土屋智行／年岡智見

近刊

シリーズ　高梨克也 監修

フィールドインタラクション分析

予価各 3,200 円

第 1 巻　多職種チームで科学展示をつくる
日本科学未来館「アナグラのうた」ができるまで（仮）　高梨克也 編
第 2 巻　鮨屋で握りを注文する（仮）　平本毅 編
第 3 巻　ロボット演劇で会話をつくる（仮）　坊農真弓 編
第 4 巻　介護施設で身体をうごかす（仮）　細馬宏通 編
第 5 巻　「三夜講」で火祭りを準備する
野沢温泉道祖神祭りの伝承を支える多世代協働インタラクション（仮）　榎本美香 編

ELAN 入門（仮）

細馬宏通・菊地浩平 編　予価 2,000 円

音声、動作、視線変化など、複数のできごとの時間変化を、映像と音声波形を見ながら自在に分析する強力なツールが、マックス・プランク心理言語学研究所で開発された「ELAN」。いまや、会話分析、マルチモダリティ研究、映画分析、演奏分析からインタビューおこしにいたるまで、さまざまな分野で用いられている ELAN の最初の一歩から応用までを、わかりやすく解説する。

執筆者：榎本美香、菊地浩平、伝康晴、東山英治、細馬宏通

■ひつじ書房の刊行案内や特別セールなどのお知らせは「ひつじメール通信」から配信いたしております。
ご希望の方は toiawase@hituzi.co.jp までメールでご連絡ください。
〒112-0011　東京都文京区千石 2-1-2 大和ビル 2F　TEL 03-5319-4916　FAX 03-5319-4917
toiawase@hituzi.co.jp　http://www.hituzi.co.jp/

ひつじ書房

●放送大学テキスト

好評発売中

教育心理学概論（新訂） 三宅芳雄・三宅なほみ 2014年発行 2,100円＋税	**認知心理学** 高野陽太郎 2013年発行 3,700円＋税
教育心理学特論 三宅芳雄・三宅なほみ 2012年発行 2,500円＋税	**認知心理学概論** 高野陽太郎・波多野誼余夫 2006年発行 1,900円＋税
学習科学とテクノロジ 三宅なほみ・白水始 2003年発行 2,200円＋税	**認知科学の展開** 西川泰夫・阿部純一・仲真紀子 2008年発行 3,000円＋税
心理・教育統計法特論（新訂） 小野寺孝義 2015年発行 2,800円＋税	**認知行動科学**（新版） 西川泰夫 2006年発行 3,600円＋税
投影査定心理学特論 小川俊樹・伊藤宗親 2015年発行 2,800円＋税	**計量心理学** 西川泰夫・大沢光・沼野元義 2006年発行 2,600円＋税
錯覚の科学 菊池聡 2014年発行 3,000円＋税	**感情の心理学** 高橋惠子・河合優年・仲真紀子 2007年発行 2,300円＋税
認知行動療法 下山晴彦・神村栄一 2014年発行 2,500円＋税	**認知過程研究**（新訂） 稲垣佳世子・鈴木宏昭・大浦容子 2007年発行 2,200円＋税
学力と学習支援の心理学 市川伸一 2014年発行 2,000円＋税	**神経心理学** 八木文雄 2006年発行 4,800円＋税
色を探究する 佐藤仁美 2013年発行 3,000円＋税	**脳科学の進歩** 田中啓治・岡本仁 2006年発行 3,800円＋税
認知神経科学 道又爾・岡田隆 2012年発行 3,300円＋税	**知覚心理学**（改訂版） 相場覚・鳥居修晃 2001年発行 2,600円＋税

●ご希望の方に「図書目録」をお送りします。詳しくは　www.ua-book.or.jp

一般財団法人 放送大学教育振興会
〒105-0001 東京都港区虎ノ門 1－14－1
TEL 03-3502-2750
FAX 03-3592-2482

好評発売中　話題の書

新 人が学ぶということ
——認知学習論からの視点

今井むつみ・野島久雄・岡田浩之 著　A5判　二六〇〇円＋税

学びの科学の最先端を探る。好評の初版に認知科学の最新研究成果を盛り込み、二十一世紀を生きるために必要な知識、学びを事例も織り込みつつ論考。学びのメカニズムを認知科学に基づく多角的視点からまとめあげ、さまざまなかたちの「学び」の新たな可能性を提示した好著。

実践につながる教育心理学
櫻井茂男 監修　黒田祐二 編著　A5判　二二〇〇円＋税

心理学データのエクセル統計
深谷澄男・喜田安哲・伊藤尚枝 著　二四〇〇円＋税

「甘えの心理」に迫るRでテキストを分析
伊藤尚枝 著　一七〇〇円＋税

認知過程のコネクショニスト・モデル
マックレオド 他著　深谷澄男 監訳　四二〇〇円＋税

認知過程のシミュレーション入門
伊藤尚枝 著　二六〇〇円＋税

教職ベーシック 発達学習の心理学
柏崎秀子 編著　一九〇〇円＋税

「使える」教育心理学【第三版】
服部環 監修　安齊順子・荷方邦夫 編著　二三〇〇円＋税

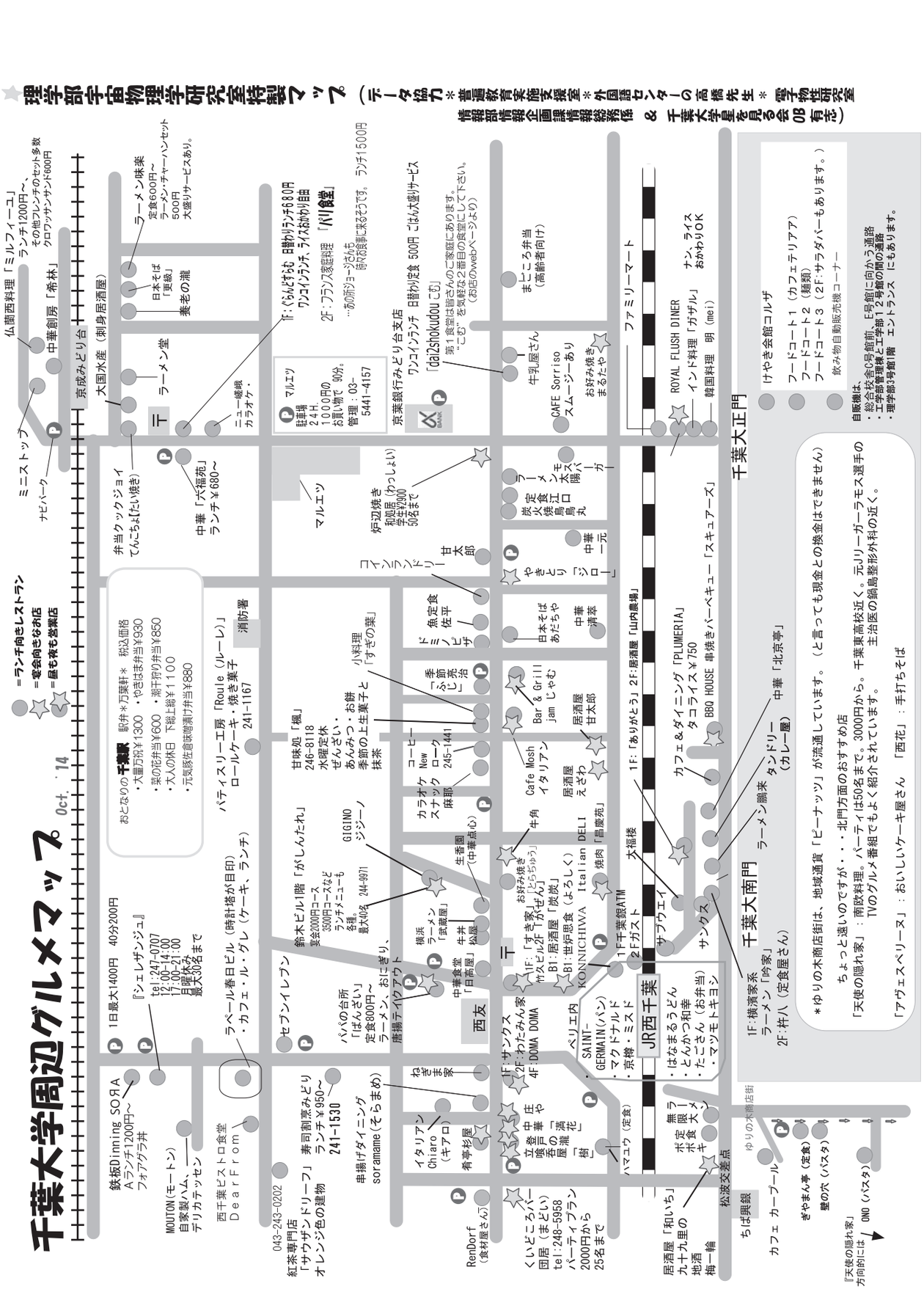
デザインド・リアリティ【増補版】
有元典文・岡部大介 著　四六判　二二〇〇円＋税

コーヒーショップ、焼き肉屋、コスプレ、腐女子、オタク、プリクラ、童貞…。様々なフィールドを対象に人間らしさを支える文化的メカニズムをユニークに論考した半径300mの文化心理学。コンドルズ率いる舞踊家近藤良平氏とのワークショップをもとに増補を行った。

北樹出版
〒153-0061 東京都目黒区中目黒 1-2-6　TEL：03-3715-1525　FAX：03-5720-1488
URL：http://www.hokuju.jp　E-mail：eigyo1@hokuju.jp

あなたの素晴らしいアイデアをここにどうぞ...

あなたの素晴らしいアイデアをここにどうぞ...



日本認知科学会第 32 回大会準備委員会

大会委員長　　伝　康晴(千葉大学)

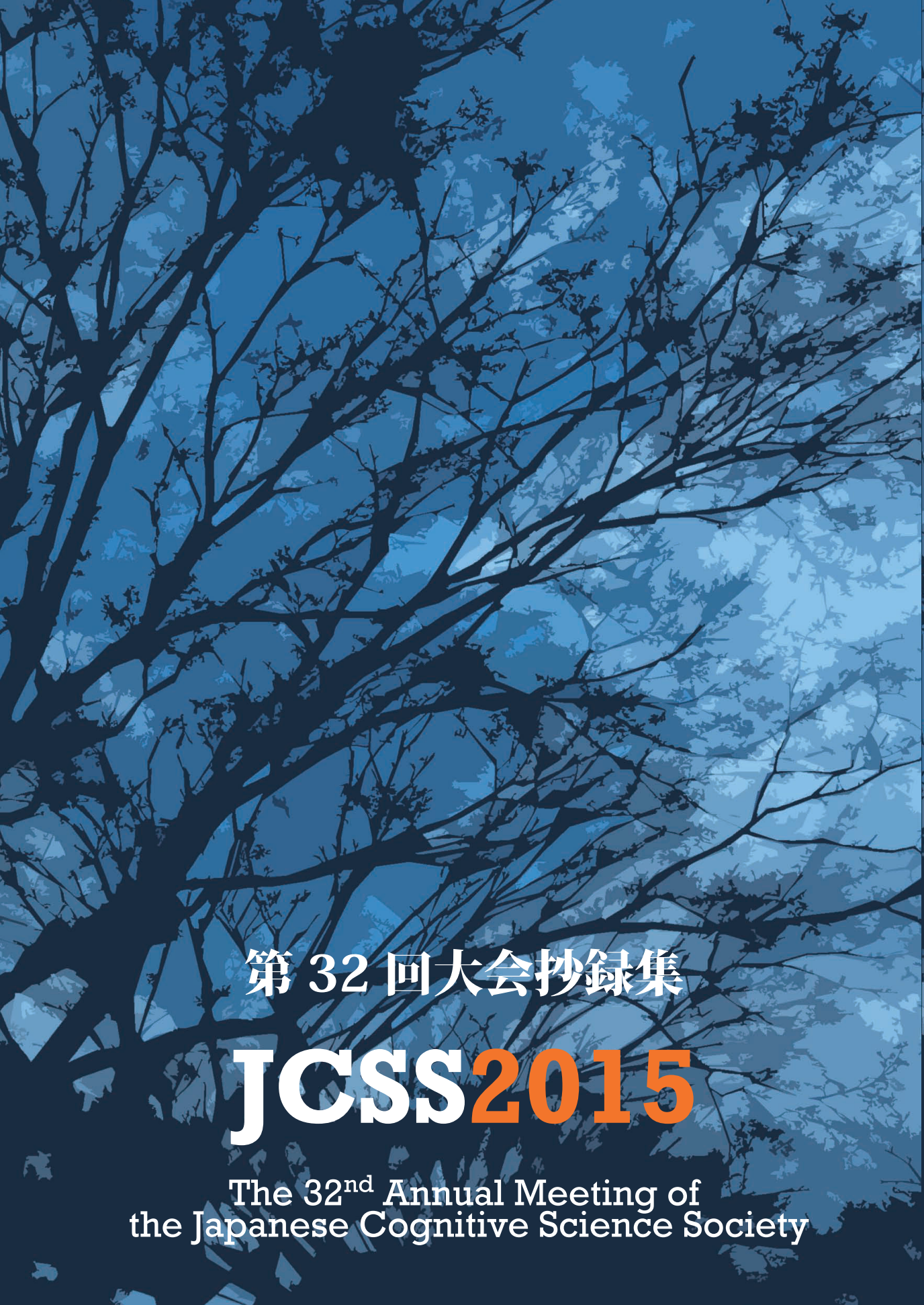
実行委員会
- 委員長　　松香敏彦(千葉大学)
- 委員　　牛谷智一(千葉大学)
- 川端良子(千葉大学)
- 本田秀仁(東京大学)

プログラム委員会
- 委員長　　大西　仁(放送大学)
- 委員　　黒田　航　(杏林大学)
- 小磯花絵　(国立国語研究所)
- 小松孝徳　(明治大学)
- 永井淳一　(聖心女子大学)
- 中村國則　(成城大学)
- 平石　界　(慶応義塾大学)

大会運営システム開発・管理
- 三宅芳雄（放送大学）
- 伴　峰生

連絡先
〒263-8522　千葉県千葉市稲毛区弥生町 1-33
千葉大学文学部
日本認知科学会第 32 回大会委員長　伝康晴

E-mail:
実行委員会：　jcss2015@jcss.gr.jp
プログラム委員会　jcss2015-pc@jcss.gr.jp
URL: http://www.jcss.gr.jp/meetings/jcss2015/index.html


第 32 回大会抄録集
JCSS2015
The 32nd Annual Meeting of
the Japanese Cognitive Science Society